

(2) 土坑

縄文時代の土坑は覆土や遺物の出土状態から判断して64基を確認した。その分布は調査区全域から検出されており、規模、形態はさまざまである。

遺構の所属する時期は縄文時代中期後葉から後期前葉にわたる。土坑は一覧表として第29表に記載し、ここでは特徴的な土坑について記述する。

15号土坑 (第144図、第29表)

本土坑はB4・C4グリッドに位置する。長径は168cm、短径100cm、深さは25cmの規模である。プランは楕円形を呈する。覆土はローム粒子を多く含む暗黄褐色土を主体に堆積する。壁の立ち上がりは急で、床面は平坦である。

18号土坑 (第144図、第29表)

本土坑はC4グリッドに位置する。プランは楕円形を呈し、その規模は長径208cm、短径146cm、深さは27cmである。覆土はローム粒子を多く含む暗黄茶褐色土を主体とする。床面は平坦で、壁の立ち上がりも緩やかである。加曾利BI式に帰属すると考えられる。

20号土坑 (第144図、第29表)

B3グリッドに位置する。土坑の北部は調査区外であるが、プランは概ね楕円形を呈するであろう。西部の一部はピットによって切られる。規模は調査範囲で長径216cm、短径190cm、深さは31cmである。覆土は内容物の乏しい茶褐色土を主体とする。床面は平坦でピットが1基穿たれる。壁の立ち上がりは緩やかである。土坑の帰属時期は縄文時代後期に比定される。

24号土坑 (第145図、第29表)

本土坑はB5、B6グリッドに位置する。プラン西側の一部は調査区外であるが、概ね楕円形を呈する。土坑は45号～47号土坑を切る。規模は調査範囲で長径314cm、短径142cm、深さ22cmである。覆土はローム粒子を多く含む茶褐色土を主体とする。床面は平坦であるが、ピットが5基検出されている。壁の立ち上がりは緩やかである。土坑の帰属時期は縄文後期に比定される。

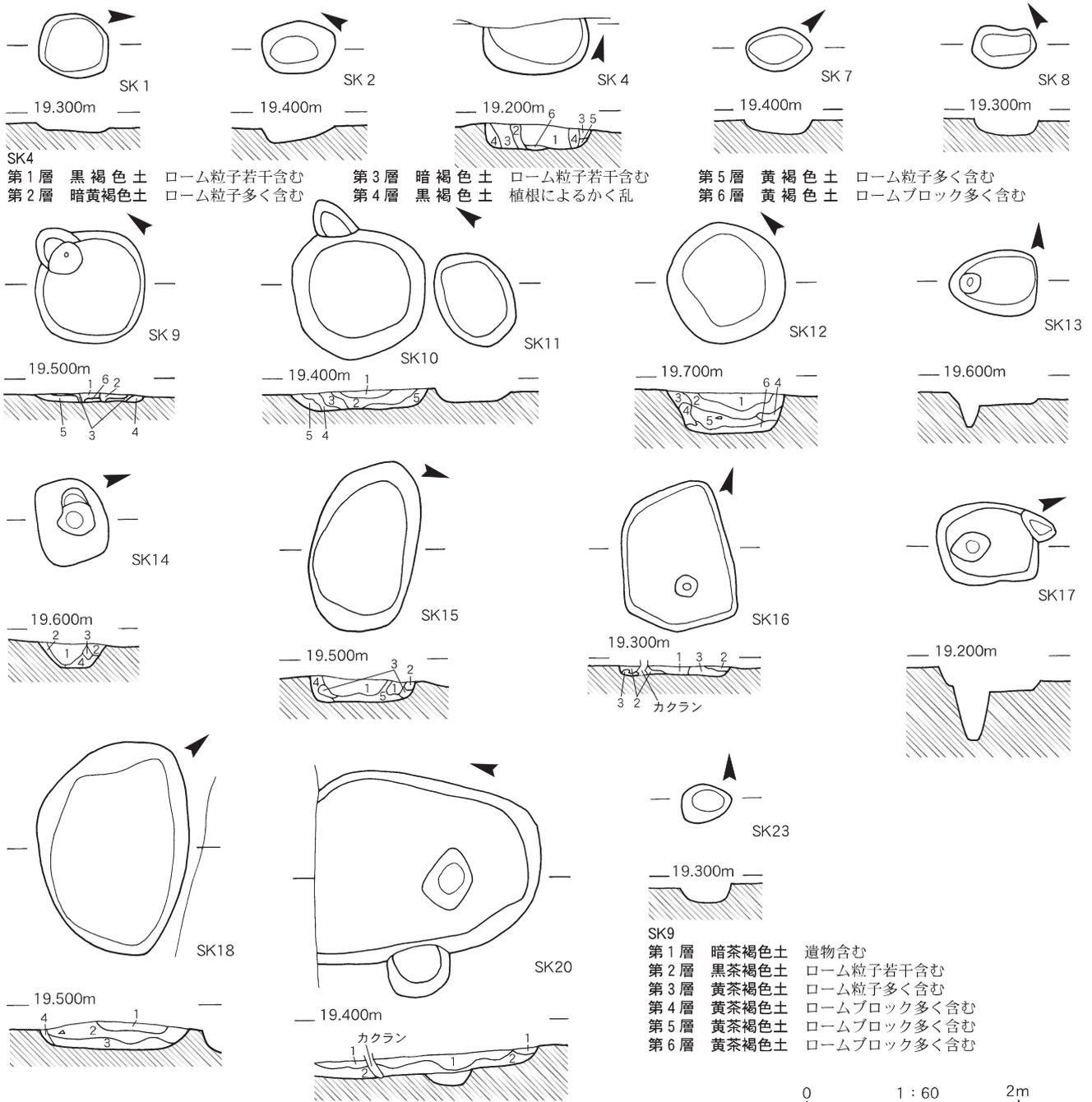
27号土坑 (第145図、第29表)

本土坑はD4グリッドに位置する。プランはL字状で、南側が窪む。規模は長径270cm、短径194cm、深さは16cmである。南北をピットが切る。床面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。土坑の帰属時期は加曾利EI期に比定される。

30号土坑 (第145図、第29表)

C6グリッド付近に位置する。平面形は隅丸の三角形を呈する。規模は長径245cm、短径217cm、深さは18cmである。覆土は炭化物粒子、焼土粒子を含む褐色土を主体的に堆積する。床面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。土坑の帰属時期は縄文時代後期である。

第III章 台地上の調査（第1次～第3次調査）



SK4
 第1層 黒褐色土 ローム粒子若干含む
 第2層 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む
 第3層 暗褐色土 ローム粒子若干含む
 第4層 黒褐色土 植根によるかく乱
 第5層 黄褐色土 ローム粒子多く含む
 第6層 黄褐色土 ロームブロック多く含む

SK9
 第1層 暗茶褐色土 遺物含む
 第2層 黒茶褐色土 ローム粒子若干含む
 第3層 黄茶褐色土 ローム粒子多く含む
 第4層 黄茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第5層 黄茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第6層 黄茶褐色土 ロームブロック多く含む

SK10
 第1層 茶褐色土 植根含む
 第2層 暗茶褐色土 植根含まない
 第3層 茶褐色土 ローム粒子を斑状に含む
 第4層 茶褐色土 植根含む
 第5層 茶褐色土 ロームブロックを多量に含む

SK15
 第1層 黒茶褐色土 ローム粒子若干、炭化物粒子微量含む
 第2層 黄褐色土 ロームを主体とした層
 第3層 暗茶褐色土 ローム粒子若干含む
 第4層 茶褐色土 ローム粒子多く含む
 第5層 暗黄褐色土 ロームを斑状に多く含む

SK12
 第1層 黒茶褐色土 ローム粒子若干含む
 第2層 暗茶褐色土 ローム粒子多く含む、炭化物若干含む
 第3層 茶褐色土 ローム粒子多く、焼土粒子若干含む
 第4層 黄茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第5層 褐色土 ローム粒子若干、炭化物微量に含む
 第6層 暗黄褐色土 ロームブロック多く含む

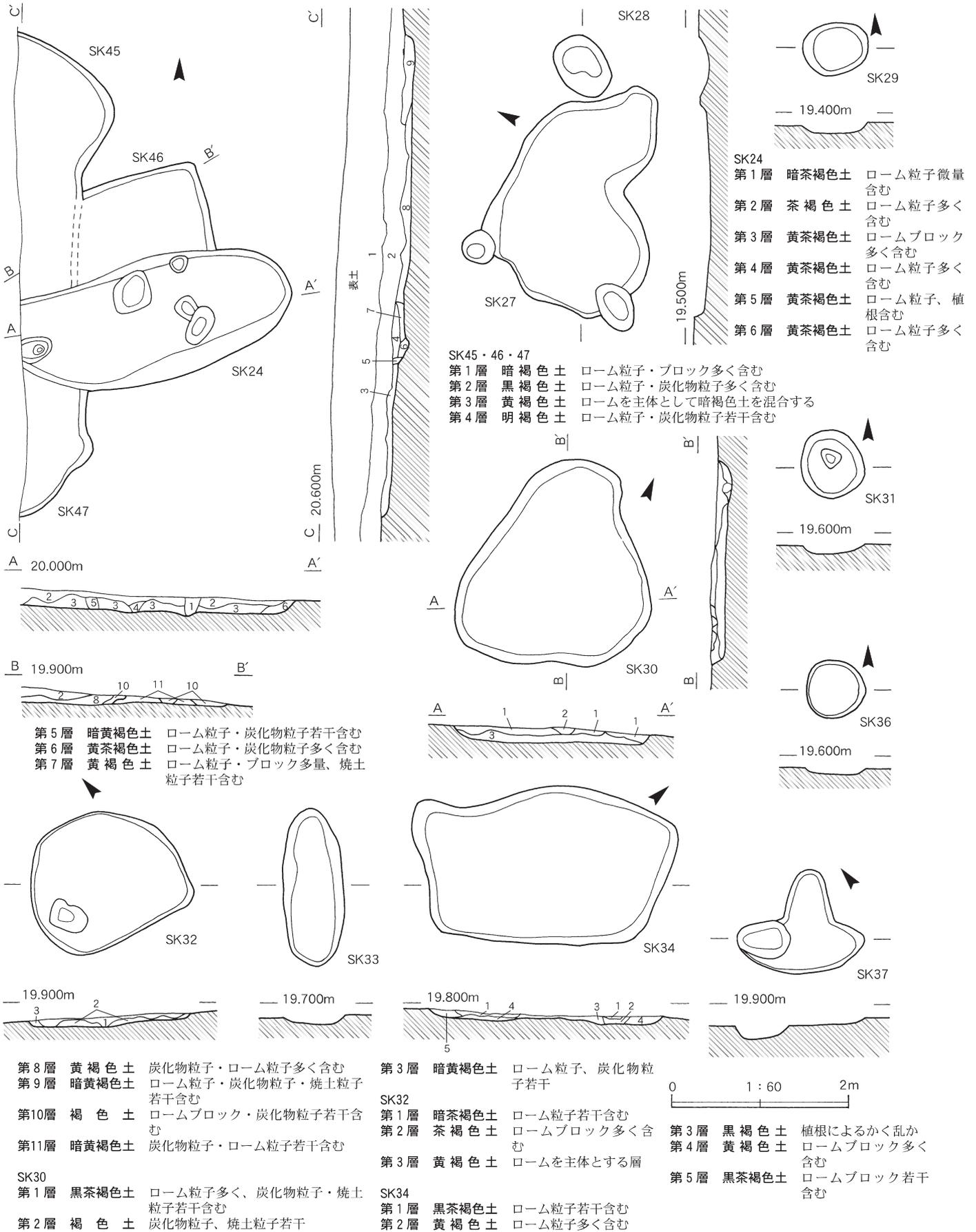
SK16
 第1層 暗褐色土 ローム粒子若干含む
 第2層 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子若干含む
 第3層 茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子微量含む

SK14
 第1層 黒褐色土 ローム粒子若干含む
 第2層 黄茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第3層 黄褐色土 ロームを主体とする
 第4層 黒茶褐色土 ローム粒子若干含む

SK18
 第1層 黒茶褐色土 ローム粒子若干含む
 第2層 暗褐色土 炭化物若干含む
 第3層 褐色土 ローム粒子若干含む
 第4層 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む

SK20
 第1層 灰茶褐色土 ローム粒子、炭化物粒子若干含む
 第2層 茶褐色土 ローム粒子若干、焼土粒子、炭化物粒子微量含む

第144図 土坑（1）



第145図 土坑(2)

32号土坑（第145図、第29表）

C6グリッドに位置し、6号住居跡を切っている。平面形は円形を呈する。規模は長径188cm、短径164cm、深さは15cmである。覆土はロームブロックを含む茶褐色土を主体とする。床面は平坦であるが、西側にピットが1基穿たれる。壁の立ち上がりはやや急である。遺構の帰属時期は縄文時代後期と想定される。

34号土坑（第145図、第29表）

D5グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は長径で305cm、短径186cm、深さは10cmである。覆土はローム粒子を含む黒茶褐色土を主体に堆積する。床面は中央付近がやや盛り上がる。壁の立ち上がりは緩やかである。遺構の帰属時期は加曾利B I式期であろう。

38号土坑（第146図、第29表）

E5グリッドに位置し、4号住居跡の北壁を切っている。平面形は円形と楕円形のプランが接続してL字形を呈する。規模は長径で153cm、短径97cm、深さは最深部で23cmである。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を主体に堆積する。床面は波を打つように凹凸があり、ピット1基が検出された。壁の立ち上がりは緩やかである。遺構の帰属時期は加曾利E I式期と考えられる。

39号土坑（第146図、第29表）

本土坑はB6グリッド、1号住居跡の北側に位置する。ピットを切って構築しており、平面形は円形を呈し、その規模は長径178cm、短径174cm、深さは34cmである。覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土を主体に堆積する。床面は平坦で、東壁の立ち上がりは急である。帰属時期は縄文時代後期と想定される。

46号土坑（第146図、第29表）

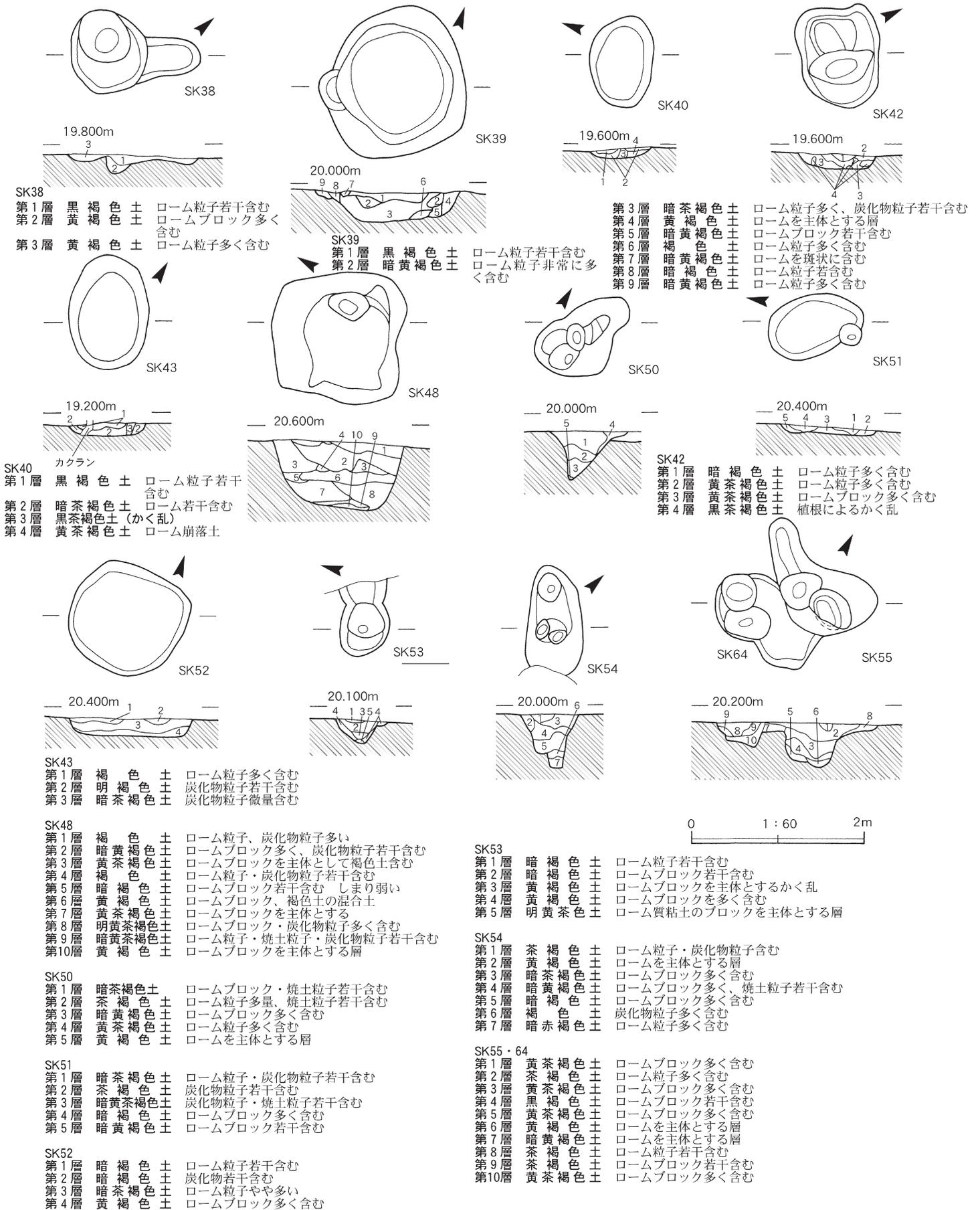
土坑はB5グリッドに位置し、26号、46号、47号土坑に切られ、西半部は調査区外である。平面形は楕円形と想定される。規模は調査範囲で長径304cm、短径113cm、深さは18cmである。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。床面は平坦で壁の立ち上がりはやや急である。遺構の帰属時期は加曾利E I式期に比定される。

48号土坑（第146図、第29表）

土坑はD8グリッド付近で、2号住居跡の南側に位置する。平面形は方形を呈し、規模は長径157cm、短径157cm、深さは80cmである。覆土は大きく上層と下層で分層され、埋没後に再び掘削された形跡がうかがえる。このためロームブロックを多く含む黄茶褐色土が主体となって堆積する。床面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。遺構の帰属時期は加曾利E I式期に比定される。

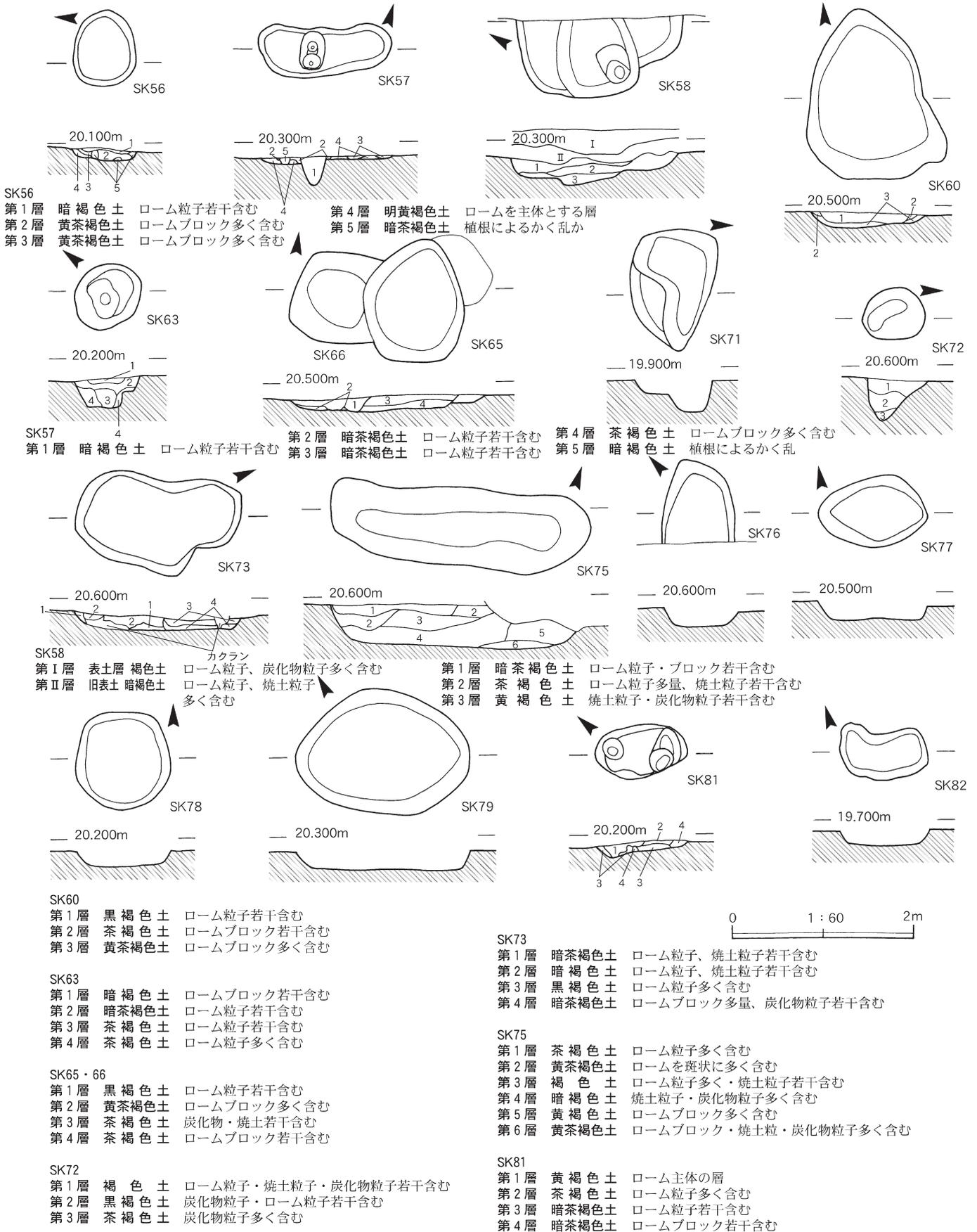
58号土坑（第147図、第29表）

土坑はF6グリッドに位置する。東半部は調査区外であり、平面形は概ね方形を呈すると考えられる。調査範囲の規模は長径188cm、短径88cm、深さは最深部で31cmである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土が主体である。床面は方形の掘り込みがあり、1段低くなっている。ピットが1基壁際に検出された。壁の立ち上がりは急である。遺構の帰属時期は勝坂式期に比定される。

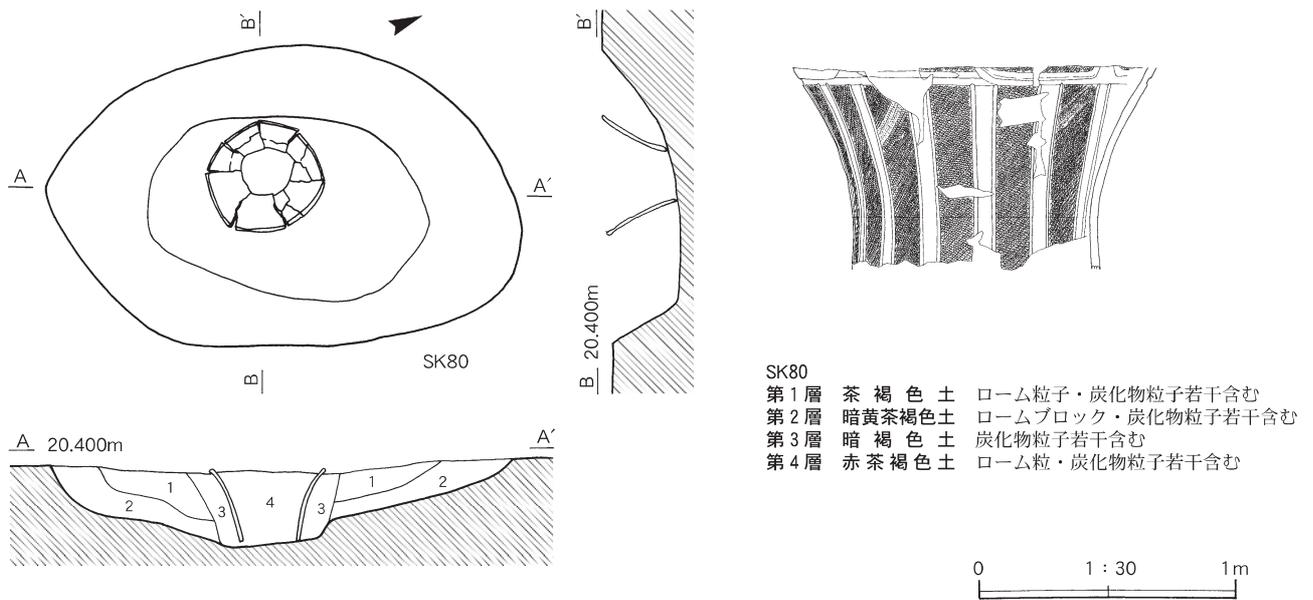
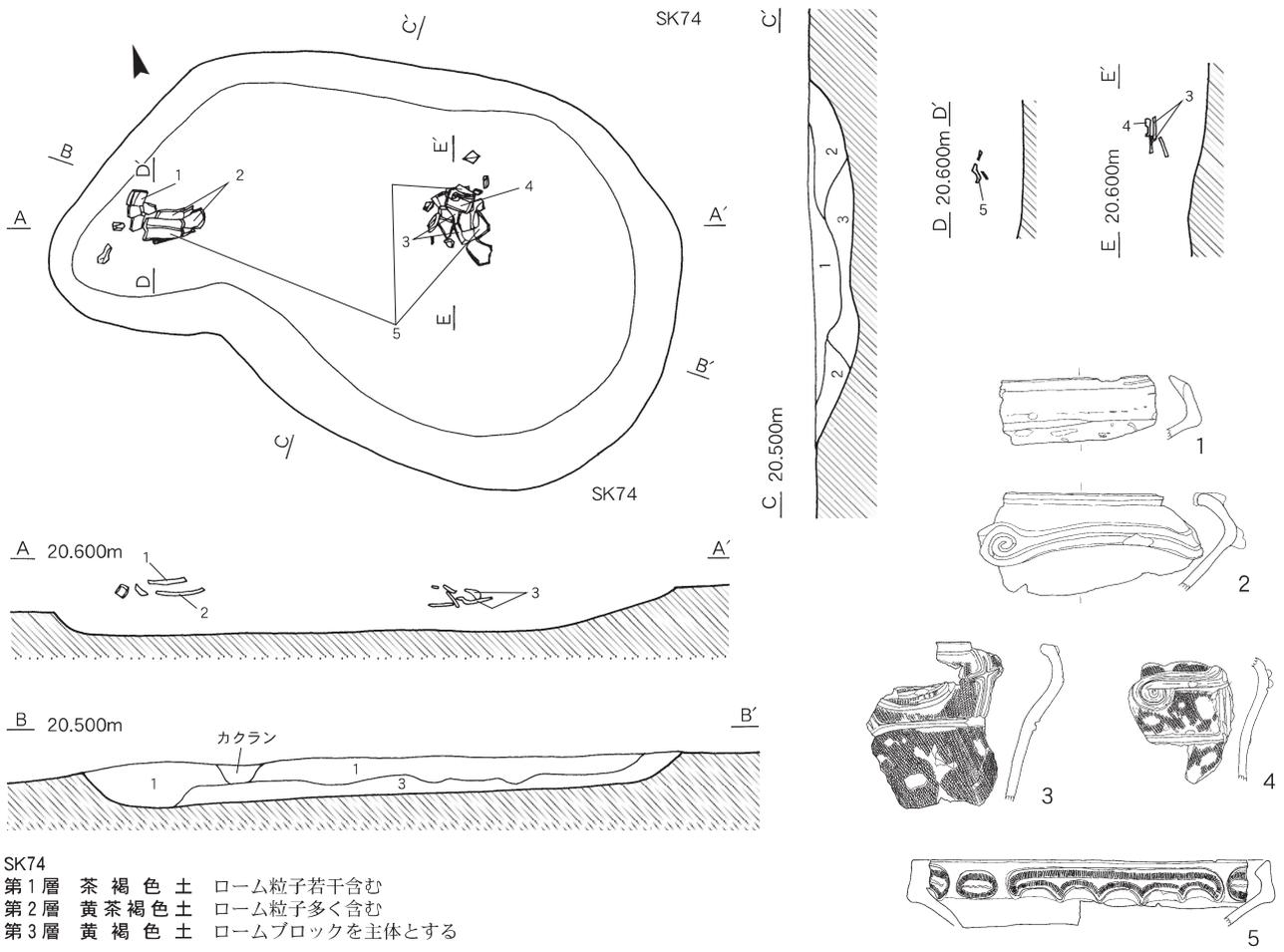


第146図 土坑 (3)

第III章 台地上の調査（第1次～第3次調査）



第147図 土坑（4）



第148図 土坑(5)

63号土坑（第147図、第29表）

C6グリッドに位置し、6号住居跡の東側に隣接する。平面形は円形で、規模は長径70cm、短径52cm、深さは34cmである。覆土はローム粒子を多く含む茶褐色土を主体として堆積する。床面は平坦であるが、壁の立ち上がりは急で、南側に段を有する。遺構の帰属時期は縄文時代中期と考えられる。

65号土坑（第147図、第29表）

D8グリッドに位置する。66号土坑に切られており、ピットを切っている。平面形は隅丸三角形を呈する。規模は長径140cm、短径112cm、深さは17cmである。覆土はローム粒子を多く含む黄茶褐色土を主体に堆積する。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはやや急である。遺構の帰属時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

73号土坑（第147図、第29表）

E8グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径188cm、短径106cm、深さは17cmである。覆土はローム粒子を多く含む黒褐色土を主体として堆積する。床面は南側がやや高く傾斜する。壁の立ち上がりは緩やかである。遺構の帰属時期は縄文中期後葉であろう。

74号土坑（第148図、第29表）

土坑はF8グリッドに位置している。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径340cm、短径215cm、深さは20cmである。覆土はローム粒子を多く含む黄茶褐色土を主体とする。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。覆土上層からまとまった遺物群が2か所検出された。

75号土坑（第147図、第29表）

H10グリッドに位置する。15号住居跡を壊している。平面形は長楕円形を呈する。規模は長径390cm、短径117cm、深さ60cmである。床面は平坦で立ち上がりは緩やかである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土を主体に堆積する。

76号土坑（第147図、第29表）

E11グリッドに位置する。土坑の西半部は調査区外である。遺構の規模は調査範囲で長径125cm、短径110cm、深さは30cmである。床面は平坦で立ち上がりも緩やかである。

77号土坑（第147図、第29表）

F11グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径160cm、短径110cm、深さ30cmである。床面は平坦で、壁は東壁の立ち上がりが急である。

80号土坑（第148図、第29表）

F9グリッドに位置する。底部を欠いた深鉢形土器が埋甕として正置されていた。土坑は平面形が楕円形を呈し、長径250cm、短径155cm、深さは30cmである。覆土はロームブロック、炭化物粒子を多く含む黄茶褐色土が主体となって堆積する。床面は中央部が窪み、壁はここから緩やかに立ち上がる形態である。

第29表 土坑計測表

遺構名	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主軸	形態
1号土坑	A4	68	56	7	N-13°-W	不整円形
2号土坑	A4	70	52	14	N-50°-W	不整楕円形
4号土坑	A3	102	(50)	25	N-69°-E	楕円形
7号土坑	B4	64	42	15	N-43°-E	不整楕円形
8号土坑	B4	62	38	16	N-50°-W	不整楕円形
9号土坑	B4	108	102	9	N-53°-E	不整円形
10号土坑	B4	128	124	19	N-34°-E	不整円形
11号土坑	B4	96	72	12	N-33°-E	不整楕円形
12号土坑	B5	114	116	40	N-48°-E	円形
13号土坑	B5	85	63	32	N-82°-E	不整円形
14号土坑	B5	82	68	23	N-89°-E	不整円形
15号土坑	B4・C4	168	100	25	N-23°-E	不整楕円形
16号土坑	C4	144	108	10	N-29°-W	不整円形
17号土坑	C3	98	81	68	N-19°-E	不整円形
18号土坑	C4	208	146	27	N-52°-W	不整楕円形
20号土坑	B3	(216)	190	31	N-15°-W	楕円形
23号土坑	D3	47	38	17	N-86°-W	不整円形
24号土坑	B5・B6	(314)	142	22	N-83°-E	不整楕円形
27号土坑	D4	270	194	16	N-82°-W	不整円形
28号土坑	D4	77	56	11	N-36°-E	不整楕円形
29号土坑	E4	76	55	12	N-89°-W	不整円形
30号土坑	C6	245	217	18	N-20°-W	不整円形
31号土坑	E5	80	74	10	N-1°-W	不整円形
32号土坑	C6	188	164	15	N-43°-W	不整円形
33号土坑	C5	183	69	10	N-7°-W	楕円形
34号土坑	D5	305	186	10	N-41°-W	不整長方形
36号土坑	E4	68	67	8	N-85°-E	円形
37号土坑	E5	146	120	18	N-48°-W	不整円形
38号土坑	E5	153	97	23	N-42°-E	不整円形
39号土坑	B6	178	174	34	N-35°-W	不整円形
40号土坑	C5	108	77	12	N-82°-E	楕円形
42号土坑	C5	117	100	19	N-66°-W	不整円形
43号土坑	C3	135	93	17	N-64°-W	楕円形
44号土坑	D6	(260)	145	8	N-53°-E	不整円形
45号土坑	B5	(304)	(113)	18	N-4°-E	不整円形
46号土坑	B5	(156)	(102)	11	N-74°-E	長方形
47号土坑	B6	(166)	(76)	9	N-3°-E	不整円形
48号土坑	D8	157	157	80	N-58°-E	不整方形
50号土坑	E5	122	82	59	N-23°-W	不整楕円形
51号土坑	D7	114	72	10	N-31°-W	不整楕円形
52号土坑	D7	134	126	22	N-78°-E	不整円形
53号土坑	F6	(89)	59	28	N-77°-W	不整円形
54号土坑	F6	122	68	64	N-53°-W	不整楕円形
55号土坑	F6	156	96	53	N-64°-E	不整円形
56号土坑	E6	82	72	14	N-89°-E	不整円形
57号土坑	E7	150	57	33	N-31°-E	不整楕円形
58号土坑	F6	188	(88)	31	N-58°-E	不整円形
60号土坑	D8	181	156	18	N-6°-E	不整円形
63号土坑	C6	70	52	34	N-87°-E	不整円形
64号土坑	F6	145	82	30	N-64°-W	不整円形
65号土坑	D8	140	112	17	N-3°-E	不整円形
66号土坑	D8	(103)	(80)	16	N-4°-E	不整円形
71号土坑	C7	138	98	36	N-85°-E	不整円形
72号土坑	D9	70	59	47	N-61°-W	不整楕円形
73号土坑	E8	188	106	17	N-21°-E	不正楕円形
74号土坑	F8	237	157	18	N-78°-W	不整円形
75号土坑	H10	292	88	47	N-74°-E	不整長楕円形
76号土坑	E11	(94)	82	21	N-44°-E	楕円形
77号土坑	F11	122	81	22	N-89°-W	不整楕円形
78号土坑	E7	60	56	18	N-2°-W	不整円形
79号土坑	E8	196	141	23	N-63°-W	不整楕円形
80号土坑	F9	185	120	30	N-60°-E	不整楕円形
81号土坑	E6	104	60	15	N-37°-W	不整楕円形
82号土坑	D5	99	60	17	N-76°-W	不整楕円形

15号土坑出土土器（第149図1～4）

1は阿玉台I b式の胴部片で、突起が外側へ突出し、隆帯に沿って1条の角押文が施される。2は加曾利E I式の胴部片である。懸垂文が隆帯により描かれる。3、4は堀之内I式土器である。3は平行沈線による三角形の横帯文を描く。4は深鉢形土器の底部片である。底面に網代圧痕が残る。

18号土坑出土土器（第149図5～20）

5は諸磯b式の土器である。横位の集合沈線から縦位の沈線が垂下する。6は阿玉台II式土器の口縁部片である。隆帯と口唇部直下に沿って爪形文を施す。7は加曾利E I式の胴部に垂下する蛇行沈線文である。8、9は深鉢形土器の胴部片である。8は隆帯で、9は沈線で懸垂文を施す。10、11は底部片である。11は懸垂文を平行沈線で描く。12は堀之内I式の胴部片で平行沈線が横位に廻り、菱形あるいは三角形の横帯文を描く。

13～17は加曾利B I式の土器である。13、14は深鉢形土器で同一個体である。口唇部に刻みを有し、表面には幅の狭い縄文帯を5条、幅の広いい縄文帯を1条横位に廻らす。15は深鉢形土器の胴部片である。表面には平行する縄文帯が描かれ、裏面には平行沈線が横位に廻らされる。

16、17は浅鉢形土器である。16は内面文のみで、口唇直下は隆帯が横位に廻る。また4条の平行する文様帯が描かれ、蛇行する沈線で繋がれる。口唇部には刻みを加え、一部は波の大きな押圧に変化する。17は内外面に平行沈線を施す。外面はクランク状の沈線で上下を繋ぐ。

18～20は底部片である。18は鉢形土器で、底部から大きく内湾しながら立ち上がる。19は浅鉢形土器で、直線状に立ち上がる器形である。20は深鉢形土器で、底部に網代圧痕が残る。

20号土坑出土土器（第149図21～23）

21は連弧文土器の胴部片である。複数条の弧線文を撚糸文上に描き、内部を磨り消すが、消し切れず列点状に地文が残る。22は深鉢形土器の底部片である。2本一組の沈線による懸垂文を連続して描く。23は縄文後期の土器片で、単節RLの地文が粗く施される。

24号土坑出土土器（第150図24～27）

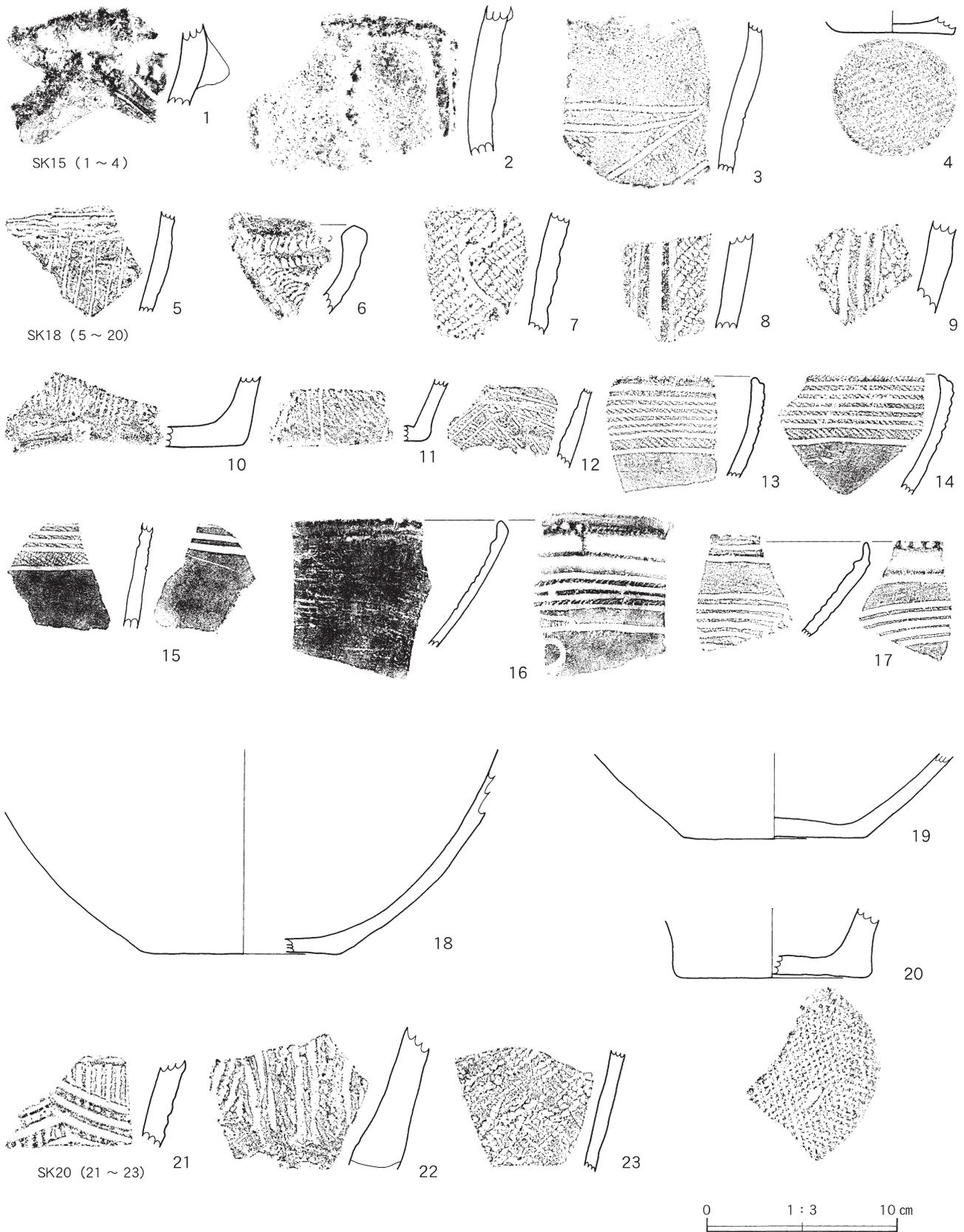
24は加曾利E I式土器である。懸垂文が鋸歯状に垂下する。25は加曾利E II式の胴部片で、3条の平行沈線による懸垂文間は地文を磨り消している。26は縄文後期の深鉢形土器の底部片である。粗製で無節1の地文を施す。27は加曾利B II式の突起部である。端部は円孔を配し、表裏に弧線文を描く。

27号土坑出土土器（第150図28～30）

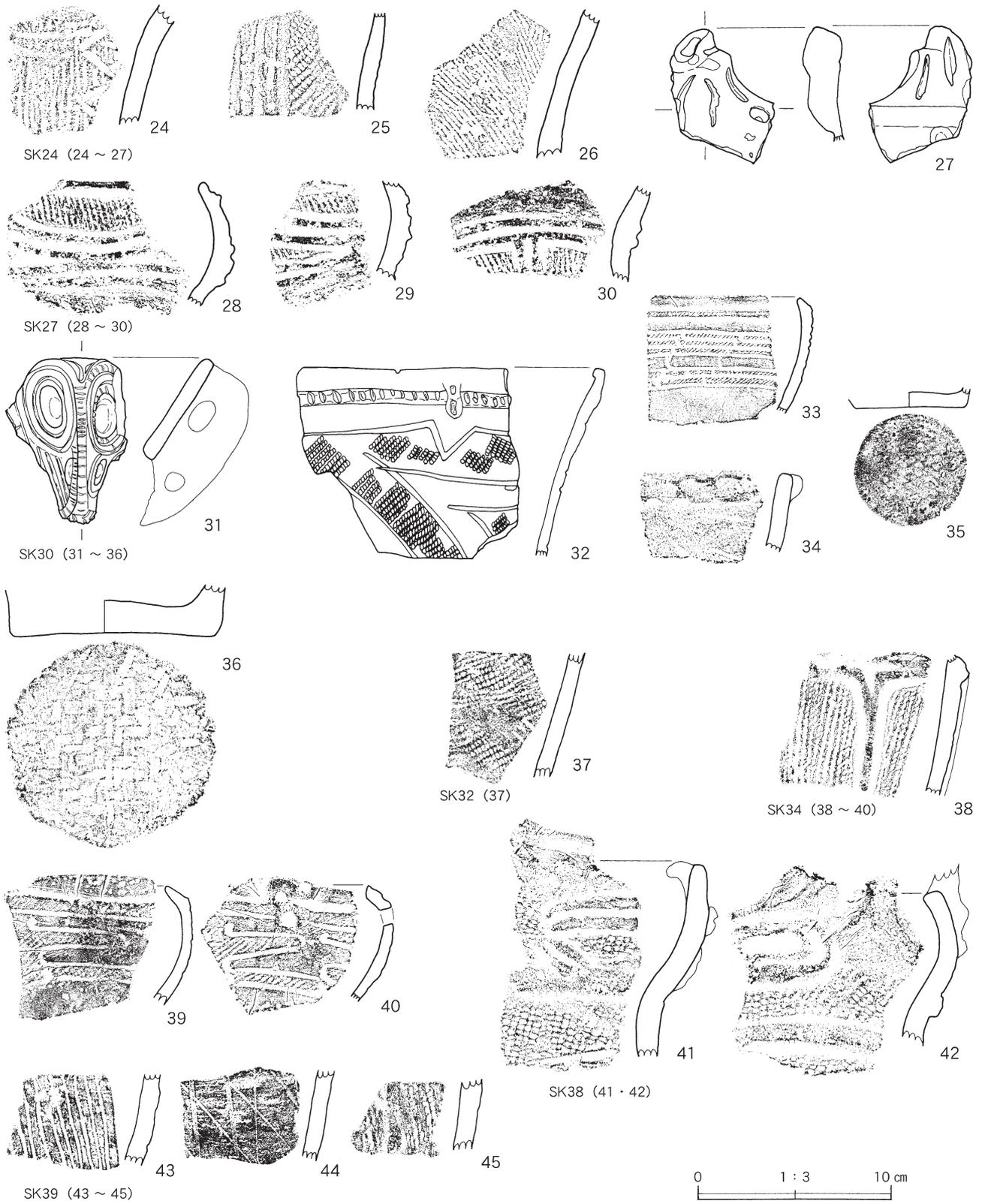
28、29は深鉢形土器の口縁部片で、2本隆帯が地文上を弧状に横走する。頸部は無文帯で、区画は横位の2本隆帯である。30は頸部無文帯から垂下する隆帯による懸垂文である。

30号土坑出土土器（第150図31～36）

31は勝坂Ⅲ式的眼鏡状突起で、上下に大小の貫通孔を有する。貫通孔には同心円の沈線を廻らせるが左側縁の小円には描かない。また、隆帯上の刻みも上部では右側縁のみに加えられ、左側縁は下部に施すなど、非対称に施文する。32は堀之内II式の深鉢形土器である。口唇端が内側に屈曲して沈線状である。口縁部には8字隆帯が配され、刻みをもつ隆帯が横位に廻る。胴部の文様は平行沈線による三角形の横帯文であ



第149図 土坑出土遺物 (1)



第150図 土坑出土遺物（2）

る。33は加曾利 B I 式の浅鉢形土器である。口唇部直下に隆帯が廻り、胴部の文様帯は細い縄文帯が5条平行し、それぞれクランク状の沈線を繋ぐ。34は加曾利 B I 式期の粗製土器で、口唇部直下に紐線文が廻る。35、36は底部片で、底面に網代圧痕が残る。

32号土坑出土土器 (第150図37)

37は縄文後期の粗製の深鉢形土器である。RLの単節縄文を地文とする。

34号土坑出土土器 (第150図38～40)

38は加曾利 E I 式の土器である。頸部を区画する横位の隆帯に沈線を加え、懸垂文が Y 字状である。39、40は加曾利 B II 式で浅鉢形土器である。同一個体であろう。口唇部には突起状に横 S 字形の隆帯を貼付し、直下に貫通孔を設ける。胴部には縄文帯による「つ」字文が対向して配される。

38号土坑出土土器 (第150図41・42)

41、42は同一個体である。深鉢形土器の口縁部片で、2本隆帯によるモチーフが描かれる。口唇部に橋状の突起を複数単位配する。地文は RL の単節縄文で口縁部から頸部まで施す。

39号土坑出土土器 (第150図43～45)

43は縦位の集合沈線による地文を描く。44は胴部に格子目の文様を施す。45は加曾利 E I 式の懸垂文である。

45号土坑出土土器 (第151図46～53)

46は口唇部直下の小渦巻文から隆帯が派生し、大きな渦巻文を描出する。その下端は外側に突出して対称形の渦巻文を配する。47は頸部を区画する隆帯が肥厚して突起状となり渦巻文を配する。下端には46と同様に渦巻文を施す。48は頸部無文帯の直上の隆帯に連続した刺突文を施す。49は胴部片で、蛇行沈線による懸垂文が連続する。50は頸部の地文で、RLの単節縄文を施す。51は頸部と胴部を区画する横位の文様帯で、隆帯下に沈線が廻り、その直下に小波状の沈線文を施文する。52、53は同一個体である。下端の文様がともに大きく剥落するが、口縁部の区画文内は集合沈線を充填する。

48号土坑出土土器 (第151図54～58)

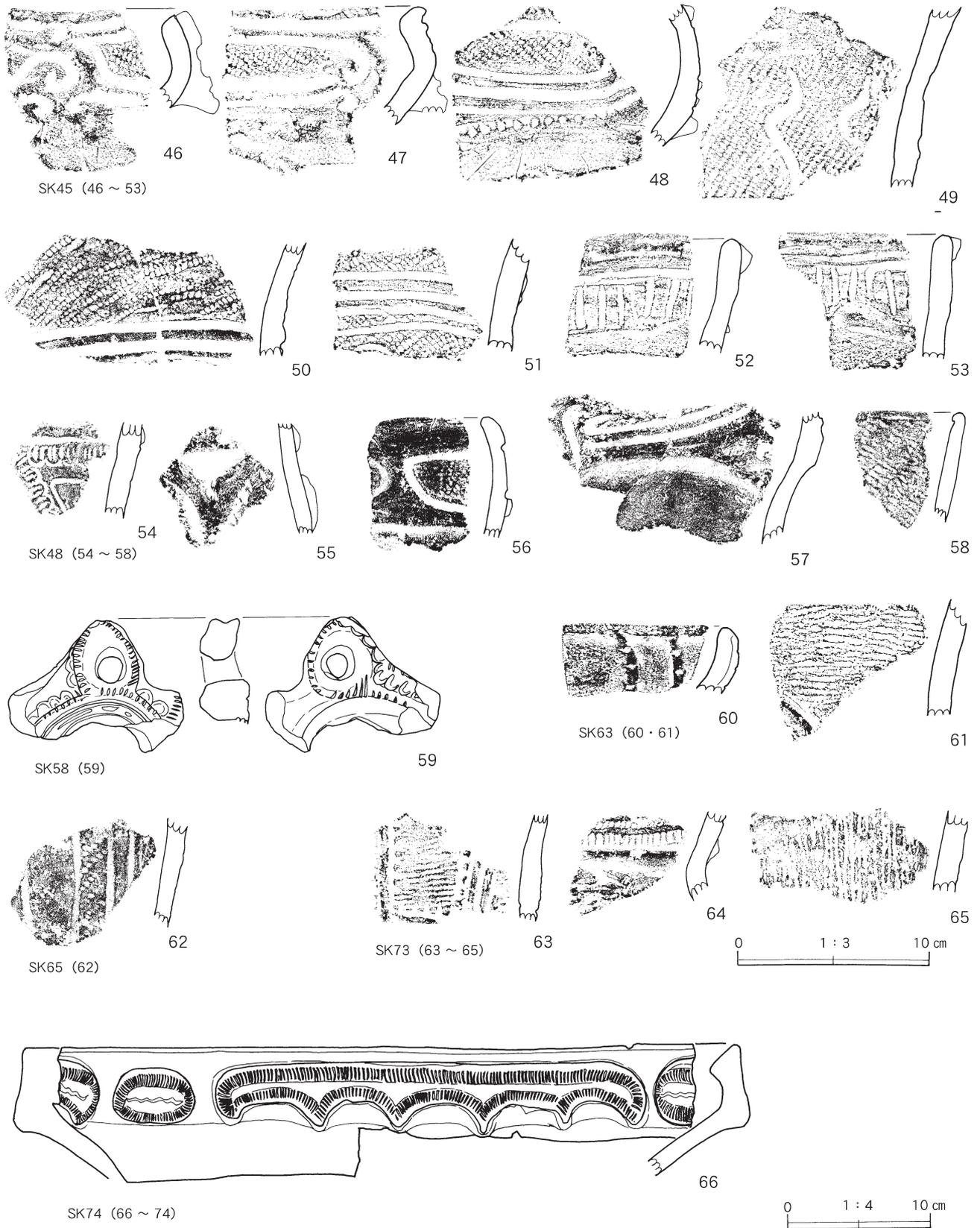
54は勝坂 II 式の土器で、蓮華文を隆帯に沿って施す。55は阿玉台 I b 式の土器で、Y 字状に垂下する隆帯に沿い、角押文を1列施す。56、57は加曾利 E I 式の土器である。56は楕円形区画文が横位に連続する。57は頸部に広い無文帯を設け、口縁部では2本隆帯によってモチーフを描く。58は堀之内 II 式の粗製土器である。内側の口唇部直下は沈線状で、前面は RL の単節縄文を地文とする。

58号土坑出土土器 (第151図59)

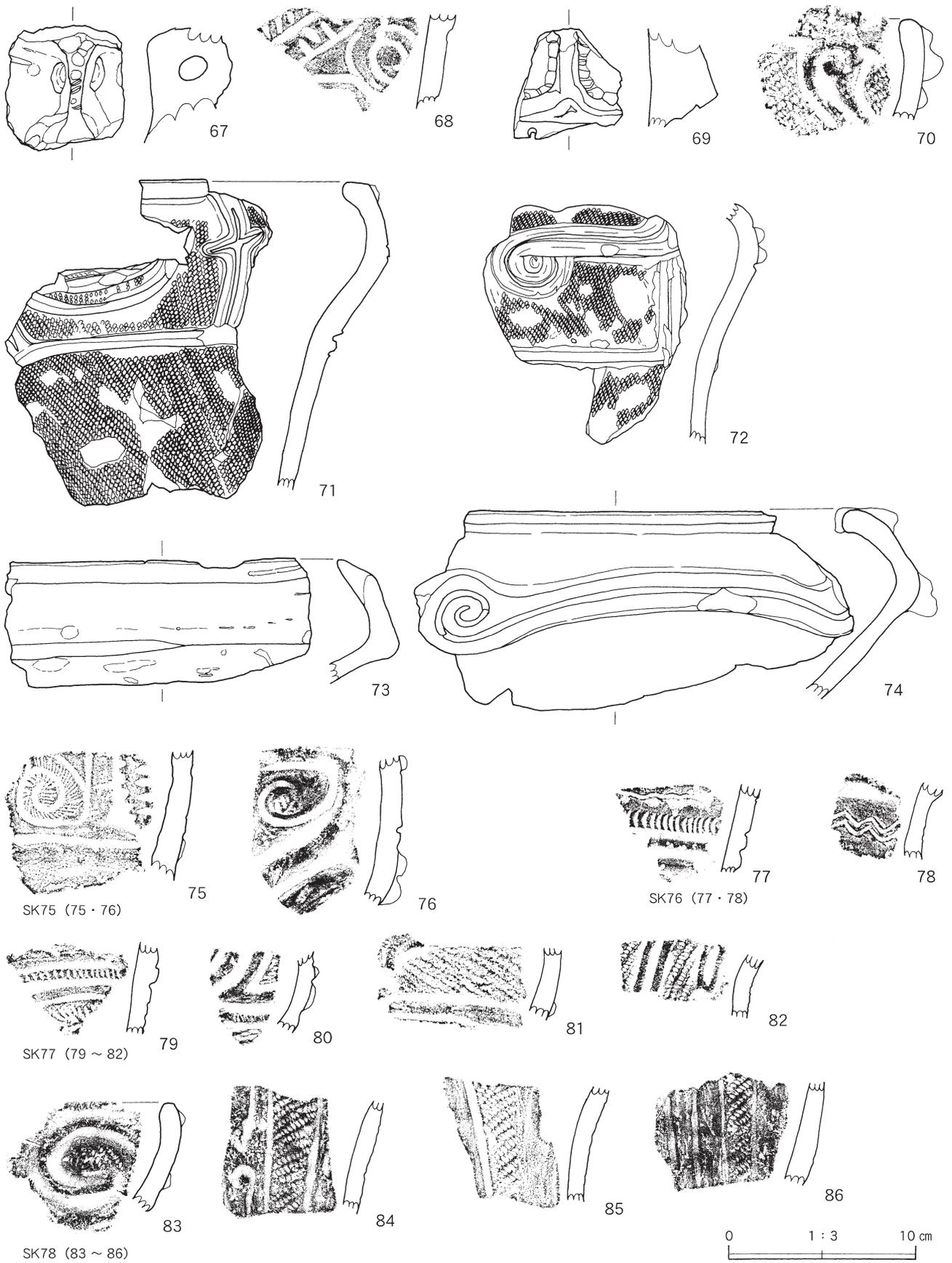
59は橋状突起で、端部と胴部に貫通孔を設ける。左右非対称形で、表裏ともに隆帯、口唇部へ蓮華文を施す。

63号土坑出土土器 (第151図60・61)

60は阿玉台 I b 式の土器である。平口縁で口唇部は外側に張り出し、刻みを有する弧状の隆帯を垂下す



第151図 土坑出土遺物（3）



第152図 土坑出土遺物(4)

る。61は加曾利 E1 式の深鉢形土器の胴部片である。隆帯による懸垂文を施す。

65号土坑出土土器（第151図62）

62は深鉢形土器の胴部片である。沈線による懸垂文を縦位に施し、磨り消しによる縄文帯を配する。

73号土坑出土土器（第151図63～65）

63、64は勝坂Ⅱ式の土器である。63は隆帯による方形の区画文内に半裁竹管とヘラ状工具により刺突文を描く。64は隆帯に沿って複数列の爪形文を施す。65は加曾利 E 式の土器で、深鉢形土器の胴部片である。燃糸文を地文とする。

74号土坑出土土器（第151・152図66～74）

66は浅鉢形土器である。第1次調査の8号住居跡から出土した一部の資料と接合した。口縁部で内屈し、口唇部は先鋭して内側に張出し稜をもつ器形である。口縁部文様帯は器面を窪ませ、5連の扁平隆帯による長楕円形区画文を配する。ともに区画内に爪形文が沿い、波状沈線文を1列施す。復元口径は50cmと大型である。残存高は9cmである。胎土には細礫を含み、色調は内外面ともに茶褐色を呈し、焼成は良好である。勝坂Ⅱ式と思われる。

67は勝坂Ⅲ式の胴部に貼付される眼鏡状突起である。左右方向の貫通孔を有する。68は勝坂Ⅲ式の土器である。斜行する隆帯に交互の短沈線を施す。区画内部は弧状の沈線文が充填される。69は阿玉台 I b 式の土器である。隆帯に沿って1列の角押文を施す。

70～74は加曾利 E I 式の土器である。70は口縁部片で、2本隆帯の端部に小渦巻文がやや突起状に張り出す。71、72は同一個体である。地文は無節 r を全面的に施す。71は2本隆帯による十字文を縦位に配する。72は口唇部直下の隆帯から派生した2本隆帯の端部に渦巻文を配する。73は浅鉢形土器で無文である。胴部は浅く直線的で、頸部が口唇部に至る箇所強く内屈する。口唇部は内側に庇状で、片口状に一部を欠く。74は胴部が直線的に立ち上がり、屈曲部でモチーフが肥厚して内屈する。口唇部は平坦で、内外に庇状である。屈曲部の文様帯は2本隆帯を弧状に横走させ、突起状に肥厚させた渦巻文を配する。

75号土坑出土土器（第152図75・76）

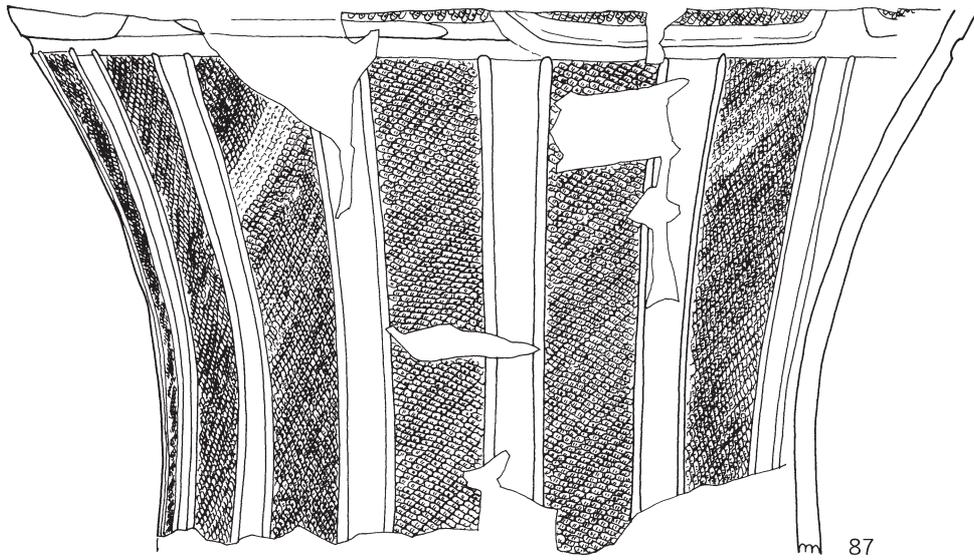
75は勝坂Ⅲ式の土器である。口縁部無文帯の直下に縦位の区画文を半肉彫状に描く。垂下する隆帯には交互短沈線、渦巻文には爪形文を施す。76は加曾利 E I 式土器である。隆帯に沿って施した沈線が変化し、渦巻文を描く。

76号土坑出土土器（第152図77・78）

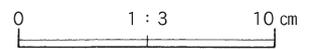
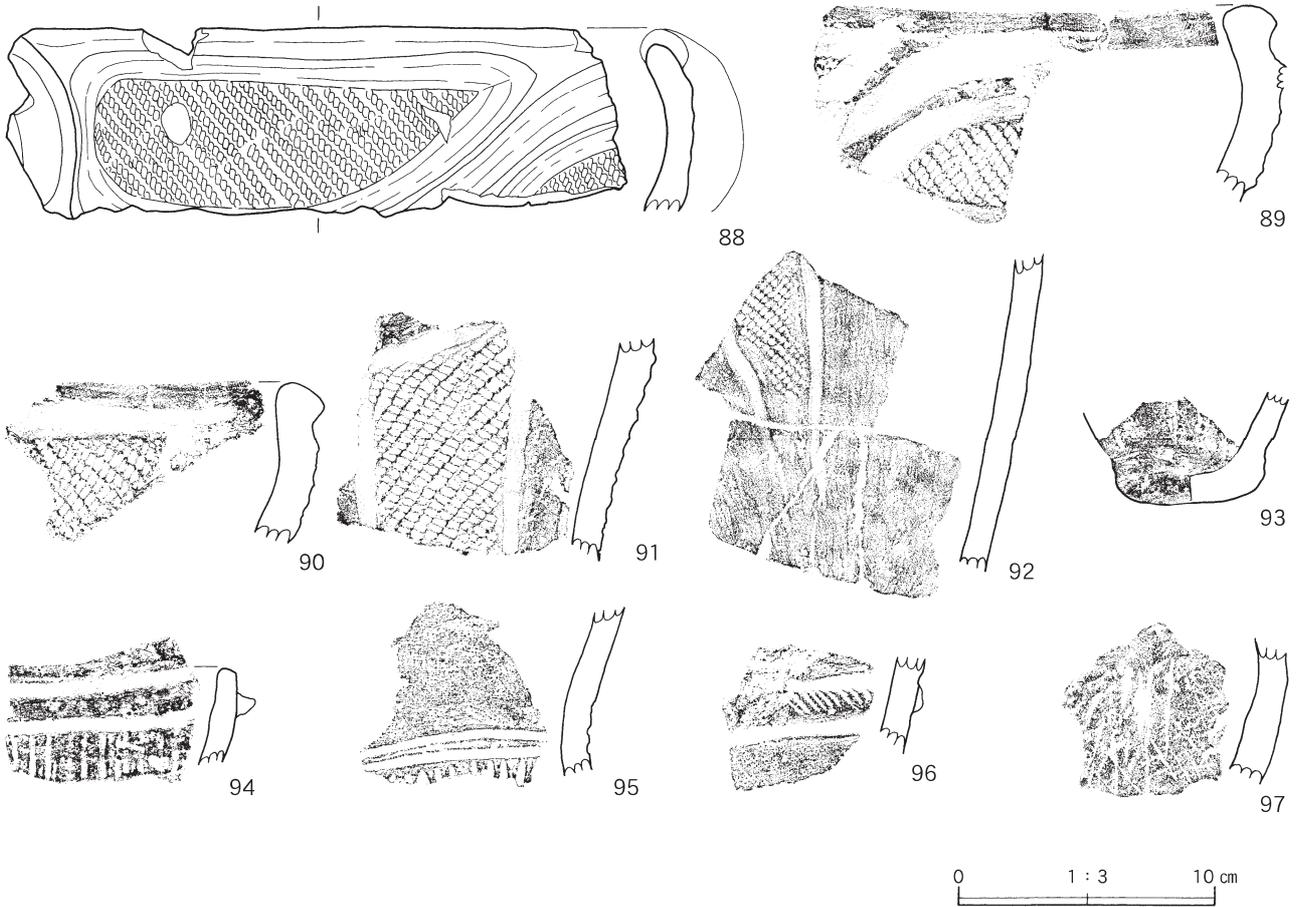
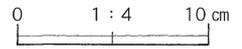
77は勝坂Ⅲ式の胴部片で、平行する隆帯に沿って爪形文と波状沈線文を施す。78は阿玉台 I b 式で、半裁竹管による小波状文を横位に施す。

77号土坑出土土器（第152図79～82）

79は勝坂Ⅲ式の土器で、平行する斜状の隆帯、沈線で区画文を描く。80～82は加曾利 E I 式である。80は頸部と胴部を2本隆帯により区画する。81は弧状のモチーフが垂下する。82は胴部片で懸垂文が平行する。



SK80 (87 ~ 97)



第153図 土坑出土遺物 (5)

78号土坑出土土器（第152図83～86）

83～86は加曾利EⅢ式の土器である。83は口縁部片で隆帯により渦巻文を施し、裾部は丁寧に磨り消している。84～86は胴部片で磨り消し懸垂文を描く。84は沈線により対向する蕨手文を配する。

80号土坑出土土器（第153図87～97）

87～90は埋甕として検出された深鉢形土器で、同一個体である。器形は胴部から外反して立ち上がり、口縁部で内湾する。口縁部文様帯は隆帯が横走しながら楕円形区画文を構成すると考えられる。口縁部直下には太い沈線を廻らせ、縄文帯と磨り消し懸垂文を交互に配し、それぞれ8単位を描く。胴部の地文は複節RLRの縄文を縦位に施している。土器の復元口径は51.0cmで、現存高は28.0cmである。胎土には片岩の細礫を含む。内外面ともに茶褐色を呈し、焼成は良好である。加曾利EⅢ式である。

91、92は深鉢形土器の胴部片で、ともに磨り消しの懸垂文を描く。91は頸部直下、92は底部付近である。93は底部片で、底径は5cmである。

94は加曾利EⅠ式土器で、波状口縁を呈する。95、96は勝坂Ⅲ式の土器である。95は隆帯上に爪形文を施す。96は頸部に広い無文帯を有する。97は縄文後期の土器片と思われ、粗い格子目文を描く。

（3）グリッド出土土器（第154図）

ここではグリッド及び縄文時代以外の遺構から出土した縄文土器を一括して掲載した。

1～7は勝坂式土器である。1は山形状突起である。周縁は爪形文で縁どる。正面は沈線による渦巻文を充填し、裏面は円形の窪みに沿って沈線を施す。2も同様に山形状突起で、左側縁に円孔を施す。右側縁には爪形文を有する隆帯が蝸局状に巻き上がる。3は円筒形を呈する深鉢形土器で、口唇部直下には斜状の集合沈線と隆帯を施す。4は隆帯に綾杉状の刻みを施す。楕円形の区画文内は半裁竹管による蓮華文を描く。5は隆帯に沿った爪形文である。小波状の沈線を平行して施し、蓮華文を構成している。6は楕円形の区画文が押し引きの爪形文を施した隆帯で描く。7は集合沈線が矩形のモチーフを描く。

8～11は阿玉台式土器である。8は山形状の突起である。波頂部から隆帯が垂下し、口縁部文様帯の下部で外側に突出する。隆帯を挟んで対向する楕円形区画文を描く。9は扇状の把手である。台形状を呈し頂部直下に楕円形の貼付文を配し、ここから隆帯が垂下する。隆帯に沿って2列の角押文を施す。10は隆帯に沿って2列の角押文を施す。11は波状口縁の頂部で、口縁に沿って隆帯を貼付する。輪積痕上に指頭圧痕が認められる。

12は加曾利EⅠ式の土器で、胴部片である。蛇行隆帯が垂下する。13は加曾利EⅢ式の土器で、頸部の隆帯から磨り消し懸垂文を施す。

14は浅鉢形土器で、口縁部文様帯の隆帯を弧状に貼付し、端部は丸く肥厚する。角押文が隆帯沿いに施され、楕円形区画文内も角押文でモチーフを描く。勝坂Ⅱ式である。

15、16は波状口縁の頂部である。15は口唇部に沈線を施し、右側縁部は小渦巻文を描く。波頂部の直下には貫通孔を施す。16は無文である。波頂部の直下が外側に突出し、内面は凹む。

17～19は縄文後期の土器である。17は格子目文を器面に描く。18は浅鉢形土器の底部片である。19は深鉢形土器の底部片である。18、19はいずれも底面に網代の圧痕を有している。

（4）漆塗土器（第155図）

第2次調査区から検出された漆塗土器を一括した。いずれも破片資料であり、塗彩の遺存状態も良くない

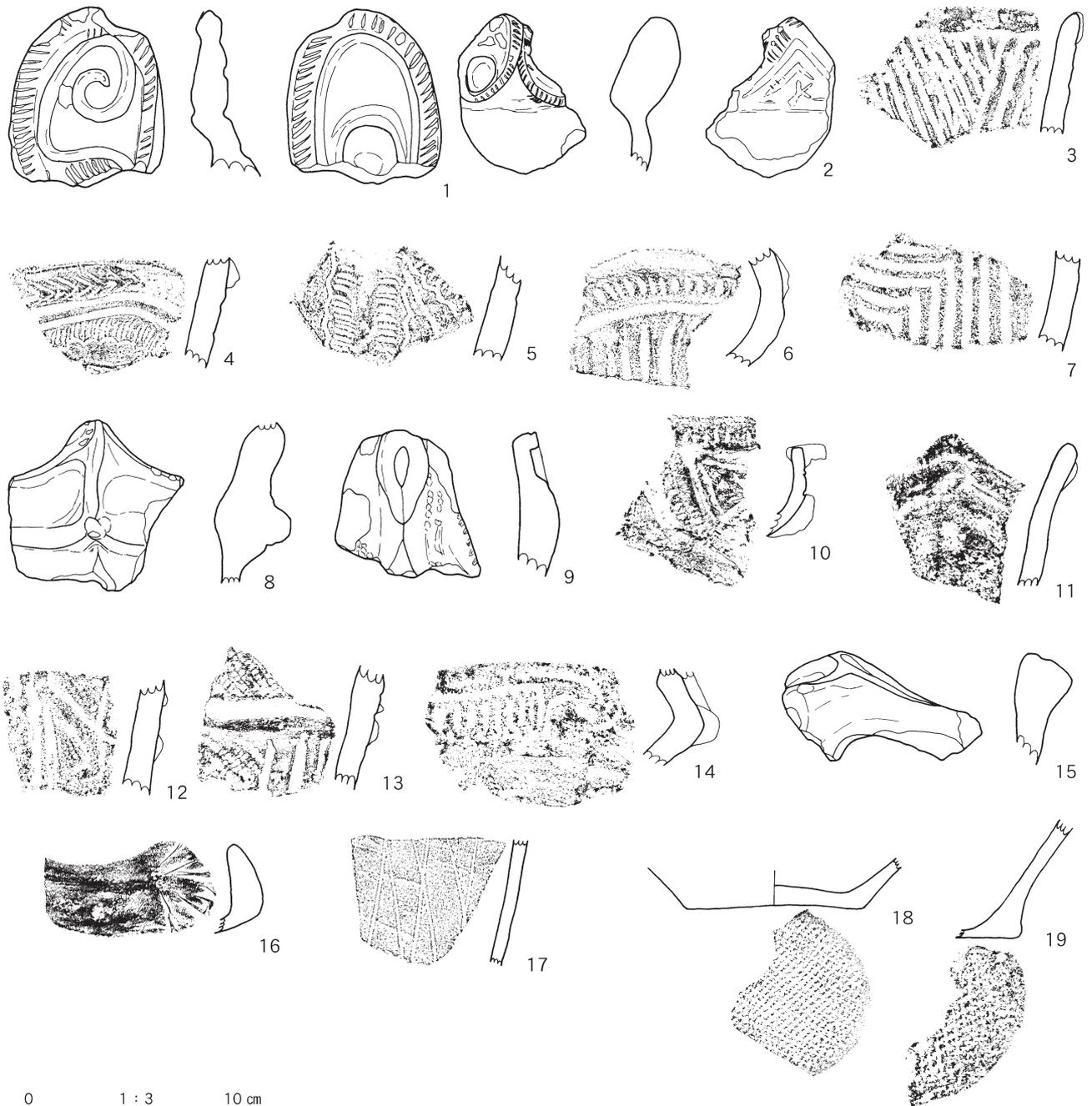
が、彩色については極力表現した。

2号住居跡出土漆塗土器 (第155図 1、2)

1、2とも浅鉢形土器である。1は端部が先鋭し、2は口縁部が矩形に肥厚する。1は黒漆を下地とし、口縁の肥厚部に帯状の赤漆を塗布する。2は外面の口縁部から胴部にかけて、わずかに赤漆が残る。

7号住居跡出土漆塗土器 (第155図 4)

4は堀之内式の深鉢形土器である。格子目文を施し、横位に帯状の赤漆が塗彩される。内面にも同様に塗彩痕が認められる。



第154図 グリッド出土土器

8号住居跡出土漆塗土器（第155図3）

3は外反する浅鉢形土器の口縁部片である。内面に赤漆が塗彩されている。

10号住居跡出土漆塗土器（第155図5～9）

5は胴部上半に最大径をもつ浅鉢形土器である。黒漆を下地とし、赤漆でモチーフを描いた痕跡が内外面ともに認められる。6は内面に黒漆を下地として塗り、赤漆による帯状のモチーフを描く。7は内外面ともに黒漆と赤漆の塗彩が認められる。8は土製円板として再利用された資料である。土器の内側に赤漆の塗彩



第155図 漆塗土器

が認められる。9は浅鉢形土器の胴部片で内外面に塗彩痕が認められる。

11号住居跡出土漆塗土器（第155図10）

10は浅鉢形土器の屈曲部で、連鎖状の隆帯を施す。外面に赤漆を塗彩し、内面に黒漆を塗彩する。

12号住居跡出土漆塗土器（第155図11、12）

11は勝坂式土器である。口縁の肥厚部に黒漆を下地として赤漆を重ねて塗彩する。12は浅鉢形土器で、内面に赤漆の塗彩が認められる。

16号住居跡出土漆塗土器（第155図13）

13は浅鉢形土器の口縁部直下の資料で、内外面に赤漆の塗彩が認められる。

（5）石器（第148図～158図）

第2次調査区は第1次調査区に北接する。台地部の調査であり、多くの住居跡や土坑が検出されているため、その覆土中より出土した例が多い。土坑内出土の石器例についても明確に原位置を保って出土したと判断される例はなかった。総量は約102kgを計り、第1次調査と同様に利器として抽出した資料はほぼ全てを図示した。

1～3は尖頭器としたが、1はいわゆる木葉形の典型的な尖頭器の下半部で、丁寧な調整剥離が施される。2、3はやや不明確ではあるが、この器種とした。3は細身の形態で、横断面形が扁平であり、石鏃の可能性も否定できない。

4～25、27、40は石鏃である。11、23、25は未成品とも考えられるが、23、25がともに15号住居跡覆土の出土であることは興味深い。基部の抉りについては、浅い物（5、7、13、14、20、22、27）や深い物（10、17）などバラエティーに富むが、いずれにせよ全て抉りを有する。また、大きな欠損を示すものに6、21、27、先端部や翼部をわずかに破損したものに16、20があるが、全体的に欠損品は少ない印象を受ける。

28～31、46の5点は石錐に分類される。28、29はわずかに先端部を欠損する。46は先端部が磨滅している。

26、32～39、41～45、47～53はスクレーパーで主に削器的機能を有するものや使用痕のある剥片類を図示した。26は形態的には石鏃に類似するが、その調整のあり方から使用痕ある剥片と考えられる。

54～56は1号住居跡覆土からの出土で、54は打製石斧、55、57は棒状の磨石で、いずれも欠損している。56は多孔石で、緑泥片岩を用いており、石皿の再利用であろう。中央上部の穴は貫通している。129はやや楕円の碁石状の礫であるが、非常によく研磨されている。

58～64は2号住居跡覆土からの出土で、58～61は打製石斧であるがいずれも下半部を欠損している。62は大型のスクレーパーであろう。63は打製石斧の欠損後に再利用したスクレーパーの可能性はある。64は棒状の礫を用いた磨石であろう。

65～71は3号住居跡覆土からの出土資料で、65～70の6点は打製石斧である。65は下半を欠損し、66は頭部、刃部とも欠損しているが、67～70の4点はほぼ完形品である。特に69は多孔石（石皿）を転用している。71は磨製石斧の欠損品であろう。

72は棒状の礫を材とした磨石で、73は一部に自然面を残す打製石斧の刃部の欠損品である。74は石皿の破片であろう。

75～89は7号住居跡覆土から出土したもので、75～84は打製石斧である。75～77、79～81は完形品で、

78、82～84は欠損品である。82以外は頭部を欠損した刃部を残す例である。76は多孔石を転用した例で、69同様に本遺跡内で製作された可能性がある。85～89は磨石で、一部に敲打痕が認められる。86は特に敲打痕が顕著である。

90～109は8号住居跡の覆土から出土した資料で、90～96、98～102は打製石斧である。90、91、102は表裏両面に自然面を残すことから扁平な棒状の礫を素材としている。96、99、101は横長剥片を素材としているが、99、101は器肉が薄く重量感に乏しい。97は調整剥離の状況からスクレーパーと思われる。103～109は磨石、敲打器の類である。107は欠損しているが、磨きの痕跡が明瞭で、表裏両面に対になるように浅い凹みが認められる。

110～130、132は10号住居跡の覆土から出土したもので、110～117は打製石斧である。110～112は短冊状の形態で、111は表裏に自然面を残し、扁平な縦長の礫を用いている。118、119はスクレーパーである。

120～124、126～130は磨石、敲き石の類で、125は凹石である。126は表裏両面に小さな窪みが認められる。130は扁平な棒状の素材を用い両端が欠損する。器面は良く研磨され、石質も緑色岩で磨製石斧の可能性もあるが、断面形態から磨石ないし敲打器とした。

131、133～135は11号住居跡覆土からの出土資料である。131は粗雑な剥離で調整されたスクレーパーとした。打製石斧の欠損品を再利用した可能性がある。133は頭部を欠損した磨製石斧、134は棒状の磨石、135は凹石である。

136～144は12号住居跡覆土からの出土資料である。136～139はいずれも打製石斧の欠損品である。141～144は棒状の礫を素材とした磨石ないし敲打器であろう。

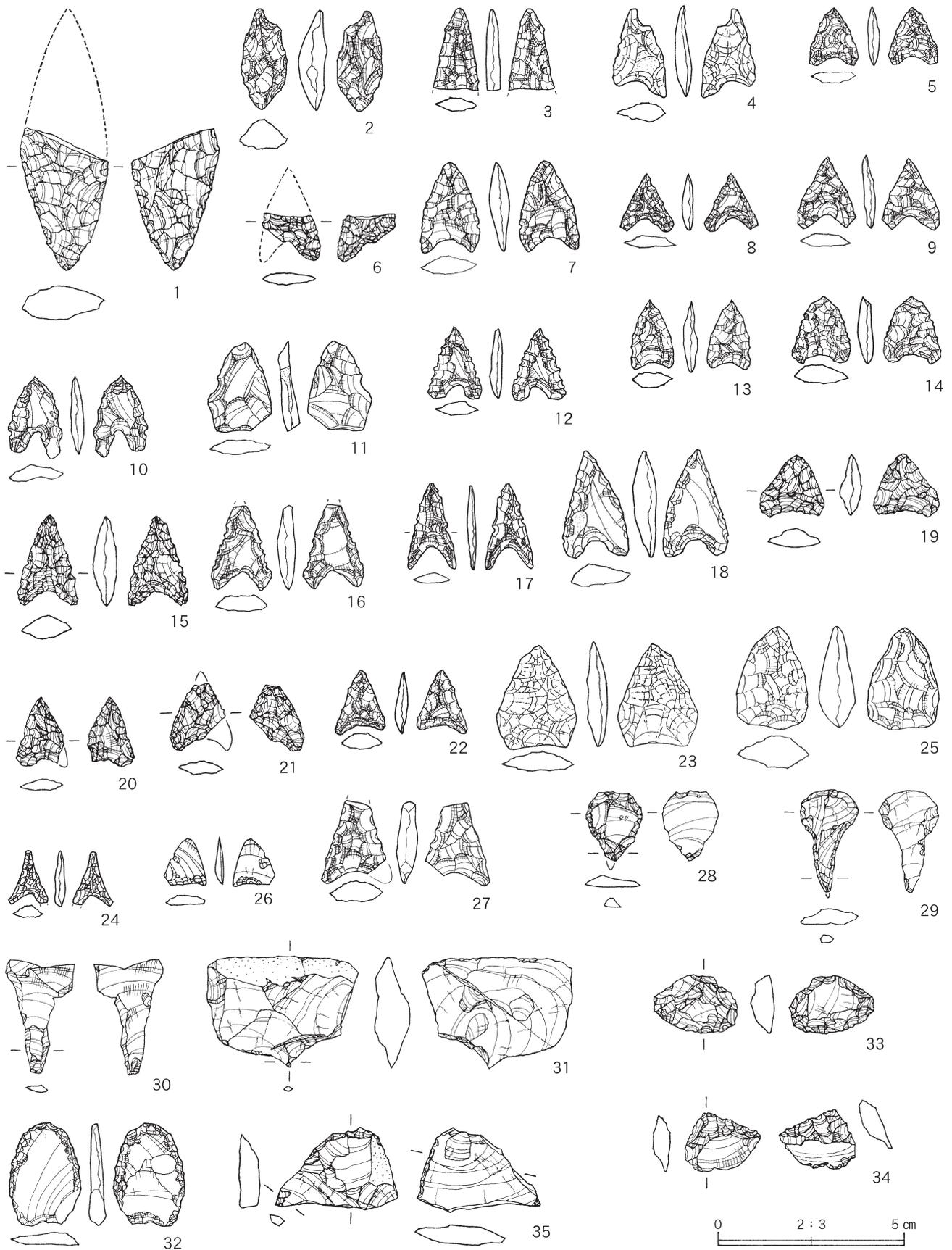
145～152は15号住居跡覆土からの出土資料である。145、146はいずれも69や76と同様、多孔石を再利用した石斧であるが、粗雑な印象を受ける。147は厚みのある素材を用いた磨石であるが敲打痕も認められ、敲き石の機能も有する。148～150、152は小型の磨石であるが、一部欠損や小孔がみられる。151は下端を欠損するが、頭部は扁平で、敲打痕がみられる敲打器である。

154～160は16号住居跡覆土からの出土資料である。154、156、157は打製石斧で、いずれも欠損品であるが157は調整剥離が粗雑であり、完成前に破損した可能性もある。155は多孔石を転用したもので礫器とした。158、160は磨石ないし敲打器である。161の磨製石斧の頭部断片と162の多孔石再利用の打製石斧は単独の埋甕より出土している。

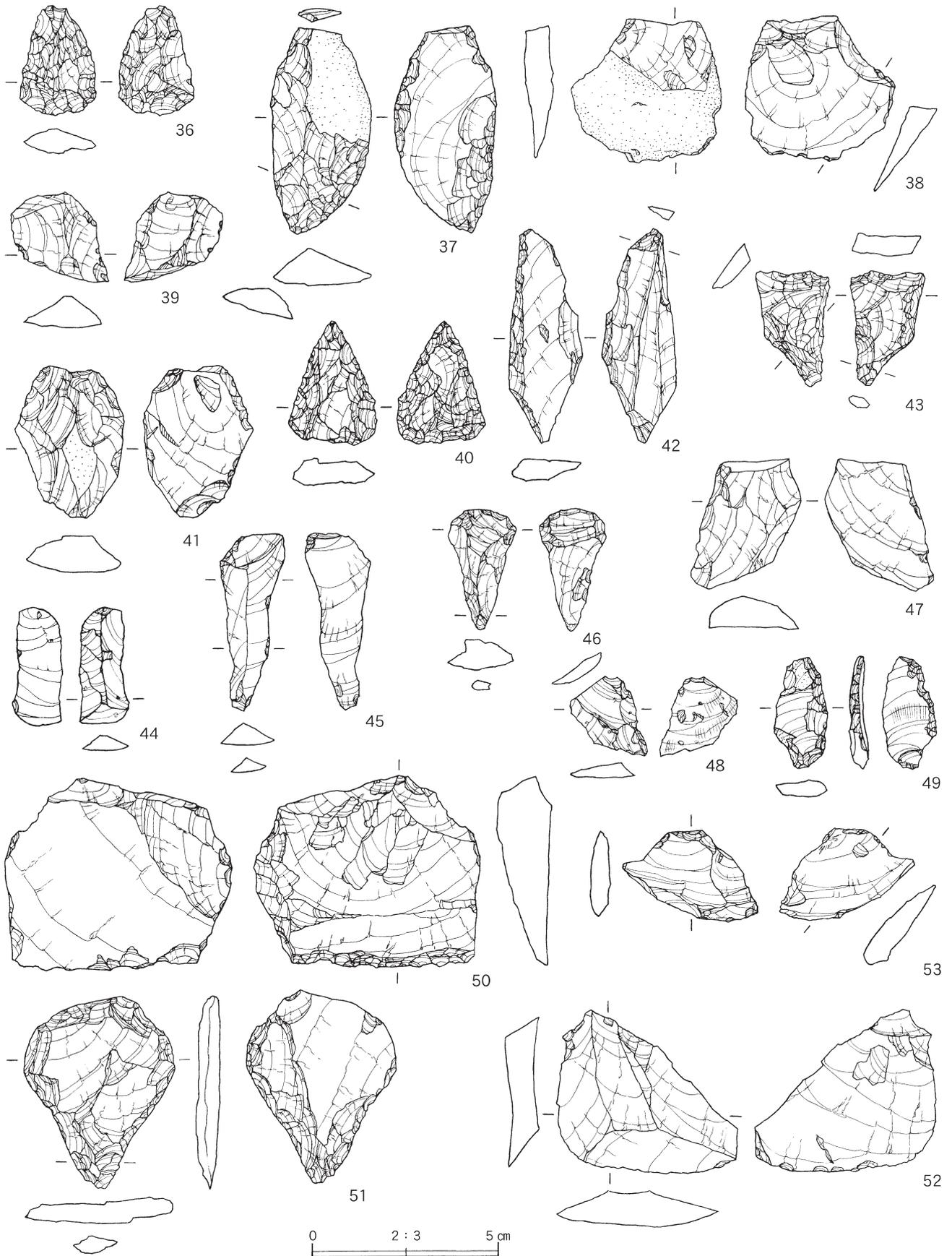
161～190は住居跡以外の遺構の覆土中より出土した資料である。163～178、180、190は土坑からの出土である。

165、166、175、176、178、179、182、183、186は打製石斧である。167、168は素材の礫の形状を大きく変えず、磨石として使用されたと思われる。170は多孔石の断片である。171、173、181は敲打器で、棒状の礫を素材とし、頭部、下端部に敲打痕及び縦位の剥離痕が認められる。刃部を下端とした打製石斧の可能性もある。172は上下端に剥離を施したもので、やや大形であるが石錐の可能性も考えられる。174、177は磨石の断片であろう。180は小型ながらも中央に幅広く凹みが認められ、石皿的な機能が推定される。

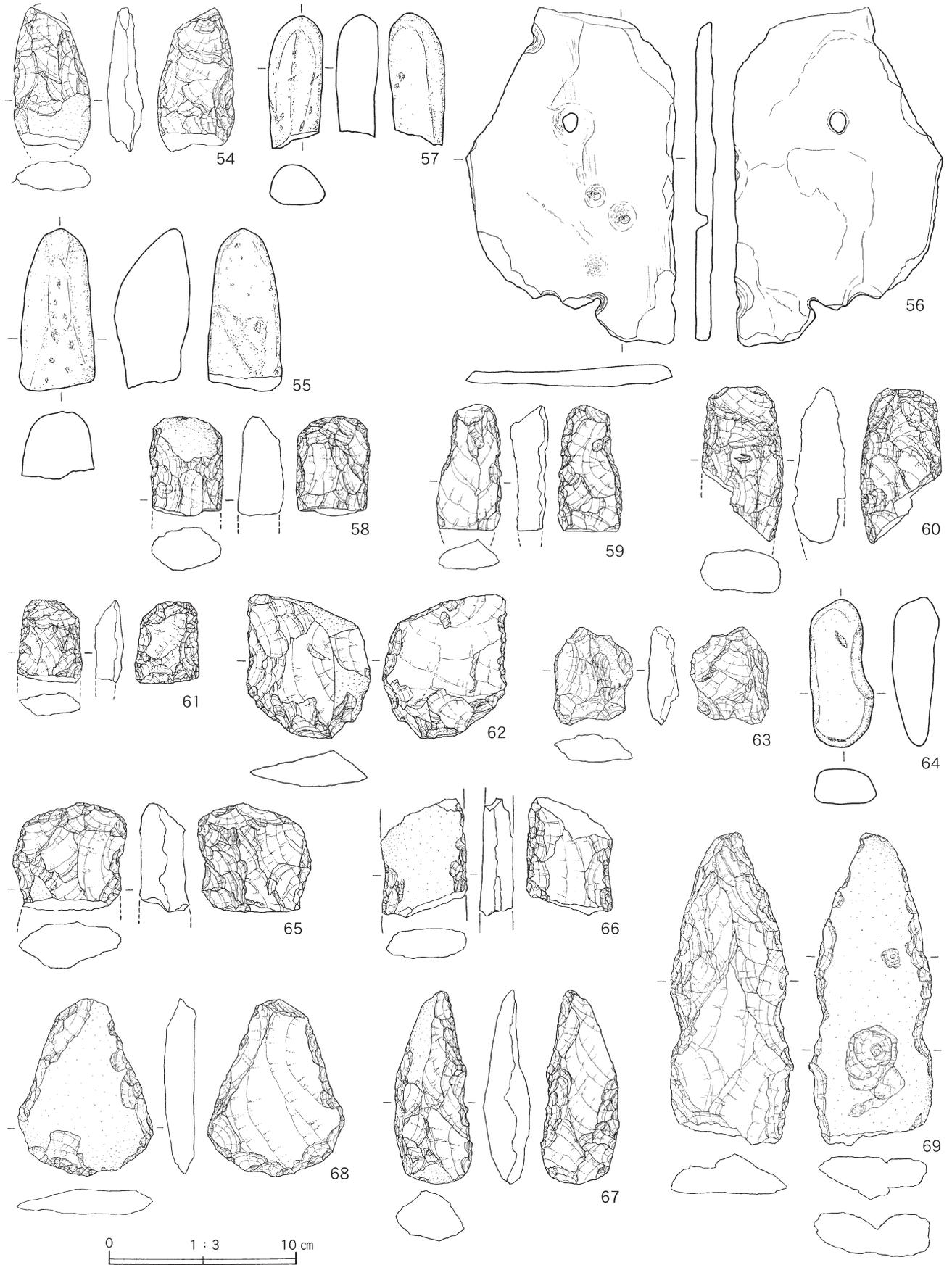
191～217はグリッドから出土した資料である。191～193、195、197～199、203、204は打製石斧である。194は断面三角形の素材礫の両側を打ち欠いて調整し、裏面には一部線状の磨き痕が認められる。底面が平坦でありスタンプ形石器とした。196は大型の粗製石匙である。200～202は打製石斧の未成品とも考えられるが、素材の破片の一部にわずかな調整を加えておりスクレーパー的機能が類推される。いわば使用痕、剥離痕が認められる大型の剥片といえよう。203は石核として使用された可能性が高い。205は磨製石斧の頭部断片である。206、207は凹石の断片である。211は扁平な円礫を素材とした磨石、208、209は凹石か磨石の



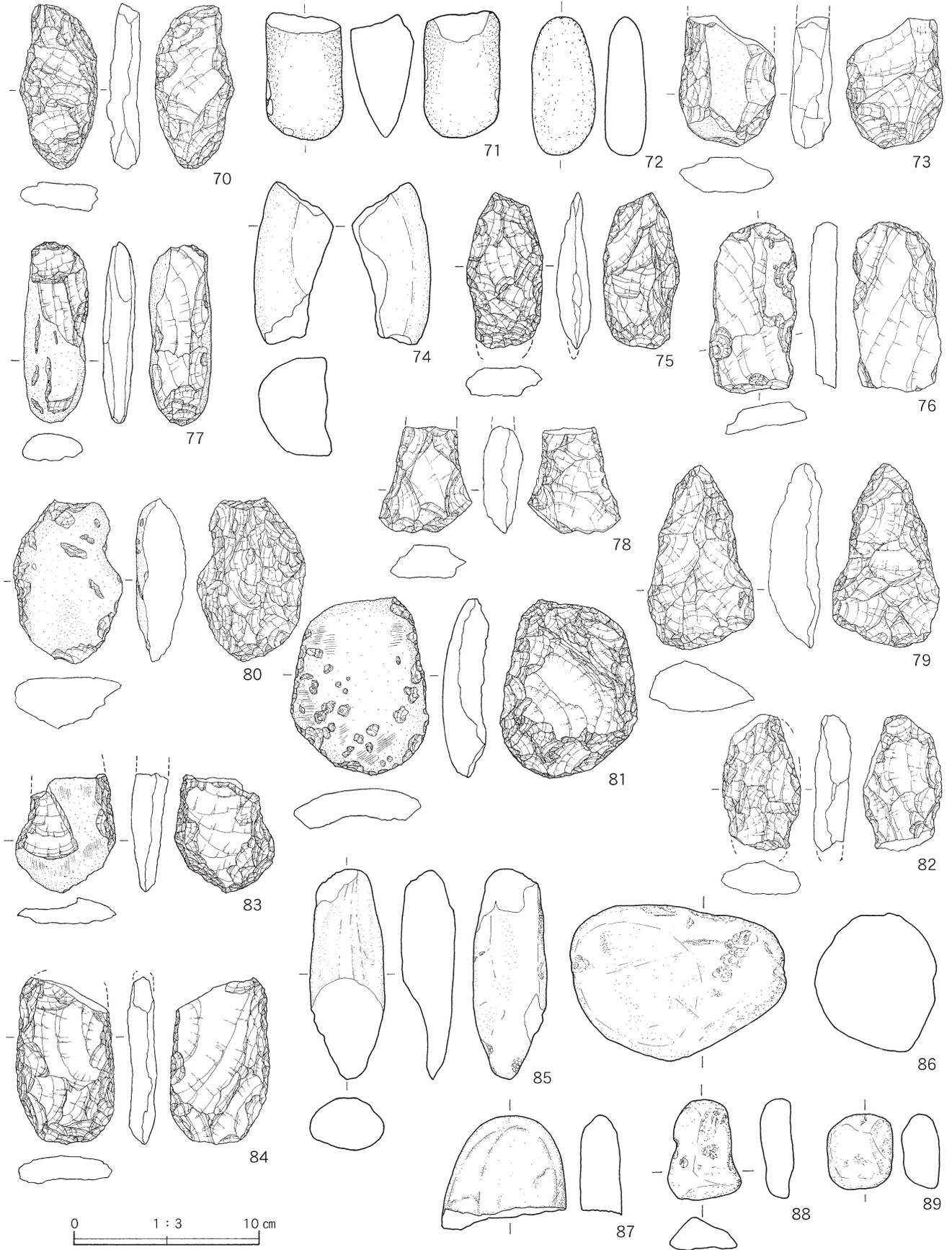
第156図 石器 (1)



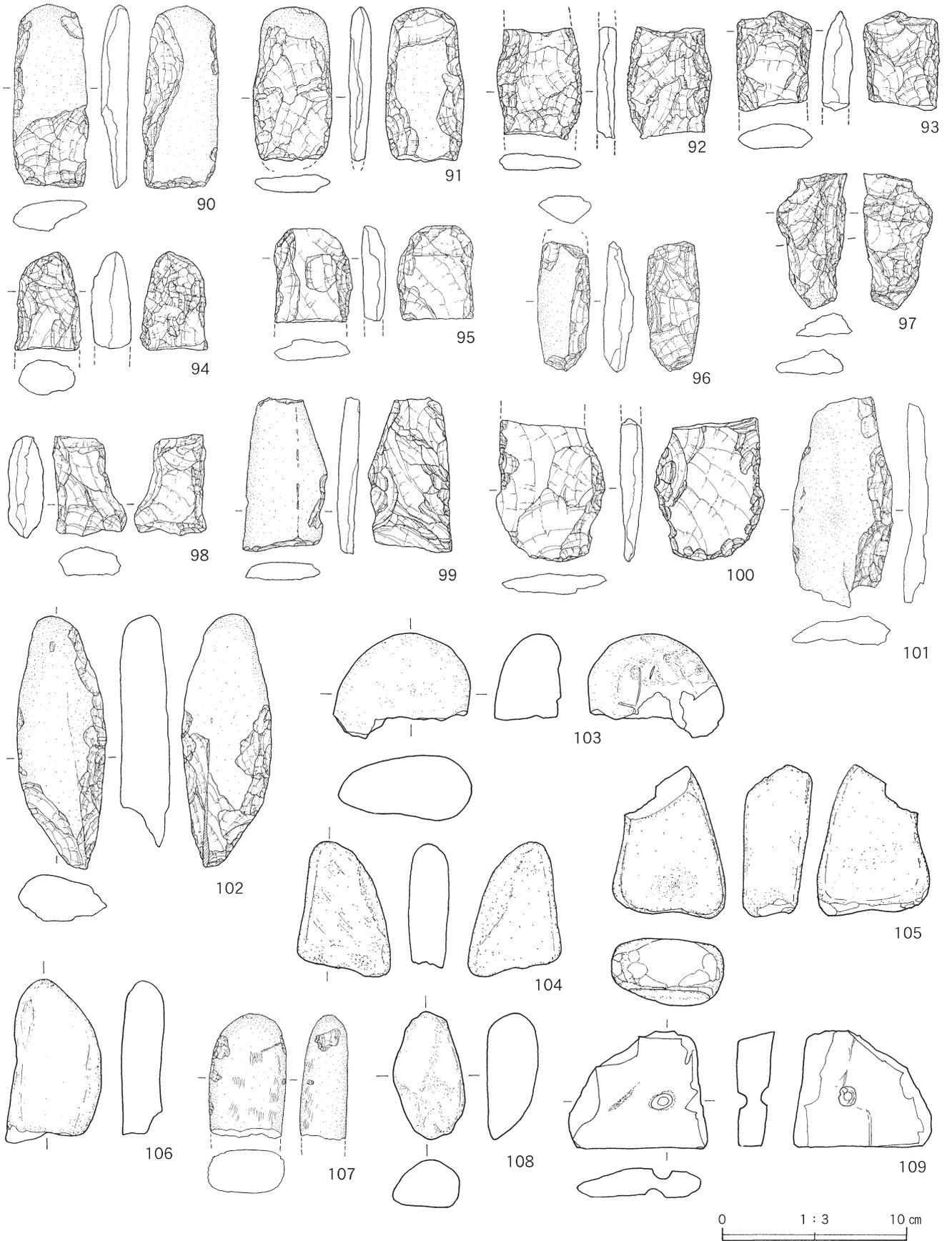
第157図 石器（2）



第158図 石器 (3)



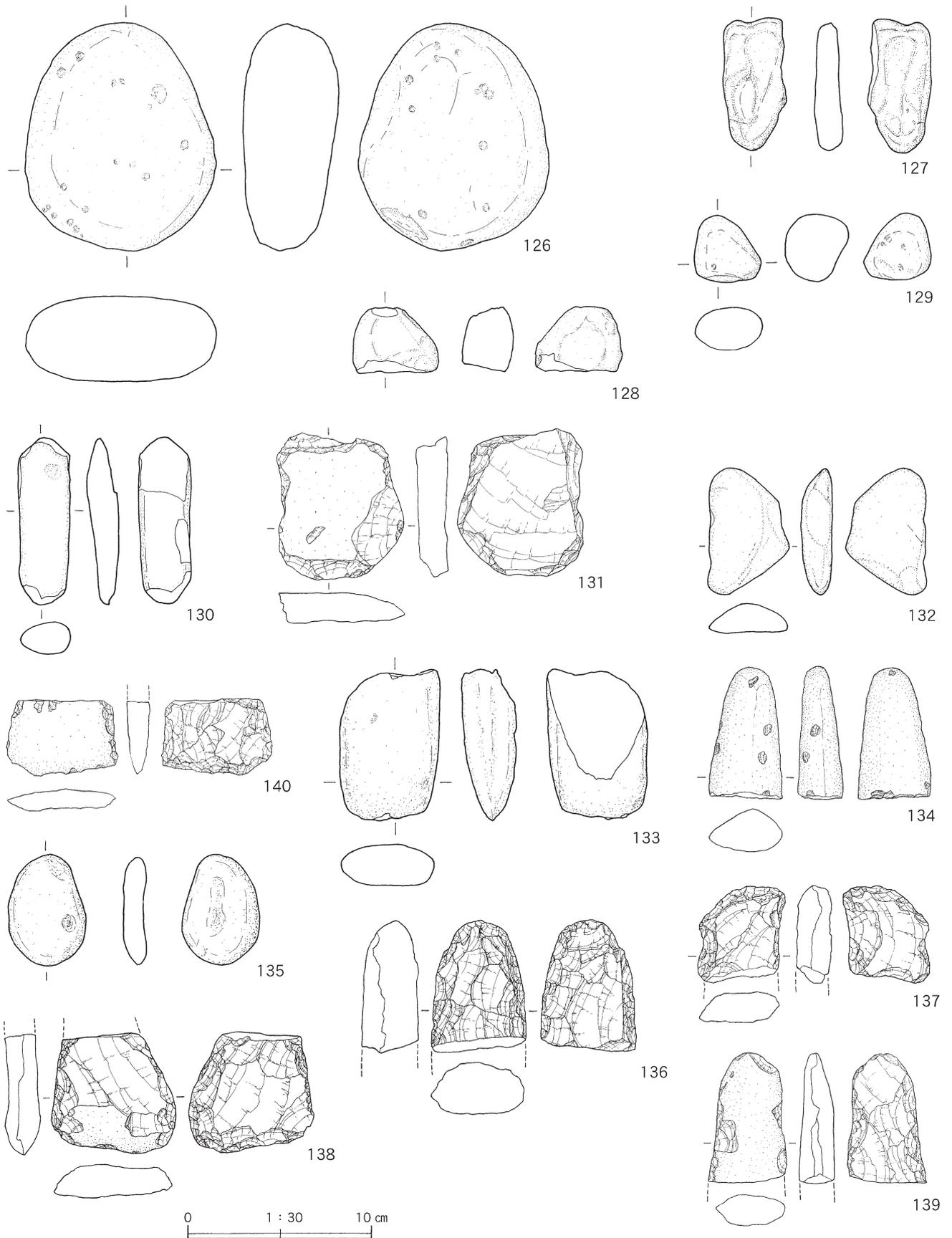
第159図 石器（4）



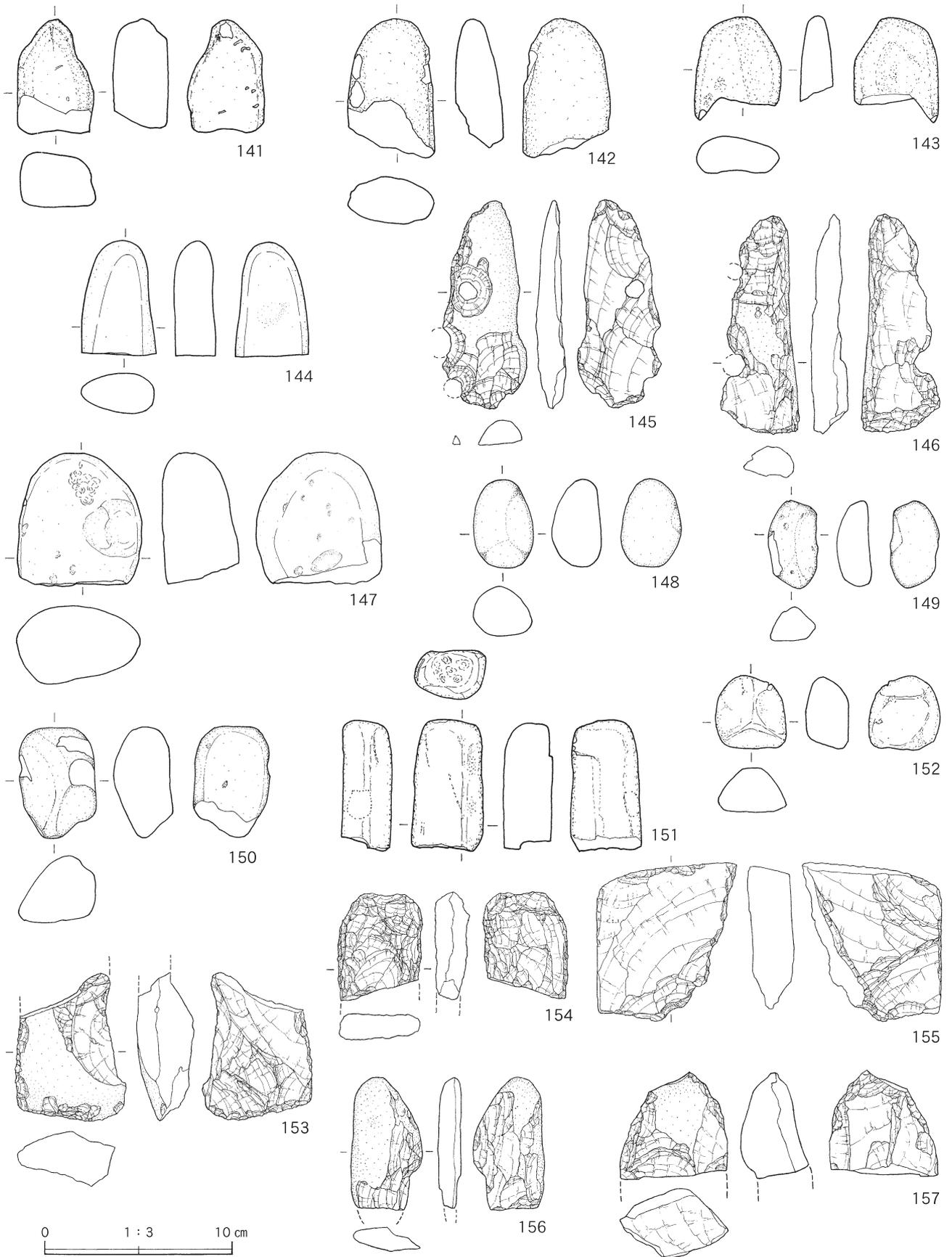
第160図 石器 (5)



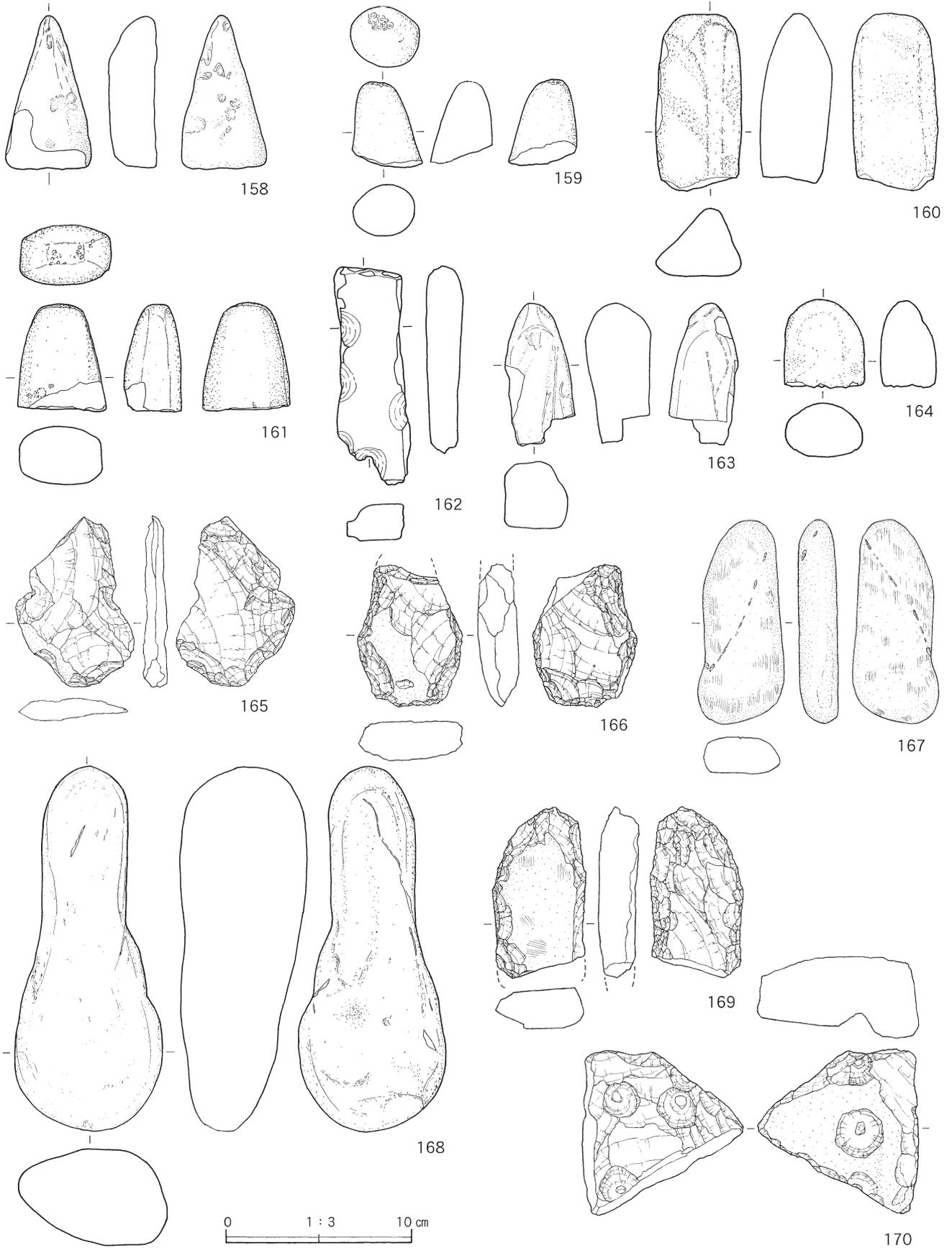
第161図 石器（6）



第162図 石器 (7)



第163図 石器（8）



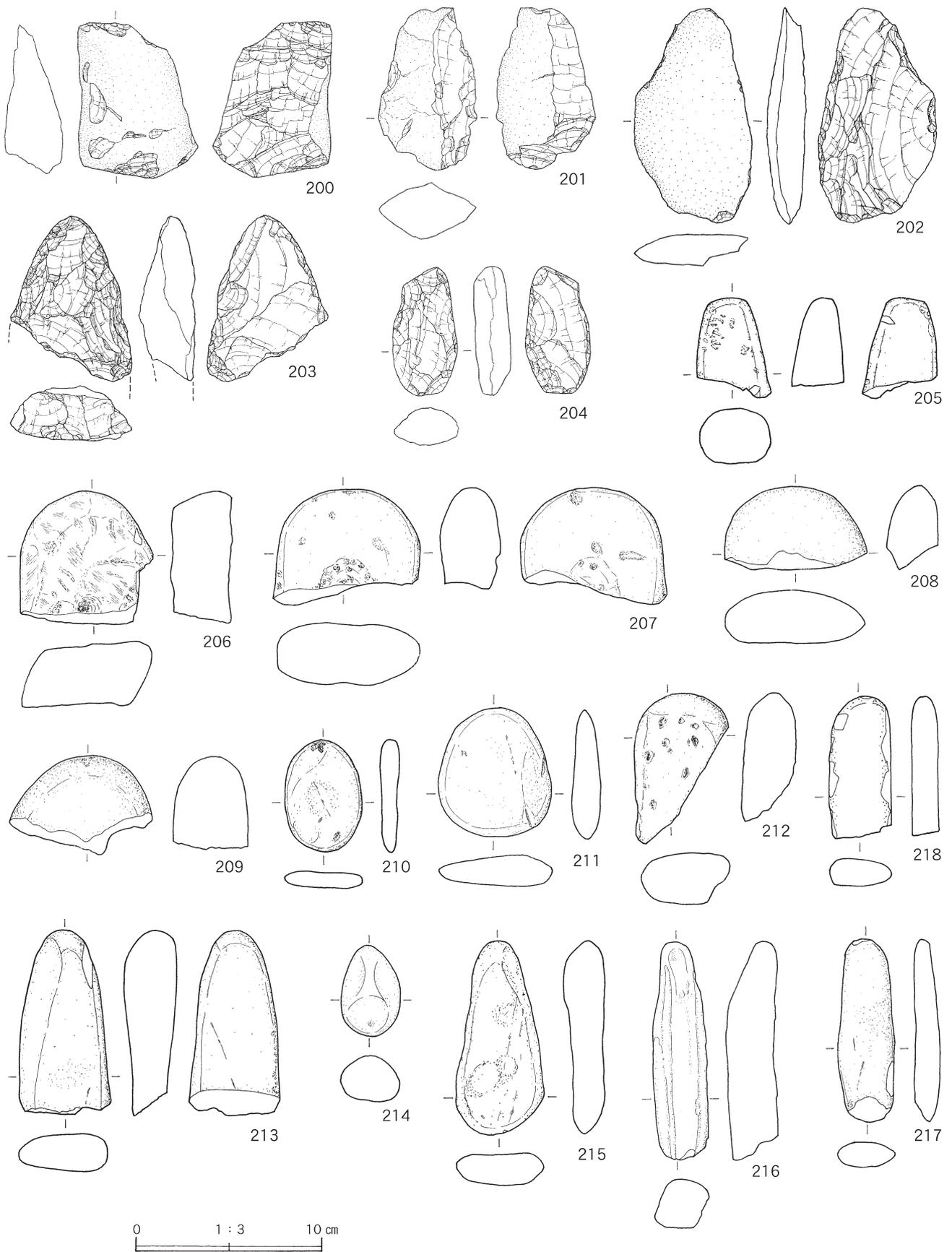
第164図 石器（9）



第165図 石器 (10)



第166図 石器 (11)



第167図 石器 (12)

第30表 第2次調査出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺構・グリッド	注記No.	備考
1	尖頭器	3.9	2.3	0.9	6.7	チャート	SJ10	590	
2	尖頭器	2.7	1.3	0.8	2.3	黒曜石	SJ3	78	
3	尖頭器	2.2	1.2	0.4	1.2	チャート	SJ3	37	石鏃も想定
4	石鏃	2.5	1.5	0.5	1.2	緑色岩	SJ2	214	
5	石鏃	1.6	1.4	0.3	0.5	黒曜石	SJ2	170	
6	石鏃	1.3	1.6	0.3	0.5	チャート	SJ2	167	
7	石鏃	2.5	1.6	0.5	1.8	チャート	SJ4	26	
8	石鏃	1.6	1.5	0.3	0.5	黒曜石	SJ5	5	
9	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.7	黒曜石	SJ5	17	
10	石鏃	2.2	1.5	0.3	1.1	チャート	SJ7	310	
11	石鏃	2.5	1.7	0.5	1.6	チャート	SJ8	359	
12	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.8	チャート	SJ8	148	
13	石鏃	2.1	1.1	0.4	0.7	黒曜石	SJ8	195	未成品
14	石鏃	1.8	1.6	0.4	1.2	黒曜石	SJ8	270	
15	石鏃	2.4	1.7	0.6	1.8	チャート	SJ10	253	
16	石鏃	2.3	1.7	0.5	1.5	チャート	SJ10	370	
17	石鏃	2.1	1.1	0.2	0.5	チャート	SJ11	59	
18	石鏃	2.9	1.8	0.6	2.8	頁岩	SJ11	178	
19	石鏃	1.7	1.8	0.6	1.0	黒曜石	SJ11	130	
20	石鏃	1.9	1.3	0.8	0.4	黒曜石	SJ11	164	
21	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.9	チャート	SJ11	131	
22	石鏃	1.7	1.4	0.3	0.6	チャート	SJ12	114	
23	石鏃	2.9	2.2	0.5	3.4	緑色岩	SJ15	72	
24	石鏃	1.5	1.1	0.3	0.3	黒曜石	SK19	23	
25	石鏃	2.8	2.0	1.0	4.9	チャート	SJ15	274	
26	スクレーパー	1.3	1.1	0.2	0.3	黒曜石	SK21	13	石鏃に類似
27	石鏃	2.3	1.7	0.5	1.9	チャート	SK65		
28	石錐	1.9	2.0	0.3	0.9	黒曜石	SJ7	411	
29	石錐	2.9	2.1	0.4	1.6	チャート	SJ10	238	
30	石錐	3.1	1.8	0.59	2.1	黒曜石	SJ11	5	
31	石錐	3.0	4.1	1.0	11.1	頁岩	SJ11	186	
32	スクレーパー	2.8	2.0	0.5	2.4	頁岩	SJ10	450	
33	スクレーパー	1.6	2.3	0.7	2.6	チャート	SJ11	182	
34	スクレーパー	1.6	2.1	0.5	1.2	黒曜石	SJ11	32	
35	スクレーパー	2.3	2.4	0.5	4.8	チャート	SJ2	157	
36	スクレーパー	2.9	2.0	0.7	3.8	チャート	SJ16	75	
37	スクレーパー	5.2	2.7	1.0	13.1	頁岩	SJ14	5	
38	スクレーパー	4.0	4.1	0.8	13.6	頁岩	SJ12	120	
39	スクレーパー	2.5	2.7	0.9	5.3	チャート	SJ11	105	
40	石鏃	3.4	2.3	0.8	5.7	チャート	SJ3	93	
41	スクレーパー	4.2	3.0	1.0	14.4	黒色頁岩	SJ10		
42	スクレーパー	5.9	2.3	0.6	6.6	変成岩	SJ10	393	
43	スクレーパー	3.2	2.0	0.5	4.4	チャート	SJ10	485	
44	スクレーパー	3.2	1.4	0.4	1.8	黒曜石	SJ8	104	
45	スクレーパー	4.8	1.8	0.6	3.3	頁岩	SJ10	455	
46	石錐	3.3	1.8	0.8	4.6	緑色岩	SD1		
47	スクレーパー	3.6	3.0	0.8	9.3	石灰岩	SK19	2	
48	スクレーパー	2.2	2.1	0.4	1.1	チャート	SJ2		
49	スクレーパー	3.0	1.4	0.5	1.7	チャート	SK19	4	
50	スクレーパー	5.7	6.2	1.5	54.7	チャート	SJ8	223	
51	スクレーパー	5.2	4.1	0.6	14.0	緑色岩	SJ16	81	
52	スクレーパー	4.5	4.8	1.0	17.6	チャート	E9グリッド		
53	スクレーパー	2.5	3.7	0.6	5.8	チャート	SK27	7	

第三章 台地上の調査（第1次～第3次調査）

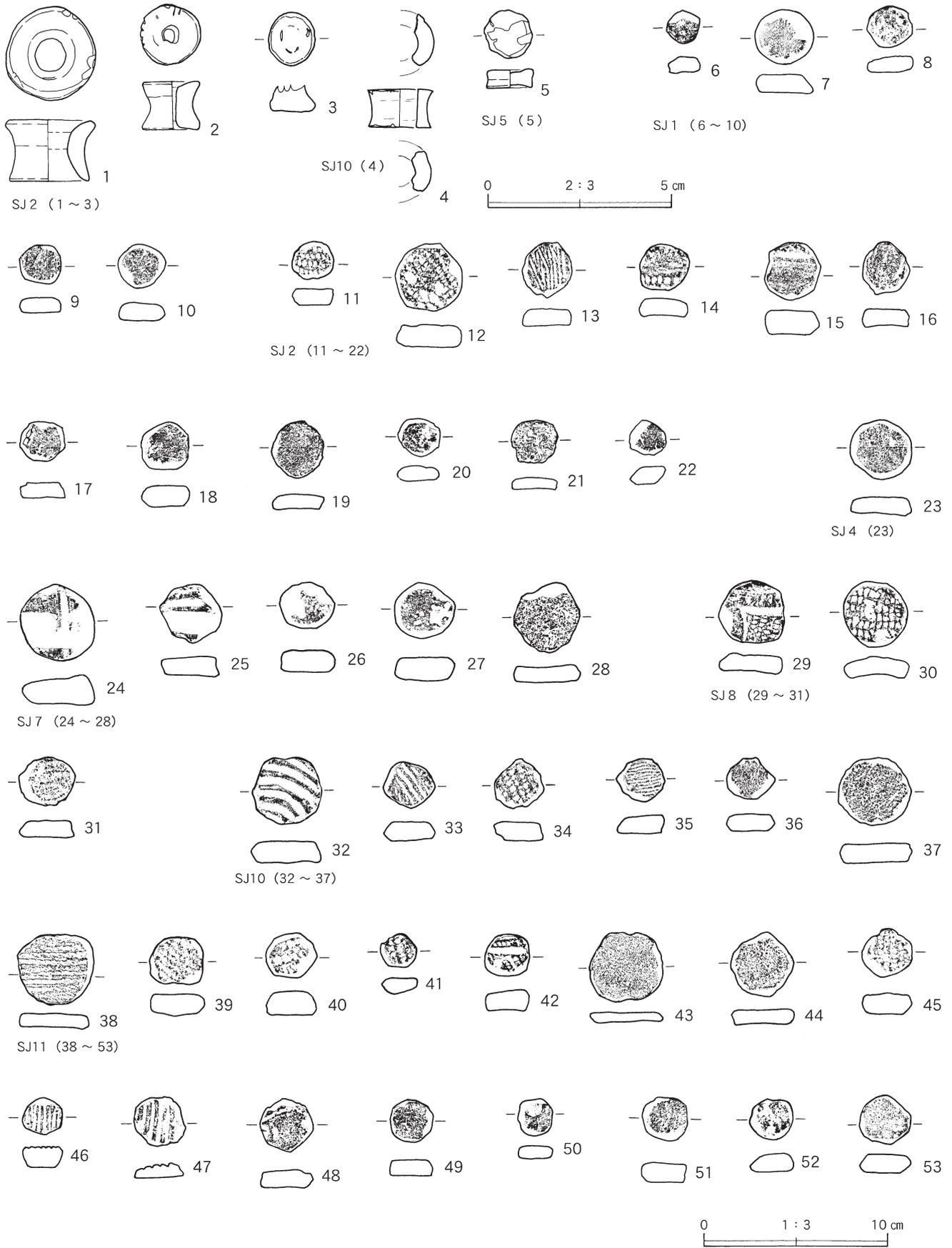
No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺構・グリッド	注記No.	備考
54	打製石斧	7.7	4.1	1.8	59.6	絹雲母片岩	SJ1	135	
55	磨石	8.8	4.0	4.1	194.7	チャート	SJ1	111	
56	多孔石	18.3	11.4	1.1	311.7	緑泥片岩	SJ1	108	石皿の再利用
57	磨石	7.1	3.0	2.3	79.4	砂岩	SJ1	125	
58	打製石斧	5.5	3.9	2.4	73.1	砂岩	SJ2	173	
59	打製石斧	6.9	3.4	2.0	53.3	フォルンフェルス	SJ2	209	
60	打製石斧	8.5	4.3	2.7	101.7	砂岩	SJ2	184	
61	打製石斧	4.5	3.4	1.5	29.1	ガラス質黒色安山岩	SJ2	246	
62	スクレーパー	7.9	6.8	1.8	106.5	フォルンフェルス	SJ2	175	
63	スクレーパー	5.3	1.8	1.5	41.2	フォルンフェルス	SJ2	245	
64	磨石	8.1	3.4	2.4	88.8	砂岩	SJ2	165	
65	打製石斧	5.9	6.2	2.6	106.7	砂岩	SJ3	22	
66	打製石斧	6.4	4.6	1.6	65.4	フォルンフェルス	SJ3	27	
67	打製石斧	10.5	4.2	2.5	108.4	フォルンフェルス	SJ3	45	
68	打製石斧	9.6	7.4	1.7	127.5	砂岩	SJ3	128	
69	打製石斧	17.1	6.7	2.2	328.6	緑泥片岩	SJ3	46	多孔石の転用
70	打製石斧	8.9	4.2	1.7	70.7	フォルンフェルス	SJ3	25	
71	磨製石斧	7.6	4.2	3.4	122.7	礫岩	SJ3	142	
72	磨石	7.6	3.4	2.23	84.5	安山岩	SJ4	25	
73	打製石斧	7.1	5.2	2.3	97.9	ガラス質黒色安山岩	SJ5	4	
74	石皿	8.8	4.0	5.5	210.9	安山岩	SJ6	14	
75	打製石斧	5.2	4.2	1.9	67.7	フォルンフェルス	SJ7	404	
76	打製石斧	9.3	4.5	1.5	93.9	絹雲母片岩	SJ7	234	多孔石の転用
77	打製石斧	9.9	3.3	1.7	78.1	石墨片岩	SJ7	343	
78	打製石斧	5.8	4.1	2.1	55.3	ガラス質黒色安山岩	SJ7		
79	打製石斧	10.0	5.7	2.7	150.1	ガラス質黒色安山岩	SJ7	8	
80	打製石斧	8.9	5.8	2.7	168.7	黒色頁岩	SJ7	385	
81	打製石斧	9.8	7.5	2.3	182.0	砂岩	SJ7	263	
82	打製石斧	7.4	4.3	1.9	75.1	フォルンフェルス	SJ7	324	
83	打製石斧	6.5	5.3	1.8	60.2	緑色岩	SJ7	257	
84	打製石斧	9.1	5.1	1.4	99.0	ガラス質黒色安山岩	SJ7	289	
85	磨石	11.5	4.0	2.9	166.6	砂岩	SJ7	145	
86	磨石	8.6	11.7	6.4	525.0	安山岩	SJ7	426	
87	磨石	6.1	6.8	2.2	127.4	砂岩	SJ7	327	
88	磨石	5.4	3.7	1.7	40.6	安山岩	SJ7		
89	磨石	4.0	3.5	2.0	43.3	安山岩	SJ7	70	
90	打製石斧	9.9	4.2	1.8	97.0	緑色岩	SJ8	227	
91	打製石斧	8.4	4.2	1.2	66.5	緑色岩	SJ8	607	
92	打製石斧	6.2	4.7	1.0	48.4	緑色岩	SJ8	358	
93	打製石斧	5.4	4.1	1.1	48.3	フォルンフェルス	SJ8	9	
94	打製石斧	5.4	3.1	2.1	51.3	フォルンフェルス	SJ8	143	
95	打製石斧	5.1	4.4	1.3	35.9	フォルンフェルス	SJ8	290	
96	打製石斧	6.2	2.8	1.7	34.5	緑色岩	SJ8	221	
97	スクレーパー	7.4	3.8	1.6	31.2	フォルンフェルス	SJ8	37	
98	打製石斧	5.6	3.9	2.0	44.1	フォルンフェルス	SJ8	124	
99	打製石斧	8.6	4.6	1.1	60.4	頁岩	SJ8	494	
100	打製石斧	7.9	6.0	1.2	60.6	フォルンフェルス	SJ8	591	
101	打製石斧	11.3	5.3	1.55	116.6	緑色岩	SJ8	345	
102	打製石斧	13.8	4.9	2.8	220.0	緑色岩	SJ8	534	
103	磨石	5.7	7.3	3.5	145.2	安山岩	SJ8	154	
104	磨石	7.5	5.1	2.2	121.2	緑色岩	SJ8	569	
105	磨石	8.4	6.2	3.6	245.3	砂岩	SJ8	340	
106	磨石	8.5	5.3	2.3	153.5	安山岩	SJ8	569	
107	磨石	6.8	4.2	2.6	110.1	砂岩	SJ8	442	
108	磨石	7.0	4.1	2.8	91.0	泥岩	SJ8		

第3節 第2次調査の遺構と遺物

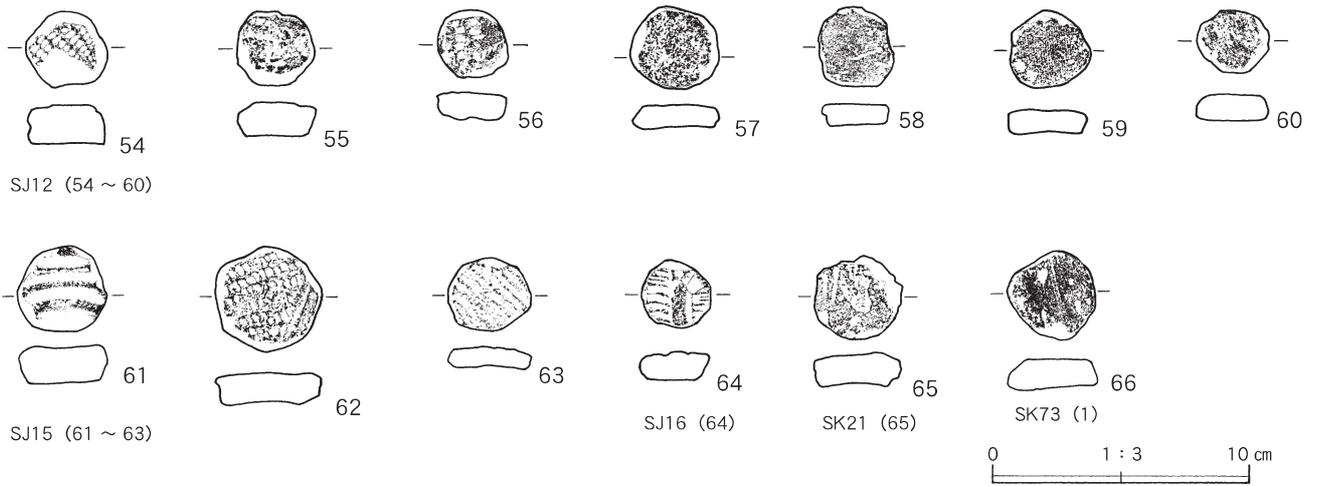
No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺構・グリッド	注記No.	備考
109	凹石	6.4	7.6	1.9	127.8	頁岩	SJ8	396	
110	打製石斧	14.6	5.4	1.8	160.9	緑泥片岩	SJ10	489	短冊形
111	打製石斧	13.1	5.0	2.2	163.7	砂岩	SJ10	637	短冊形
112	打製石斧	8.4	4.4	2.7	121.0	フォルンフェルス	SJ10	232	短冊形
113	打製石斧	5.9	4.4	1.76	53.1	フォルンフェルス	SJ10		
114	打製石斧	8.2	1.04	1.36	41.9	フォルンフェルス	SJ10	578	
115	打製石斧	9.0	5.0	1.5	88.6	緑色岩	SJ10	15	
116	打製石斧	5.2	4.2	1.8	48.8	緑色岩	SJ10	19	
117	打製石斧	5.8	5.5	2.2	90.1	砂岩	SJ10	40	
118	スクレーパー	6.1	4.9	1.06	42.3	フォルンフェルス	SJ10	471	
119	スクレーパー	6.9	6.4	1.1	37.4	フォルンフェルス	SJ10	43	
120	摩石・敲打石	10.4	3.3	2.2	116.9	緑色岩	SJ10	174	
121	凹石	6.7	7.0	4.4	272.1	安山岩	SJ10	481	
122	摩石・敲打石	13.9	4.6	3.6	317.4	砂岩	SJ10	451	
123	摩石・敲打石	4.9	4.9	2.9	83.0	安山岩	SJ10	304	
124	摩石・敲打石	7.2	4.1	3.1	112.0	安山岩	SJ10	274	
125	凹石	9.0	7.3	4.2	403.9	安山岩	SJ10	466	
126	摩石・敲打石	12.4	10.4	5.2	960.0	閃緑岩	SJ10	346	
127	摩石・敲打石	7.3	3.4	1.4	48.8	砂岩	SJ10	104	
128	摩石・敲打石	3.7	4.7	2.75	59.3	砂岩	SJ10	107	
129	摩石・敲打石	3.7	3.2	3.4	43.9	安山岩	SJ10	346	
130	摩石・敲打石	9.1	2.8	1.7	71.2	緑色岩	SJ10	453	
131	スクレーパー	7.8	6.9	1.7	154.8	緑泥片岩	SJ11	191	
132	磨石・敲打器	6.9	4.4	1.5	55.0	砂岩	SJ10		
133	磨製石斧	8.2	5.0	2.9	189.3	緑色岩	SJ11	1	
134	磨石	7.3	4.0	2.5	90.5	砂岩	SJ11	187	
135	凹石	6.1	4.3	1.2	41.2	砂岩	SJ11	158	
136	打製石斧	7.3	5.2	2.8	151.0	フォルンフェルス	SJ12	334	
137	打製石斧	5.3	4.4	1.9	59.5	フォルンフェルス	SJ12	91	
138	打製石斧	6.7	6.85	1.72	107.9	フォルンフェルス	SJ12		
139	打製石斧	7.1	4.3	1.9	67.0	砂岩	SJ12	370	
140	打製石斧	4.2	6.1	1.2	42.3	フォルンフェルス	SJ11	123	
141	磨石・敲打器	6.1	4.8	2.89	116.6	頁岩	SJ12	281	
142	磨石・敲打器	7.5	4.7	2.4	128.0	砂岩	SJ12	337	
143	磨石・敲打器	5.7	4.6	1.84	73.0	緑色岩	SJ12	262	
144	磨石・敲打器	6.2	4.1	2.2	72.7	砂岩	SJ12	394	
145	打製石斧	11.7	4.6	1.5	72.7	緑泥片岩	SJ15	100	多孔石の転用
146	打製石斧	11.8	4.3	2.0	83.3	緑泥片岩	SJ15		多孔石の転用
147	磨石・敲打器	7.3	6.8	4.1	269.7	安山岩	SJ15	109	
148	磨石	4.3	3.1	2.6	50.5	安山岩	SJ15		
149	磨石	4.8	2.5	1.7	24.5	安山岩	SJ15		
150	磨石	6.0	4.2	3.0	98.6	砂岩	SJ15		
151	敲打器	7.1	3.9	2.6	120.9	緑色片岩	SJ15	36	
152	磨石	3.9	3.9	2.3	44.8	凝灰岩	SJ15	185	
153	打製石斧	8.0	5.9	3.1	134.6	フォルンフェルス	SJ16	72	
154	打製石斧	5.8	4.4	1.8	61.0	片岩類	SJ16		
155	礮器	8.7	7.7	2.6	200.5	緑泥片岩	SJ16	98	
156	打製石斧	7.0	3.8	1.2	40.3	緑色片岩	SJ16	109	
157	打製石斧	5.8	5.9	3.8	111.5	フォルンフェルス	SJ16	138	
158	磨石・敲打器	8.3	4.7	2.6	83.5	砂岩	SJ16	171	
159	磨石・敲打器	4.8	3.8	3.2	73.1	緑色岩	SJ16	193	
160	磨石・敲打器	9.6	4.6	3.7	230.6	砂岩	SJ16	263	
161	磨製石斧	5.7	4.8	3.15	131.1	緑色岩	SK80		
162	打製石斧	11.7	4.0	2.0	152.7	緑泥片岩	SK80		多孔石の転用
163	磨石	7.7	3.5	3.6	127.6	砂岩	SK3		

第三章 台地上の調査（第1次～第3次調査）

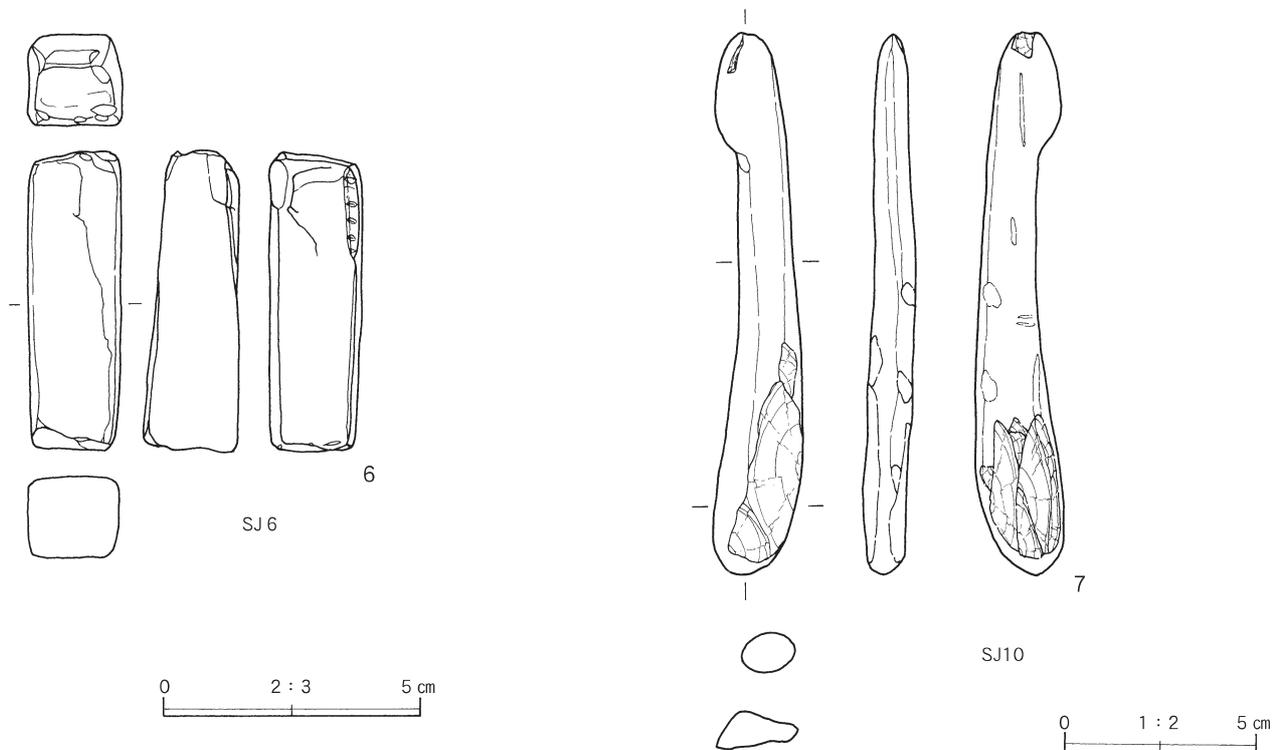
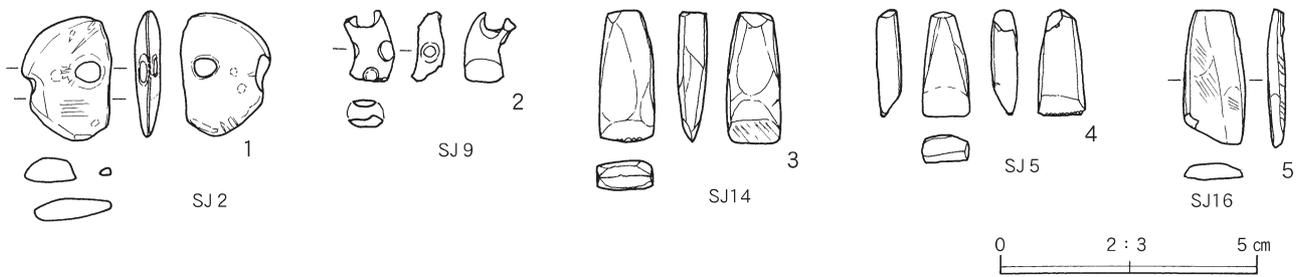
No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺構・グリッド	注記No.	備考
164	磨石	4.9	4.4	3.0	88.3	安山岩	SK15	11	
165	打製石斧	9.3	6.5	1.3	74.9	フォルンフェルス	SK15	1	
166	打製石斧	7.8	5.7	2.2	123.3	フォルンフェルス	SK21	14	
167	磨石	11.1	4.2	2.1	179.4	砂岩	SK24	9	
168	磨石	20.0	8.1	7.1	1300.0	礫岩	SK15	12	
169	打製石斧	9.3	5.1	2.1	145.0	砂岩	SK26	1	
170	多孔石	9.0	8.8	4.3	333.6	石墨片岩	SK27	2	
171	敲打石	13.7	4.0	2.1	143.5	緑色岩	SK30	10	
172	石錘	8.2	6.3	2.1	168.6	緑色岩	SK30	14	
173	敲打石	12.8	4.3	2.6	201.6	石墨片岩	SK37	5	
174	摩石	7.9	3.3	2.6	81.4	砂岩	SK55		
175	打製石斧	11.2	5.8	2.3	208.4	フォルンフェルス	SK74	5	
176	打製石斧	6.3	4.8	2.4	81.8	フォルンフェルス	SK59	28	
177	磨石	11.1	5.8	4.0	235.1	砂岩	SK59	39	
178	打製石斧	7.7	4.7	2.7	112.0	ガラス質黒色安山岩	SK63	2	
179	打製石斧	12.9	6.0	2.8	260.8	フォルンフェルス	SD1		
180	凹石	6.7	7.4	2.5	112.7	安山岩	SK64		石皿的な機能
181	敲打器	12.6	3.90	2.43	181.8	頁岩	SD1		
182	打製石斧	8.1	5.3	3.2	155.0	フォルンフェルス	SD1		
183	打製石斧	11.8	5.75	1.7	93.8	砂岩	SK75	7	
184	磨石	12.2	5.0	3.8	308.9	砂岩	SD1		
185	磨石	6.8	5.4	4.1	185.4	安山岩	SD1		
186	打製石斧	9.2	5.2	1.8	108.1	砂岩	SE1		
187	磨石	10.8	4.9	2.35	162.5	緑色岩	SE1		
188	磨石	6.7	4.3	1.6	70.6	緑色岩	SE1		
189	磨石	8.2	4.5	3.0	156.9	安山岩	SE1		
190	磨石	8.0	4.2	2.8	120.0	緑色岩	SX3 SK4		
191	打製石斧	9.6	5.3	2.3	136.3	フォルンフェルス	G9グリッド	14	
192	打製石斧	10.2	6.0	3.2	227.0	砂岩	E5グリッド		
193	打製石斧	10.8	7.0	2.1	137.2	フォルンフェルス	B6グリッド		
194	スタンプ形石器	10.6	6.6	4.7	321.3	安山岩	一括		
195	打製石斧	9.1	5.4	1.1	52.9	チャート	一括		
196	石匙	7.9	6.7	1.2	60.6	フォルンフェルス	E8グリッド		
197	打製石斧	7.6	5.5	1.4	84.6	緑色岩	E9グリッド	16	
198	打製石斧	9.1	3.4	2.2	69.2	砂岩	D9グリッド	13	
199	打製石斧	9.6	7.3	3.1	205.7	砂岩	D9グリッド	6	
200	スクレーパー	8.3	6.53	3.6	188.3	フォルンフェルス	E6グリッド		打斧未成品
201	スクレーパー	8.6	5.3	2.7	105.3	チャート	C4グリッド		打斧未成品
202	スクレーパー	11.6	6.4	2.1	137.5	フォルンフェルス	G9グリッド		打斧未成品
203	石核	8.9	6.6	3.0	162.4	安山岩	F7グリッド		
204	打製石斧	6.9	3.5	1.8	59.1	ガラス質黒色安山岩	E10グリッド		
205	磨製石斧	5.4	3.8	2.9	88.6	緑色岩	E5グリッド		
206	凹石	7.3	7.35	3.50	300.3	砂岩	G9グリッド		
207	凹石	6.4	8.0	3.3	201.6	安山岩	D5グリッド		
208	磨石	4.6	7.7	2.8	126.0	砂岩	E10グリッド	17	
209	磨石	5.4	7.9	4.1	97.5	砂岩	E6グリッド		
210	凹石	6.1	4.2	1.1	42.5	砂岩	C6グリッド		
211	磨石	7.0	6.1	1.1	102.1	砂岩	G8グリッド		
212	磨石	8.2	5.2	2.8	86.2	安山岩	E10グリッド		
213	磨石	10.1	5.0	2.9	192.8	緑色岩	D6グリッド		
214	磨石	5.0	2.3	2.4	44.2	砂岩	E10グリッド		
215	磨石	10.5	4.8	2.2	140.7	砂岩	C6グリッド		
216	磨石	11.8	3.0	2.65	144.1	緑色片岩	E7グリッド		
217	磨石	10.0	3.2	0.9	68.8	砂岩	P19グリッド		
218	磨石	7.7	3.4	1.5	76.5	緑色岩			



第168図 土製品 (1)



第169図 土製品（2）



第170図 石製品

断片である。210は扁平の素材を用い、中央部にわずかな凹みが認められ凹石とした。212、213、215～217は棒状の礫を素材とした磨石であり、217は上下端に敲打痕が認められ、敲打器の機能も指摘できる。214は小型の磨石であると思われる。

(6) 土製品・石製品

土製品 (第168・169図)

1～5は土製耳飾である。1～3は白形で、いずれも無文である。4・5は滑車形で、4は環状、5はボタン形を呈する。

6～66は土製円板で、合計で61点を図示した。内訳は1号住居跡5点、2号住居跡12点、4号住居跡1点、7号住居跡5点、8号住居跡3点、10号住居跡6点、11号住居跡16点、12号住居跡7点、15号住居跡3点、16号住居跡1点、土坑2点である。いずれも土器破片の周囲を欠く、または研磨して円形とする。各計測値、重量等については第31表にまとめた。

石製品 (第170図、第32表)

1、2は垂飾りである。1は2号住居跡から出土した。左側縁に括れをもち、右側縁に寄った位置に穿孔する。扁平な礫を用いて両面を丹念に研磨している。2は8号住居跡から出土した。両側縁を通す貫通孔を穿ち、上下にも穿孔を有する。両端部を欠失するが軟玉を良く磨いて仕上げている。

3～5は小型磨製石斧である。5のみ裏面を欠失する。いずれも極小で定角形である。3・4の石質は透

第31表 第2次調査土製品観察表

図版番号	製品名	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第168図1	土製耳飾	2.4	2.3	1.7	5.7	SJ2-239
第168図2	土製耳飾	1.5	1.5	1.3	2.8	SJ2-241
第168図3	土製耳飾	2.9	2.5	(1.7)	10.6	SJ2-240
第168図4	土製耳飾	(2.1)	(2.1)	2.1	5.8	SJ10
第168図5	土製耳飾	2.6	2.6	1.3	6.8	SJ11-24
第168図6	土製円板	1.8	1.8	0.0	3.0	SJ1-124
第168図7	土製円板	3.0	3.1	1.0	11.5	SJ1-115
第168図8	土製円板	2.2	2.5	0.8	4.7	SJ1-112
第168図9	土製円板	2.0	2.2	0.7	4.4	SJ1-114
第168図10	土製円板	2.3	2.5	0.9	4.8	SJ1-127
第168図11	土製円板	2.0	2.2	0.9	4.8	SJ2-156
第168図12	土製円板	3.6	3.5	1.2	19.4	SJ2-174
第168図13	土製円板	2.9	2.7	0.9	8.6	SJ2-244
第168図14	土製円板	2.5	2.7	1.0	8.2	SJ2-159
第168図15	土製円板	3.2	2.9	1.3	15.0	SJ2-176
第168図16	土製円板	2.7	2.5	0.9	7.4	SJ2-162
第168図17	土製円板	2.2	2.4	0.8	5.0	SJ2-169
第168図18	土製円板	2.7	2.6	1.0	9.5	SJ2-168
第168図19	土製円板	3.0	2.8	0.8	8.8	SJ2-247
第168図20	土製円板	2.0	2.2	0.7	3.5	SJ2-160
第168図21	土製円板	2.3	2.4	0.6	4.7	SJ2-172
第168図22	土製円板	1.9	1.9	0.9	3.4	SJ2-156
第168図23	土製円板	3.4	3.3	0.9	12.8	SJ4-19
第168図24	土製円板	3.9	3.9	1.6	26.1	SJ7-45
第168図25	土製円板	3.2	3.1	1.1	11.5	SJ7-296

第Ⅲ章 台地上の調査（第1次～第3次調査）

図版番号	製品名	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第168図26	土製円板	2.6	2.8	1.3	11.2	SJ7-403
第168図27	土製円板	3.0	3.3	1.2	14.9	SJ7-314
第168図28	土製円板	3.6	3.7	0.8	13.9	SJ7-364
第168図29	土製円板	3.4	3.5	1.0	15.6	SJ8-228
第168図30	土製円板	3.5	3.4	0.9	14.9	SJ8-239
第168図31	土製円板	2.5	2.9	0.9	8.6	SJ8-538
第168図32	土製円板	3.6	3.6	1.2	20.4	SJ10-385
第168図33	土製円板	2.6	2.8	1.0	8.2	SJ10-403
第168図34	土製円板	2.6	2.5	0.9	8.1	SJ10-404
第168図35	土製円板	2.3	2.5	0.9	7.0	SJ10-394
第168図36	土製円板	2.3	2.7	0.9	6.1	SJ10-378
第168図37	土製円板	4.0	3.8	1.1	—	SJ10-144
第168図38	土製円板	3.8	4.0	0.6	14.5	SJ11-16
第168図39	土製円板	2.6	2.9	1.0	9.4	SJ11-159
第168図40	土製円板	2.3	2.6	1.1	8.4	SJ11
第168図41	土製円板	1.9	1.8	0.7	3.0	SJ11-157
第168図42	土製円板	2.2	2.4	1.1	8.0	SJ11-20
第168図43	土製円板	3.7	3.9	0.5	11.9	SJ11-19
第168図44	土製円板	3.4	3.4	0.8	11.7	SJ11-115
第168図45	土製円板	2.5	2.7	1.0	6.4	SJ11-176
第168図46	土製円板	2.6	2.7	0.7	5.9	SJ11-17
第168図47	土製円板	1.9	2.2	1.1	5.3	SJ11-127
第168図48	土製円板	2.9	2.9	0.9	8.0	SJ11-142
第168図49	土製円板	2.2	2.3	0.7	4.8	SJ11-43
第168図50	土製円板	1.9	1.8	0.7	3.6	SJ11-11
第168図51	土製円板	2.2	2.4	1.0	7.3	SJ11-12
第168図52	土製円板	2.1	2.4	0.9	5.7	SJ11-188
第168図53	土製円板	2.6	2.7	1.0	8.9	SJ11
第169図54	土製円板	2.8	3.1	1.4	13.9	SJ12-348
第169図55	土製円板	2.6	2.7	1.0	8.9	SJ12-224
第169図56	土製円板	2.8	3.0	1.3	13.2	SJ12-249
第169図57	土製円板	3.2	3.4	0.8	10.6	SJ12-231
第169図58	土製円板	3.0	2.8	0.8	10.6	SJ12-266
第169図59	土製円板	3.0	3.1	0.9	11.6	SJ12-205
第169図60	土製円板	2.4	2.7	1.0	7.8	SJ12-233
第169図61	土製円板	3.4	3.4	1.5	19.2	SJ15-110
第169図62	土製円板	4.0	4.1	1.3	25.0	SJ15-92
第169図63	土製円板	2.8	3.2	7.0	7.9	SJ15-121
第169図64	土製円板	2.6	2.6	1.1	8.7	SJ16-280
第169図65	土製円板	3.2	3.3	1.2	15.2	SK21-1
第169図66	土製円板	3.5	3.5	1.2	15.6	SK73-1

第32表 第2次調査石製品観察表

図版番号	器種	石材	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第170図1	垂飾	チャート	2.6	1.8	0.5	2.8	SJ2-237
第170図2	垂飾	チャート	1.4	0.6	0.5	0.7	SJ8-567
第170図3	小型磨製石斧	透閃石	2.6	1.1	0.6	3.3	SJ14-24
第170図4	小型磨製石斧	透閃石	2.1	0.9	0.5	1.9	SJ5
第170図5	小型磨製石斧	砂岩	2.7	1.1	0.3	1.7	SJ16-119
第170図6	石製品	チャート	5.9	1.8	1.9	39.6	SJ6-89
第170図7	石棒	緑泥片岩	14.4	2.0	1.0	47.7	SJ10-461

閃石、5は砂岩であり入念な研磨を施している。3は14号住居跡、4は5号住居跡、5は16号住居跡からそれぞれ出土した。

6は6号住居跡から出土した直方体を呈する石製品である。6面とも丹念に磨いている。用途は不明である。

7は小型の石棒である。10号住居跡の覆土中から検出された。上部は円形に肥厚し、端部は溝状に打ち欠いている。形状は全体的に弧状を呈し、下半端部は丸く厚みを増す。

(7) 圧痕土器

2号住居跡出土土器 (第171図1、2)

1は底部付近の資料で内湾しながら立ち上がる器形である。器面には撚糸文が地文で施される。2はRLの単節縄文が地文である。いずれも縄文中期の深鉢形土器である。

3号住居跡出土土器 (第171図3、4)

3、4は加曾利EⅡ式の深鉢形土器である。3は頸部からやや内湾するように立ち上がり、口唇部は直立する。口縁部文様帯は区画文が描かれ、地文はRLの単節縄文が施される。口縁部直下は2条の隆帯が廻り、頸部は無文帯となる。4は底部片である。地文が施され、平行沈線による懸垂文が描かれる。底面直上は地文が磨り消され、帯状の無文帯となる。

4号住居跡出土土器 (第171図5)

5は加曾利EⅠ式の底部片である。やや内湾するような器形である。器面にはRLの単節縄文が施され、平行沈線と蛇行沈線が交互に懸垂文として描かれる。

7号住居跡出土土器 (第171図6～8)

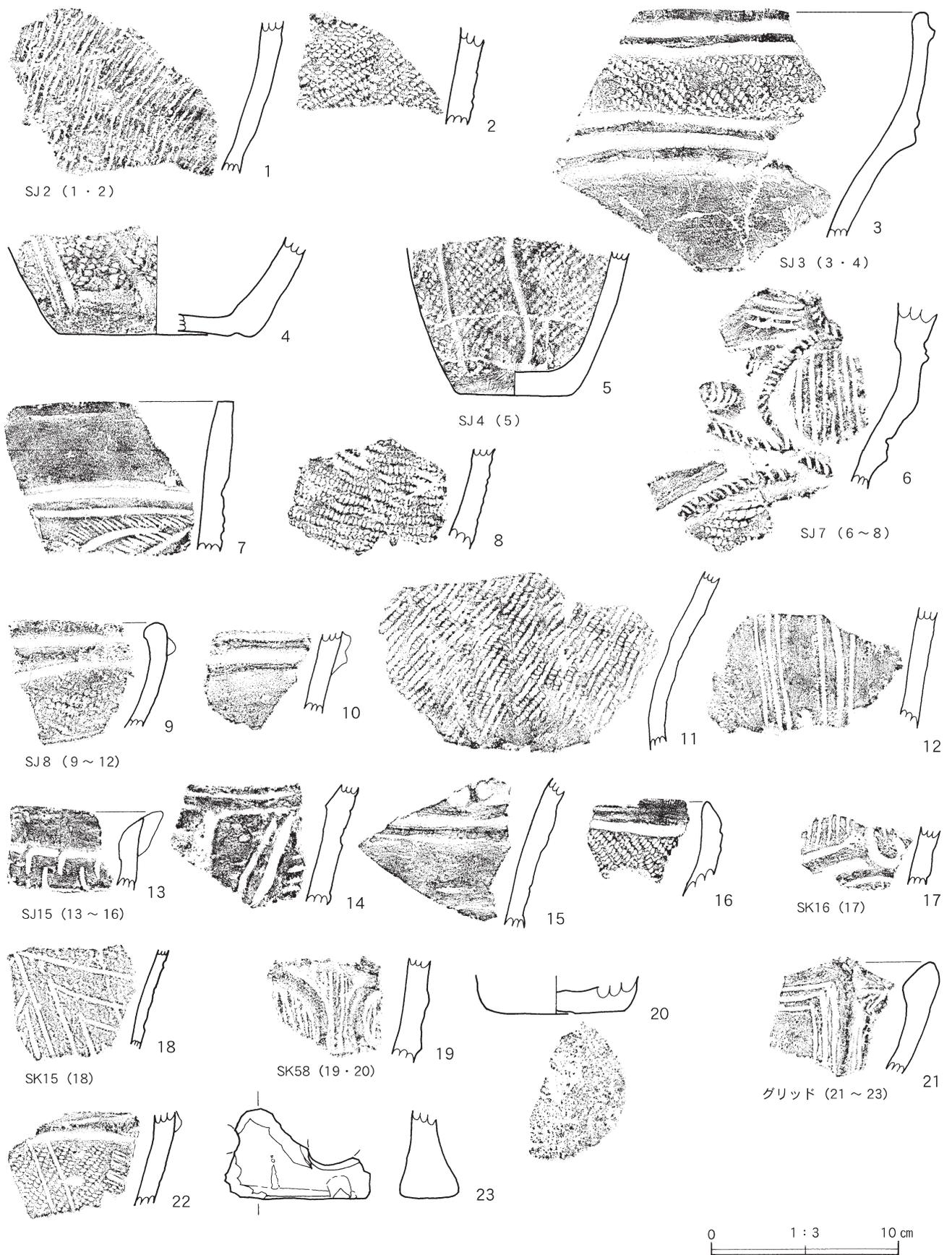
6、7は勝坂Ⅲ式である。6は刻みのある隆帯による楕円形の区画文を主文様として描く。区画内は縦位の集合沈線が充填され、土器の括れ部に横走する隆帯の直下は地文のみを施す。7は円筒形を呈する土器である。口唇部は平坦で、直下は広い無文帯となっている。胴部は横位の沈線文によって区画され、文様帯は斜位の爪形文により弧状の沈線文が描かれる。8は縄文中期の土器でRLの単節縄文を地文としている。

8号住居跡出土土器 (第171図9～12)

9、10は加曾利EⅠ式である。いずれも区画文を有し、地文は単節縄文である。10は頸部無文帯である。平行する2本隆帯が口縁部との境に施される。11、12は加曾利EⅠ式の底部から胴部下半の資料である。11は外反しながら立ち上がる器形で、RLの単節縄文を地文として施す。12は地文を施さず、平行する沈線による懸垂文が描かれる。

15号住居跡出土土器 (第171図13～16)

13、14は勝坂Ⅲ式である。13は口縁部が外屈し、屈曲部直下に半肉彫状の隆帯に交互短沈線を施して廻る。14は刻みのある隆帯が縦位の区画文を構成する。15は加曾利EⅠ式の頸部片で広い無文帯をもつ。16は加曾利EⅢ式の浅鉢形土器である。口唇部直下は帯状の無文帯で、口縁部は太い沈線が廻り、RLの単節縄文を施す。



第171図 種子圧痕検出土器

16号住居跡出土土器（第171図17）

17は加曾利 E I 式である。沈線による渦巻文から隆帯が派生して区画文を描く。

土坑出土土器（第171図18～20）

18は15号土坑より出土した堀之内Ⅱ式の土器である。沈線により幾何学文が描かれる。19、20は加曾利 E I 式の土器で58号土坑から出土した。19は撚糸文を地文として対向する弧状の隆帯が施される。20は底部片である。

グリッド出土土器（第171図21～23）

21は阿玉台Ⅱ式の土器である。波状口縁を呈し波頂部から隆帯を垂下させ、区画文を構成する。区画内は半裁竹管による平行沈線文が施される。22は頸部から平行沈線による懸垂文が垂下する。加曾利 EⅡ式である。23は器台の脚部である。底面は肥厚し、器面には貫通孔が外から内側へ施される。

第4節 第3次調査の遺構と遺物

第3次調査の概要については、第Ⅲ章第1節で述べたとおりである。第3次調査区の全体図は第172図に示した。

(1) 住居跡

第3次調査区では2軒の住居跡が検出された。帰属時期は勝坂Ⅲ式期が1軒と加曾利 EⅡ式期が1軒である。これより南側では遺構の検出がなく、中期環状集落のほぼ南限と捉えることができる。

1号住居跡（第173・174図、第33表）

本住居跡は C8 グリッド付近に位置する。南側で5号土坑を壊し、壁西の東側が攪乱によって壊される。平面形は概ね円形を呈し、長径5.3m、短径4.6m、深さ0.25mを測る。主軸は N - 2° - E を指向する。

住居跡は壁際に一段ステップ状の平坦面を設けて床面に達する。床面はほぼ平坦で硬く締まっている。壁溝は検出されず、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む茶褐色土を主体とする。

炉跡は埋甕炉で、床面中央から南東側で確認された。炉体土器は胴部下半を欠く深鉢形土器を埋設していた。平面形はほぼ円形を呈し、長径96cm、短径84cm、深さ28cmを測る。床面は平坦で、壁の立ち上がりはやや急である。覆土は焼土粒子を多く含む赤茶褐色土を主体とする。主軸は N - 45° - W を指向する。

ピットは床面から15基が検出されており、このうち P1～P9が支柱穴になると想定される。それぞれの深さは P1-71.5cm、P2-20.4cm、P3-11.1cm、P4-9.5cm、P5-8.2cm、P6-20.1cm、P7-8.3cm、P8-27.6cm、P9-78.7cmである。

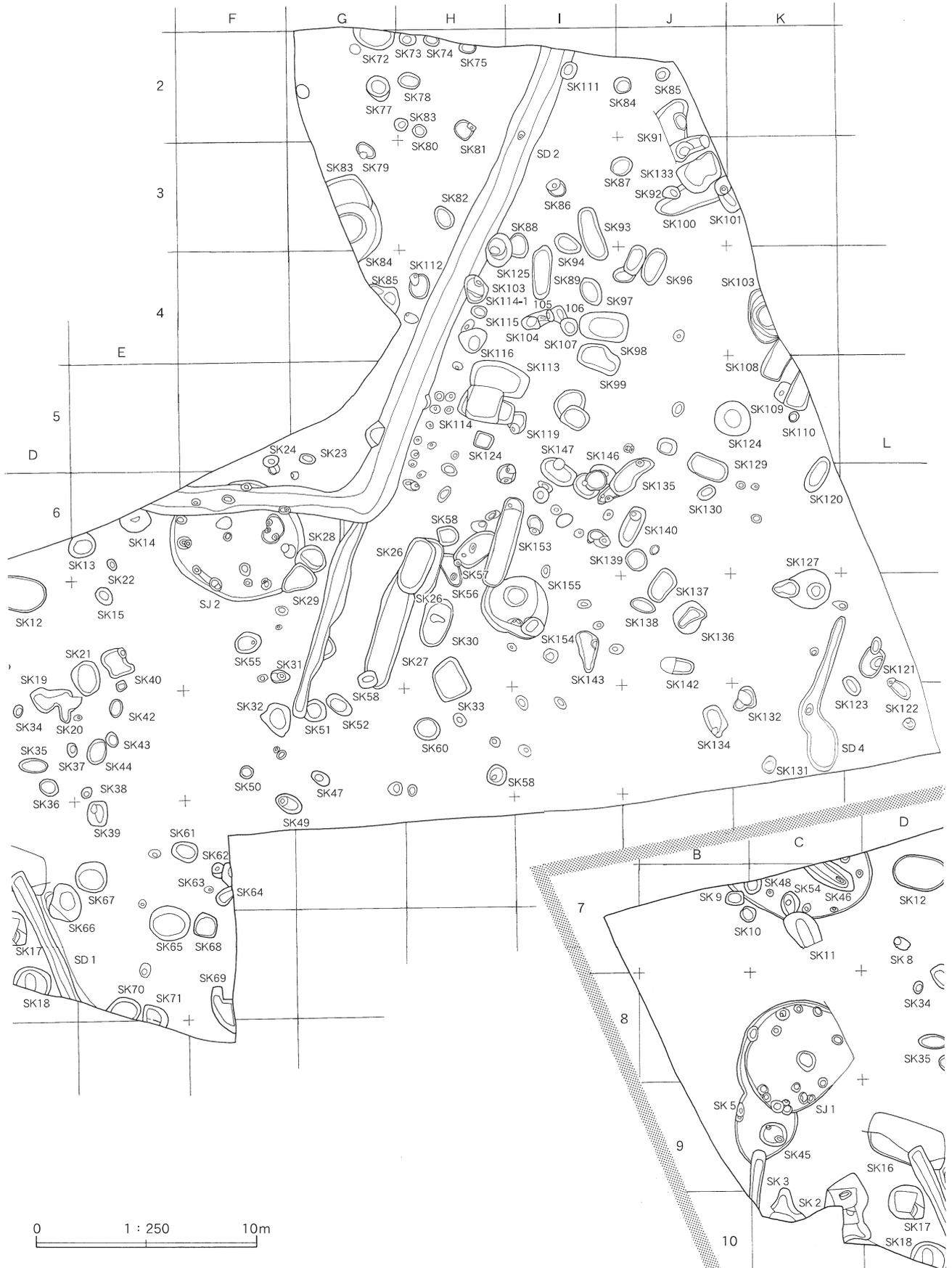
住居跡の帰属時期は出土遺物から加曾利 EⅡ式期に比定される。

第33表 1号住居跡柱穴計測表

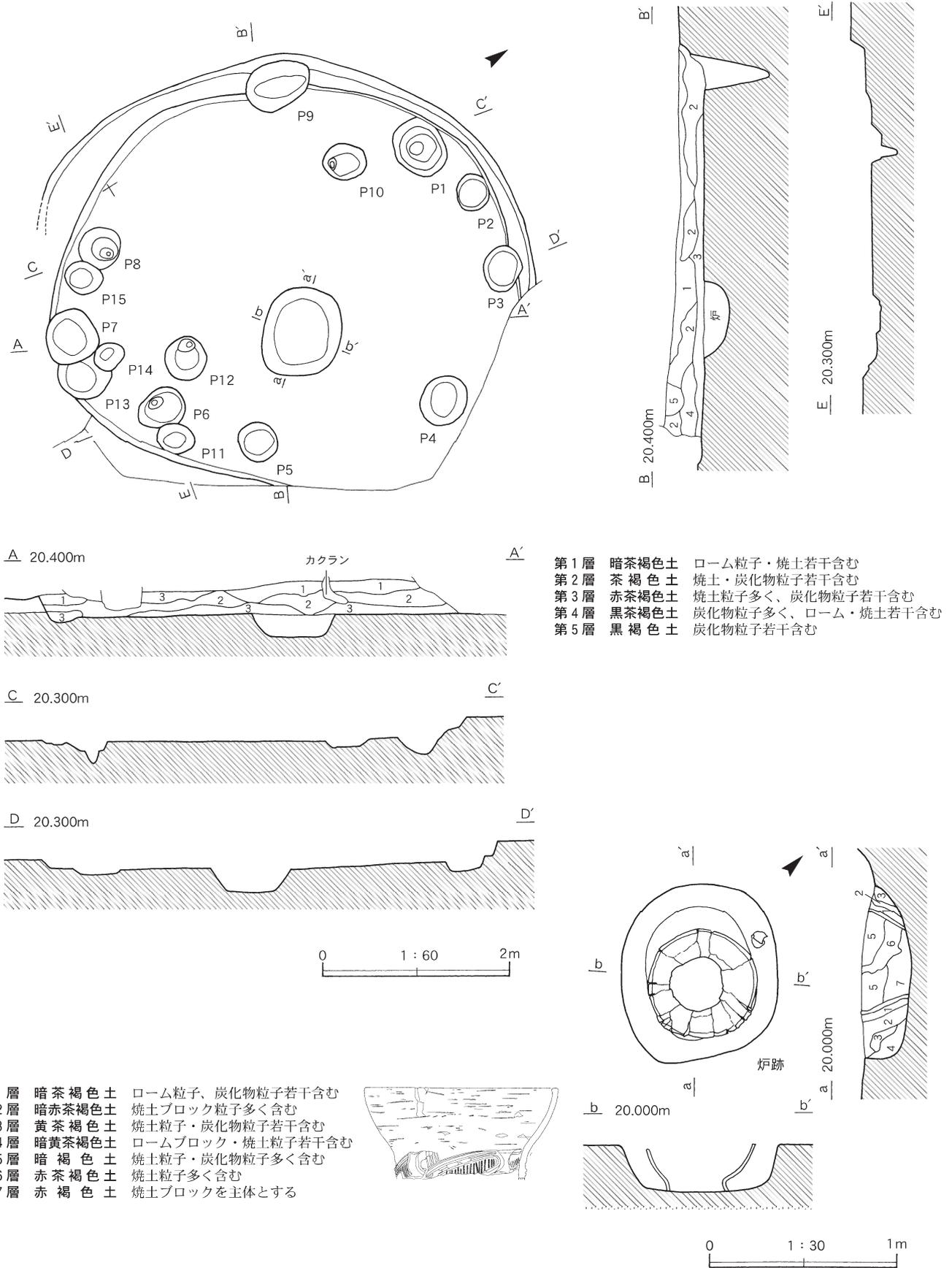
(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	63.0	71.5	P4	56.0	9.5	P7	56.0	8.3	P10	47.0	28.5	P13	57.0	9.4
P2	40.0	20.4	P5	44.0	8.2	P8	44.0	27.6	P11	42.0	9.4	P14	33.0	13.5
P3	50.0	11.1	P6	52.0	20.1	P9	70.0	78.7	P12	45.0	24.9	P15	41.0	8.5

第三章 台地上の調査（第1次～第3次調査）



第172図 第3次調査区全体図



第173図 1号住居跡

第三章 台地上の調査（第1次～第3次調査）



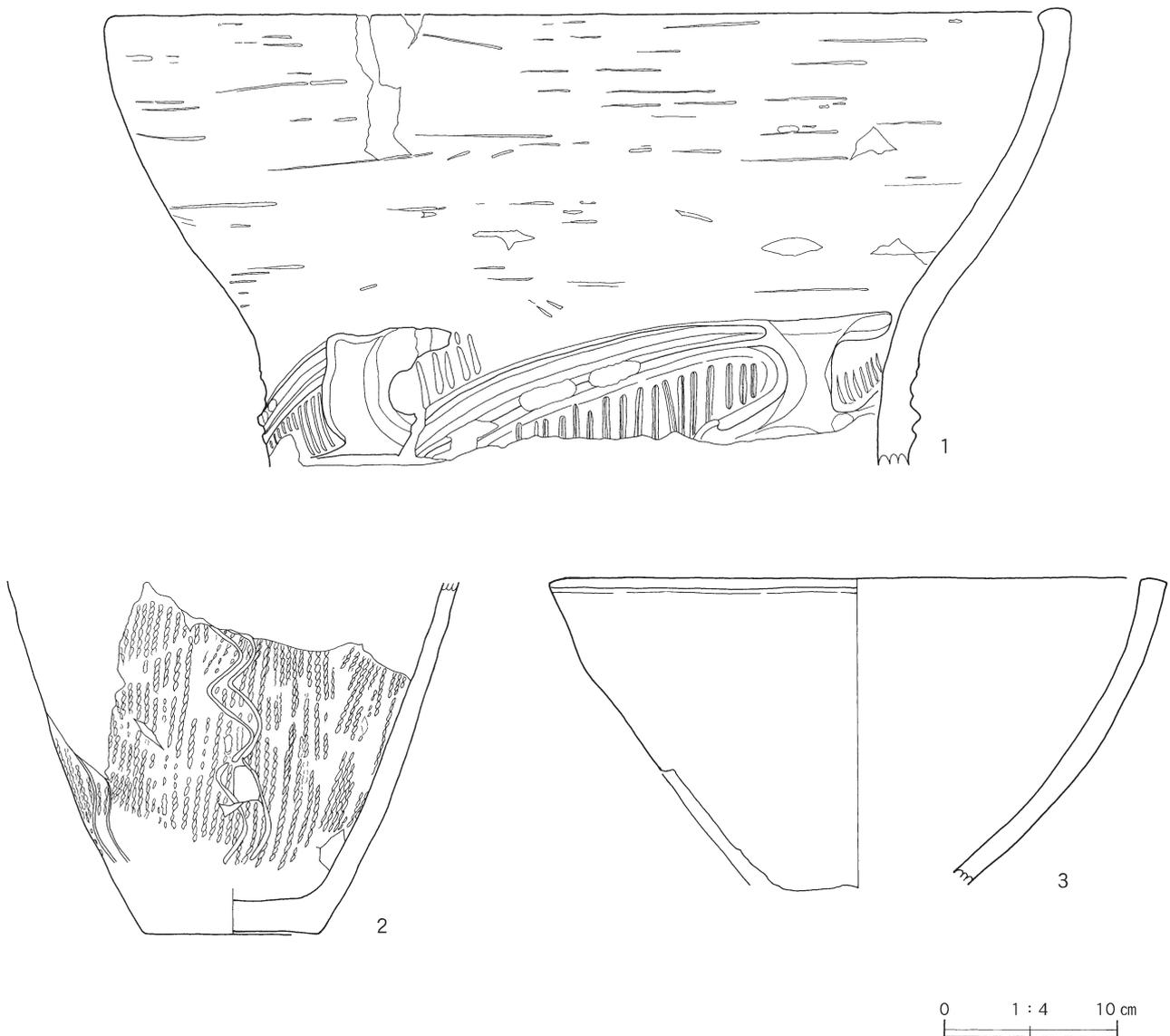
第174図 1号住居跡遺物出土状況

1号住居跡出土土器 (第175~177図)

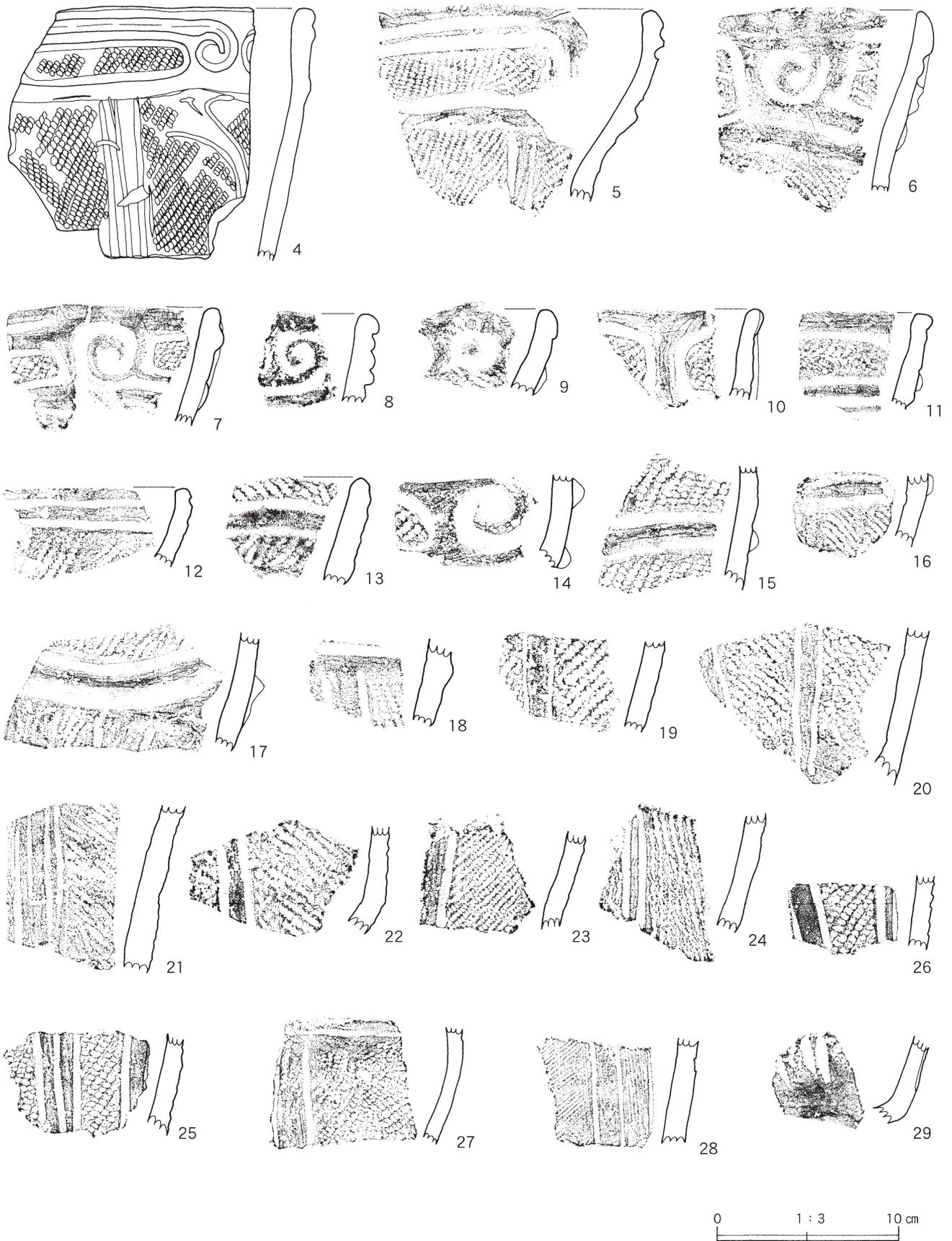
1は炉体土器である。曾利系の深鉢形土器で、頸部から下半を欠失する。頸部の立ち上がりは直線状で口縁部は内湾し、口唇部がやや肥厚して内側へわずかに張り出す器形である。口縁部は広い無文帯となっている。頸部は2本隆帯による楕円形区画文が斜状となって横位に展開する。区画文の端部を繋ぐように橋状把手を貼付する。区画文と把手はそれぞれ5単位を施す。口径は55.5cm、残存高は18.0cmである。胎土には細礫、砂粒を含む。色調は内外面とも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は深鉢形土器の底部である。立ち上がりはわずかに内湾する器形である。地文は単節RLの縄文による燃糸文を縦位に施している。懸垂文は2本一組で蛇行する沈線文を4単位施す。底部径は10.0cm、残存高は19.5cmである。胎土には片岩の細礫を含む。色調は内外面ともに茶褐色で焼成は良好である。

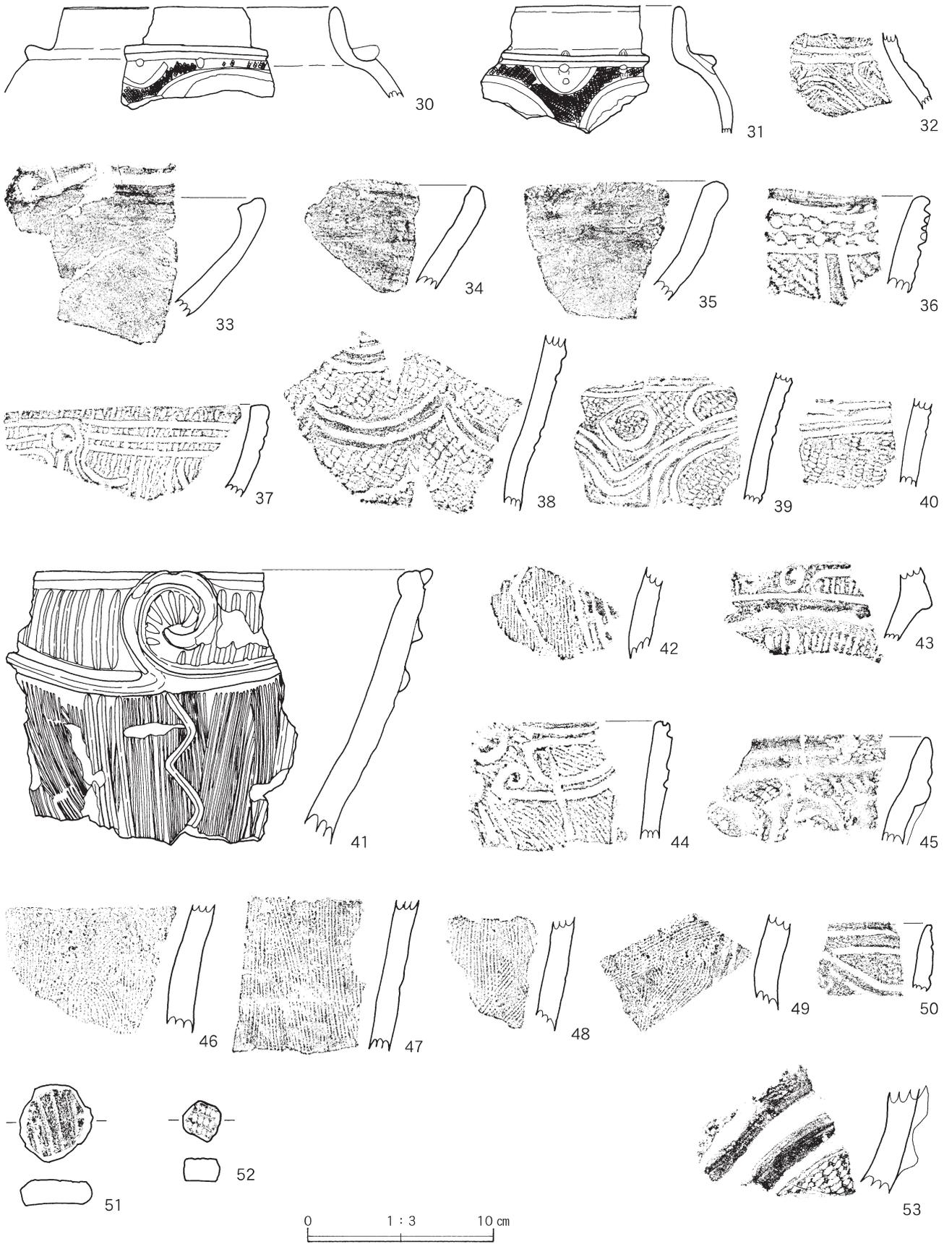
3は無文の浅鉢形土器である。底部からはわずかに内湾する立ち上がりである。器面は横ナデで成形しているが、仕上げは粗く、輪積痕に沿うように指頭圧痕も残されている。復元口径は36.5cm、残存高は18cmである。胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面ともに茶褐色で、焼成は良好である。



第175図 1号住居跡出土遺物 (1)



第176図 1号住居跡出土遺物（2）



第177図 1号住居跡出土遺物(3)

4～13は深鉢形土器の口縁部片である。4は胴部から口縁部の資料で、括れをもたず直線状に立ち上がる。口縁部文様帯は楕円形区画文が渦巻文とペアになって横位に展開する。胴部には磨り消し懸垂文と平行沈線の蛇行懸垂文を交互に施す。5は口縁部がわずかに内湾する。口縁部では太い沈線によって区画文を描く。胴部は2本の平行沈線による懸垂文を施す。6、7は渦巻文を挟んで対向する楕円形区画文を描く。8は横位の沈線が変化して渦巻文となる。9は円状の隆帯に縄文を施す。モチーフの中心は粘土を貼付してやや盛り上がる。10は区画文が対向する。11は区画文内の地文が羽状である。12は口唇直下に平行沈線が廻る。13はやや波状の口縁で、口唇直下に縄文帯を廻らせる。

14～17は頸部片である。14は区画文と渦巻文を半肉彫状に表現する。15～17は頸部と胴部を区画する隆帯が1条である。

18～28は懸垂文を描く深鉢形土器を一括した。いずれも平行する沈線によって描かれ、内部は地文を磨り消している。24の地文は縦位の燃糸文である。28は地文に縦位と斜位の条線を施す。

29は深鉢形土器の底部付近の資料である。太い沈線による懸垂文を施す。

30、31は有孔鏝付土器である。いずれも胴部に最大径をもつ。頸部に鏝状の突帯を設け、鏝元から胴部にかけて小孔を等間隔で貫通させる。胴部には磨り消しによる弧状の縄文帯を配する。32は鏝状の突帯はないが胴部に最大径をもつ。頸部には平行沈線が廻り、弧状の沈線文は30、31のモチーフに類似する。

33～35は浅鉢形土器である。33は口唇部に沈線が廻り、端部が小渦巻文に変化する。34、35は口縁部が外反しながら直線状に立ち上がる器形である。

36～40は連弧文土器である。36は口唇部直下の2列の刺突文が廻り、ここから沈線が垂下する。37は口唇部直下まで地文を施し、3本の平行沈線が横位に廻る。沈線の途中には円文を配して起点とし、弧状の沈線が派生する。38は2本の平行沈線による弧線文で、内部は磨り消している。39は胴部下半のモチーフで玉抱文を描く。40は胴部を区切る平行沈線である。

41、42は曽利系の土器である。41は口縁部文様帯に集合沈線の地文を施し、頸部の隆帯から派生した渦巻文が口唇部を飛び出して突起状となる。胴部は細かい縦位の条線で、複数本の沈線、蛇行沈線による懸垂文を施す。42は同一個体の可能性がある。蛇行懸垂文を描く。

43は加曾利EⅠ式の深鉢形土器である。頸部片で口縁部文様帯にはクランク状の沈線文と小渦巻文を施す。44は加曾利EⅢ式の深鉢形土器である。口縁部文様帯を沈線で描き、楕円形区画文と頸部の区画部から派生する渦巻文を描く。45は口唇部直下の隆帯上に縄文を施す。

46～49は条線のみを施文する深鉢形土器の胴部片で、加曾利EⅢ式に比定される。

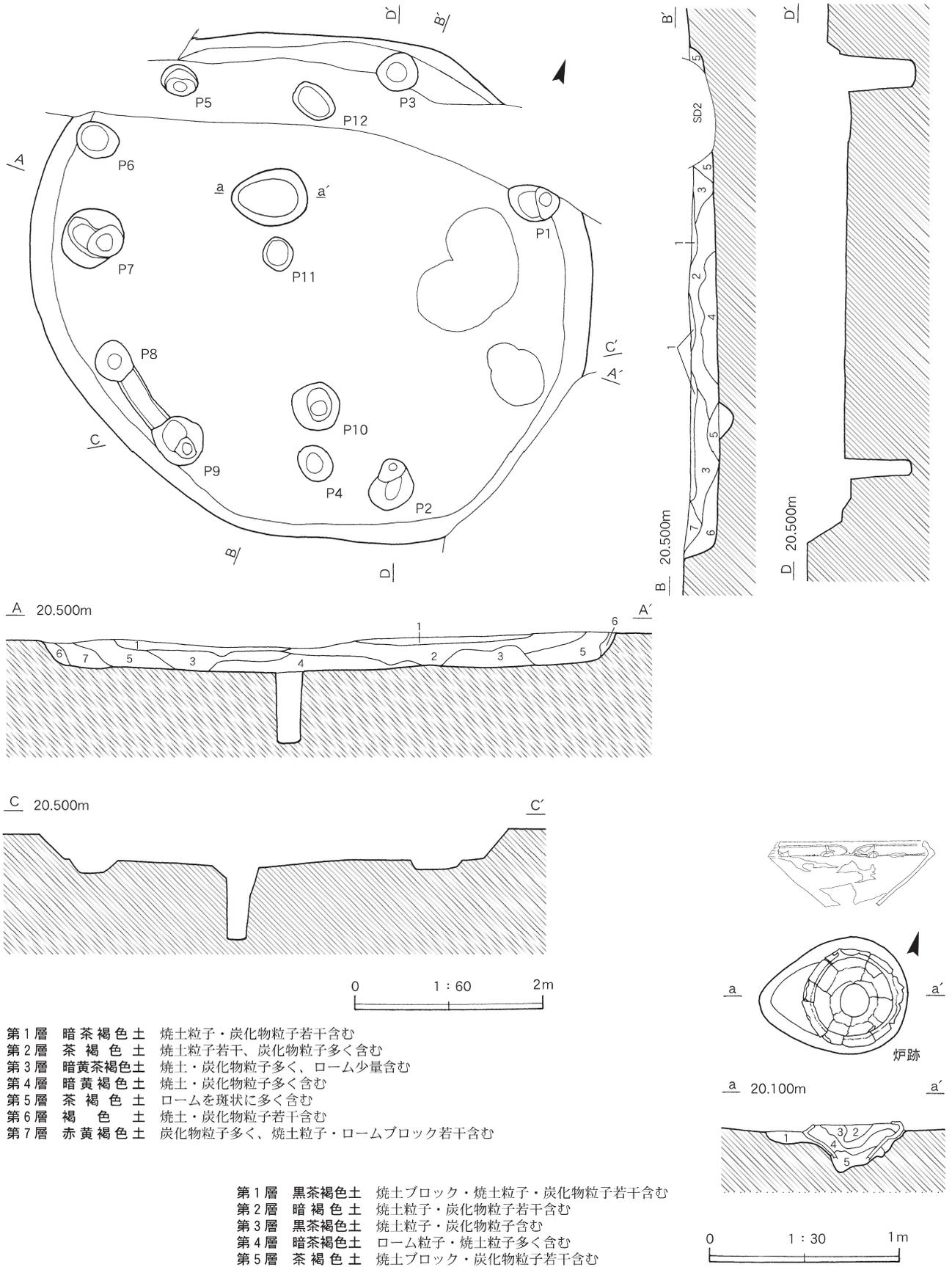
50は口縁部片で、沈線による横位の区画文が施される。

51、52は土製円板である。土器片の周囲を研磨して円状に加工する。53は植物種子の圧痕が検出された土器である。深鉢形土器の口縁部片で、弧状の隆帯が地文上を横走し、区画文を描くと考えられる。加曾利EⅢ式である。

2号住居跡（第178・179図、第34表）

住居跡は、F6グリッドに位置する。住居跡に中世の2号溝が縦貫して一部を壊しているが、ほぼ全体を調査している。平面形は楕円形を呈しており、規模は長径6.2m、短径5.5m、深さ0.3mを測る。主軸はN－33°－Wを指向する。

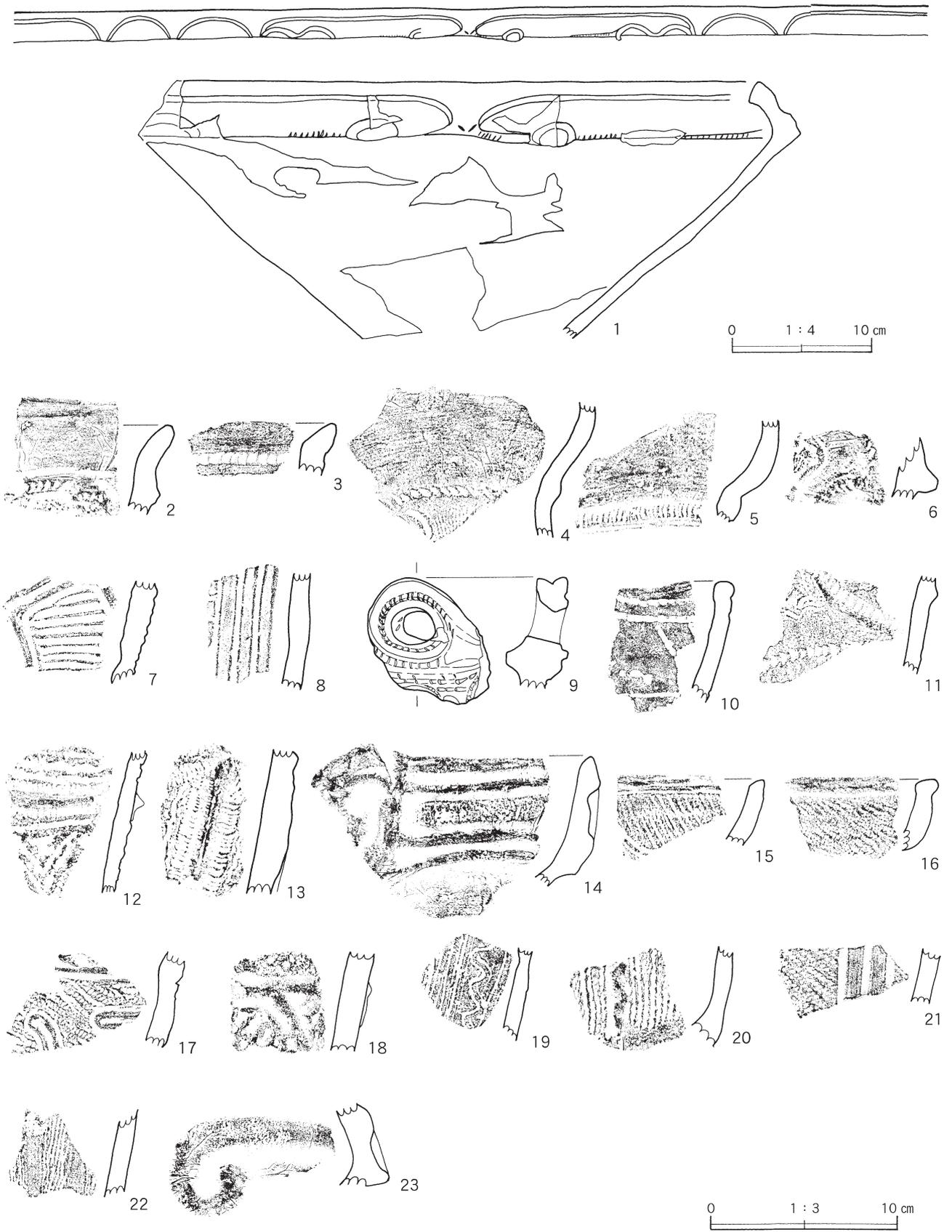
床面はほぼ平らで硬く締まる。壁溝は南西の一部分で確認されており、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む暗黄褐色土を主体とする。



第178図 2号住居跡



第179図 2号住居跡遺物出土状況



第180図 2号住居跡出土遺物

炉跡は埋甕炉で、底部を欠く浅鉢形土器を埋設していた。炉跡は床面中央よりわずかに北側で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径80cm、短径62cm、深さ18cmの規模である。床面は埋甕の形態に合わせて掘削しており、炉跡西側はテラス状に一段高くなっている。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土が主体として堆積する。主軸はN-79°-Eを指向する。

ピットは床面から12基が検出されており、このうちP1～P7が主柱穴であると想定される。それぞれの深さはP1-140.5cm、P2-118.3cm、P3-136.5cm、P4-125.5cm、P5-124.8cm、P6-120.4cm、P7-150.2cmである。住居跡の帰属時期は勝坂Ⅲ式期に比定される。

第34表 2号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	57.0	140.5	P4	41.0	125.5	P7	66.0	150.2	P10	51.0	135.2
P2	54.0	118.3	P5	40.0	124.8	P8	41.0	17.0	P11	34.0	131.0
P3	43.0	136.5	P6	46.0	120.4	P9	52.0	138.9	P12	49.0	116.1

2号住居跡出土土器（第180図）

1は炉体土器で浅鉢形土器である。底部を欠失する。器形は底部から直線的に立ち上がり、口縁部で内側に屈曲し、口唇部は肥厚して内面に稜をもつ。口縁部文様帯は口唇部直下及び屈曲部に隆帯を貼付し、横長の楕円形の区画文を展開する。区画文内は楕円形、連続する弧線の隆帯を交互に貼付する。正面には逆「ハ」字状の刻みが加えられ、挟み込むように楕円形の隆帯が対向する。獣体を表現している可能性も考えられる。復元口径は42.0cm、現存高22.0cmである。胎土には片岩の細礫を含み、色調は内外面ともに茶褐色を呈する。2次的な被熱の影響で、器面は荒れている。

2～8は勝坂式土器である。2は無文の口縁部直下に刻みのある隆帯が廻り懸垂文を施す。3は屈曲部に角押文を施す。4、5は内湾する無文の口縁部直下に隆帯が廻る。4は刻み、5は爪形文を施す。6は隆帯による縦位のモチーフである。7は区画文内に集合沈線が充填される。8は円筒形を呈する深鉢形土器で、縦位の沈線を描く。

9～13は阿玉台式土器である。9は円形の突起部で、貫通孔を有する。円文の周囲は角押文を施し、突起直下には横位に2列の角押文を配する。10は波状口縁である。口唇部直下は2列の角押文を施し、口縁部には同様に角押文によるモチーフを描く。11は胴部片である。断面三角形の隆帯に沿って幅広の爪形文を施す。12、13は断面三角形の隆帯に沿って複数列の爪形文を施す。

14は平口縁に小突起を配し、直下に渦巻文を描く。隆帯による楕円形区画文を横位に描き、頸部は広い無文帯である。15は口唇部直下に平行沈線が廻り、地文上に弧状の隆帯が横走する。16は口唇部直下が磨り消しによる無文帯となる。

17～22は深鉢形土器の胴部片である。17は半肉彫状の楕円形隆帯のモチーフを配する。18は蛇行する懸垂文である。19は蛇行沈線文が垂下する。20は隆帯上に交互刺突文を施した懸垂文である。21は3本の平行する懸垂文間を磨り消す。22は磨り消しのみで描かれる带状の懸垂文が平行する。

23は浅鉢形土器である。隆帯が渦巻文を描き、端部が突起状となる。

(2) 土坑

縄文時代の土坑は覆土や遺物の出土状態から判断し、34基を確認した。その分布は調査区の比較的西半分に偏在しており、規模、形態はさまざまであった。

遺構の所属する時期は縄文時代中期後半が主体である。これらの土坑については第35表に記載し、ここでは特徴的な土坑や遺物を伴った土坑について記述する。

5号土坑（第181図、第35表）

C9グリッドに位置する。北側を1号住居跡に南側を中世の3号土坑に切られる。また床面から検出した45号土坑の埋没後に、重複して構築していた。平面形は隅丸三角形を呈する。その規模は長径284cm、短径253cm、深さは48cmである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む茶褐色土を主体とする。床面は平坦で、楕円形のピットが2基検出された。壁の立ち上がりは緩やかである。

46号土坑（第182図、第35表）

C7グリッドに位置する。いわゆるTピットで落とし穴である。北部は調査区外である。調査範囲における規模は長径210cm、短径107cm、深さは54cmである。平面形は長楕円形を呈する。床面は平坦であるが、端部にピットが1基穿たれる。壁は急激に立ち上がり、中程から稜をもって変化して緩やかとなる。覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む暗茶褐色土を主体とする。遺物の出土は少なく図示するものはなかった。

90号土坑（第183図、第35表）

F6グリッドに位置する。埋没後の2号住居跡を掘り込んで構築していた。平面形は円形を呈し、長径145cm、短径140cmを測る。深さは2号住居の覆土上面から計測すると約70cmである。床面は平坦で、壁は直立する。土坑には大型の深鉢形土器が伏甕として逆位に埋設されていた。土器内の覆土上層には浅鉢形土器、深鉢形土器の底部、凹石、磨石などを充填していた。土器内の覆土はローム粒子、炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土を主体とする。

5号土坑出土土器（第184図1）

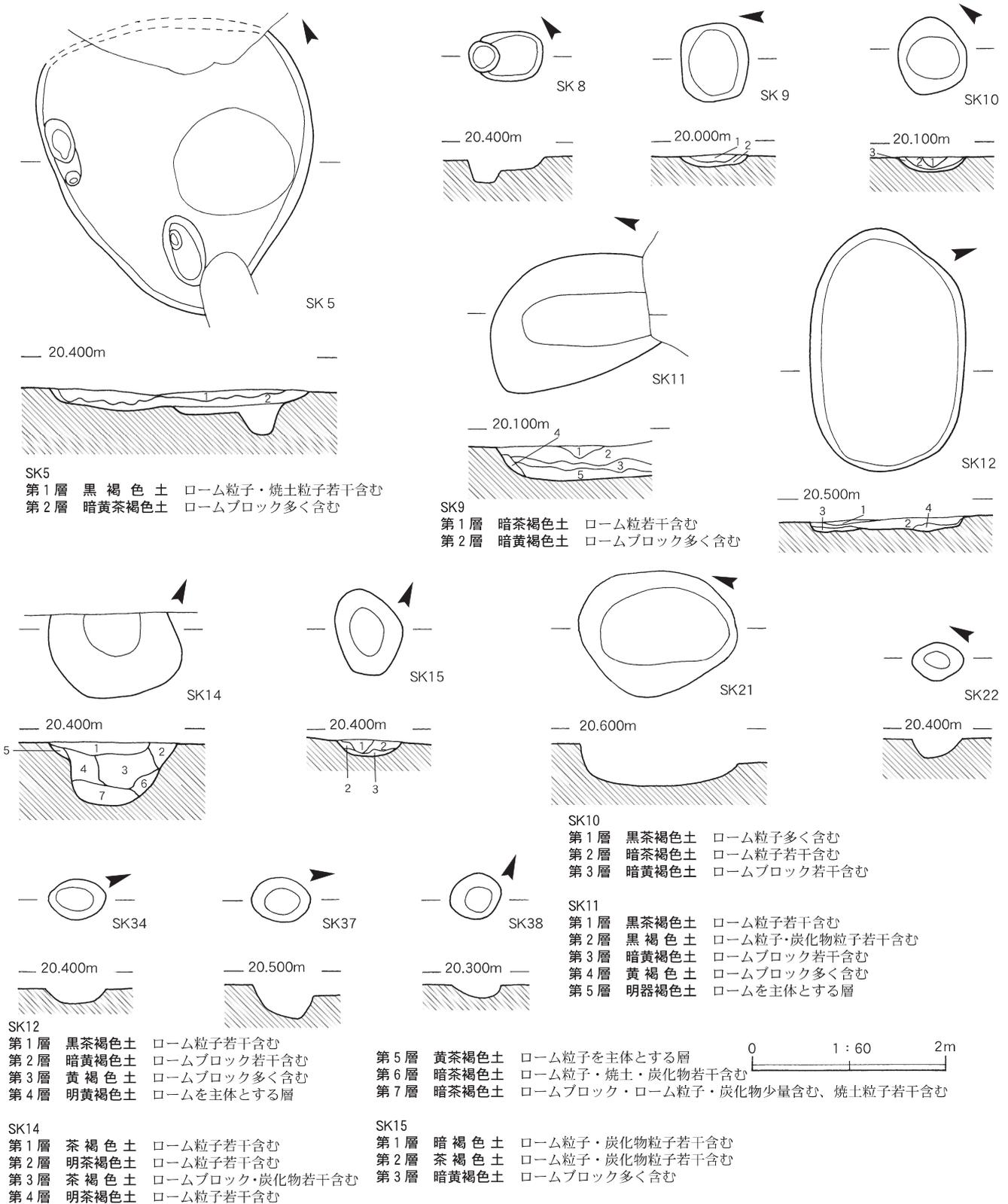
1は深鉢形土器の胴部である。復列の角押文を懸垂文として施す。モチーフは逆U字状の文様の中心に蛇行懸垂文を描き、平行して再び蛇行懸垂文を施して4単位描く。器形はわずかに外反するが、直線的に立ち上がる。底径は7.5cm、現存高は13.0cmである。阿玉台Ⅱ式である。

90号土坑出土土器（第184・185図2～4）

2はキャリパー形の深鉢形土器である。土坑内に伏甕として逆位に埋設されていた。検出時は底部を欠失した状態であったが、土器内から底部が出土し、高さの復元を行うことができた。土器は大型であり、口径は63.0cm、復元高は70.5cmである。口縁部文様帯は楕円形の区画文とそこから派生する渦巻文を組み合わせで展開する。正面のモチーフは区画文の上位隆帯から派生した渦巻文が右に巻き、次は下位隆帯から左巻きとして交互に5単位配する。頸部から垂下する懸垂文は平行沈線による懸垂文で、沈線間は地文を磨り消している。施文は12単位で底部まで達する。地文は複節縄文RLRが施される。底部径は11cmで、底面を穿孔する。伏鉢内の土器はいずれも破損した状態であったが、深鉢形土器の底部、浅鉢形土器、多孔石、磨石を底部方向から充填したような状態で検出した。土器の胎土には片岩の細礫を多く含み、色調は内外面ともに

茶褐色を呈する。焼成は極めて良好である。

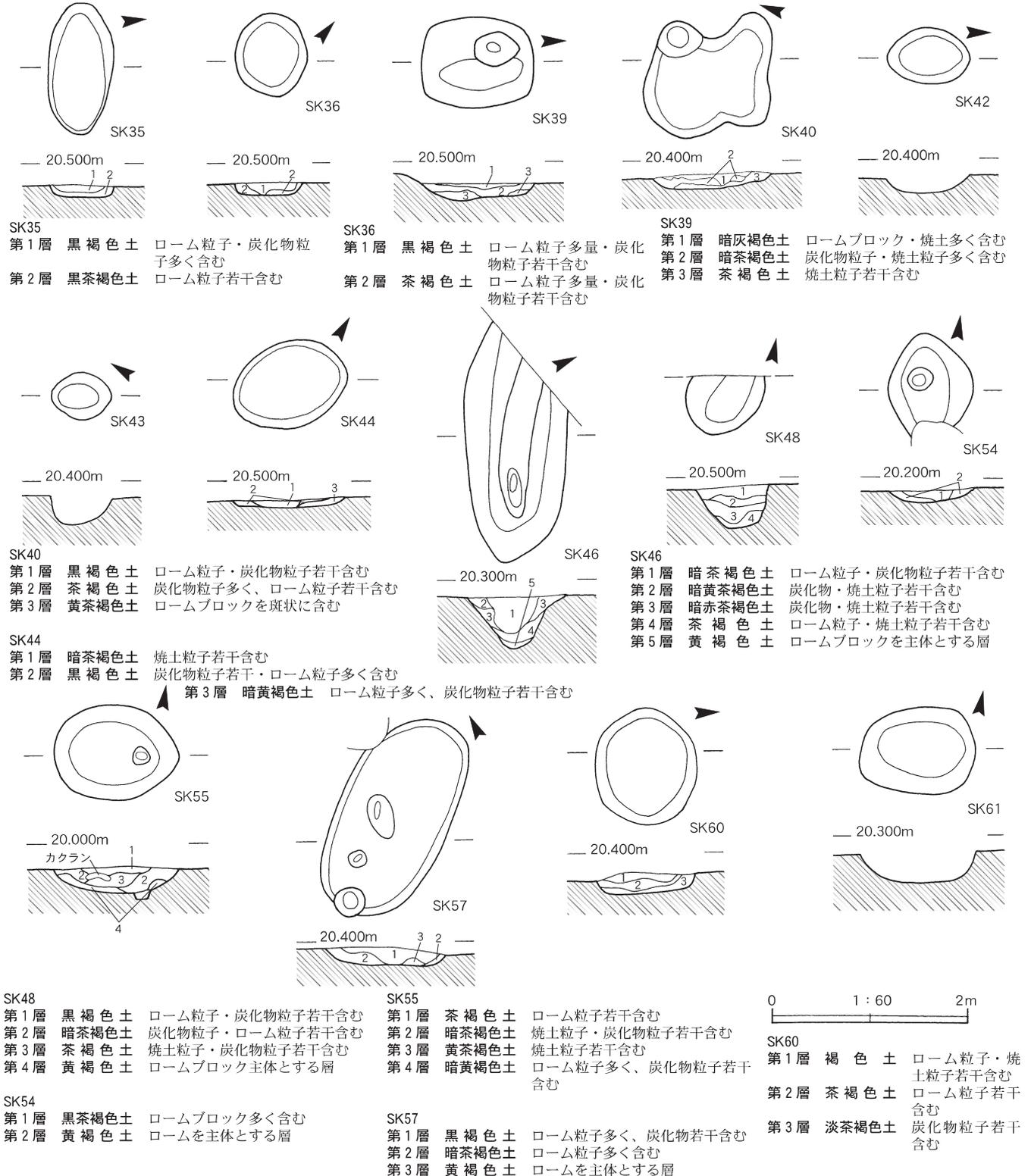
3は深鉢形土器の底部から胴部の破片で、伏甕内に埋納されていた。底部から直線状に立ち上がる器形である。地文にRLの単節縄文を施し、平行沈線による懸垂文を描く。懸垂文内は磨り消しが未熟である。底径は6.0cm、現存高は19.5cmである。胎土には細礫を含む。内外面ともに茶褐色を呈し、焼成は良好である。



第181図 土坑（1）

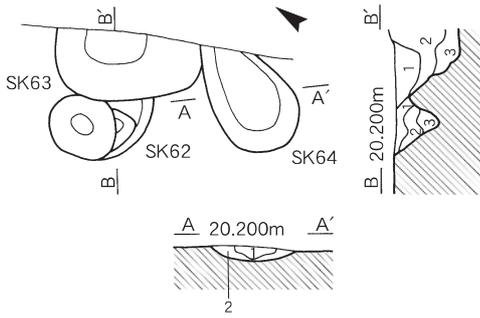
4は浅鉢形土器で伏甕内部から検出された。底部からやや内湾気味に立ち上がり、頸部に最大径をもって強く内湾し、口縁部は直線状に外反する。口唇部の断面形は弧状に成形される。内外面ともに横位のミガキを丁寧に施す。復元口径は40cmで、現存高は24.5cmである。胎土には細礫を含む。内外面の色調はともに暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

出土土器はいずれも加曾利EⅢ式である。



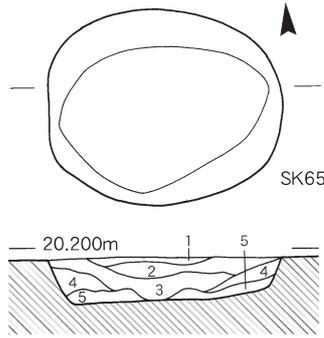
第182図 土坑(2)

第Ⅲ章 台地上の調査（第1次～第3次調査）



- SK62
 第1層 暗茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第2層 茶褐色土 ロームブロックを主体とする層
 第3層 黄褐色土 ソフトローム

- SK63
 第1層 暗茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第2層 茶褐色土 ローム粒子多く含む
 第3層 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子若干含む

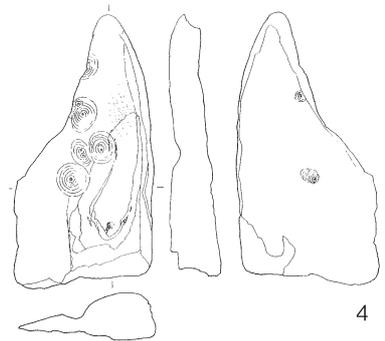
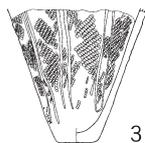
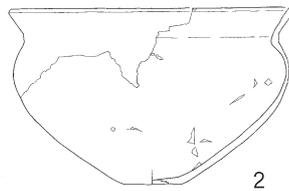
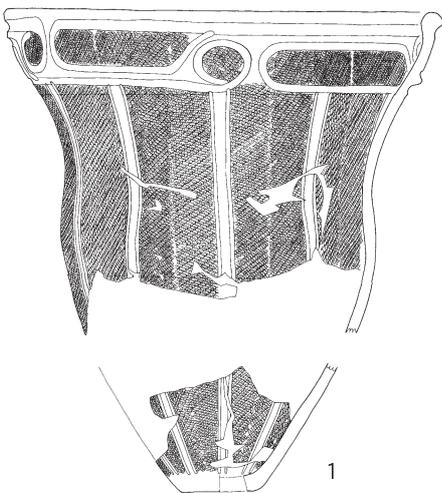
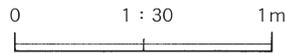
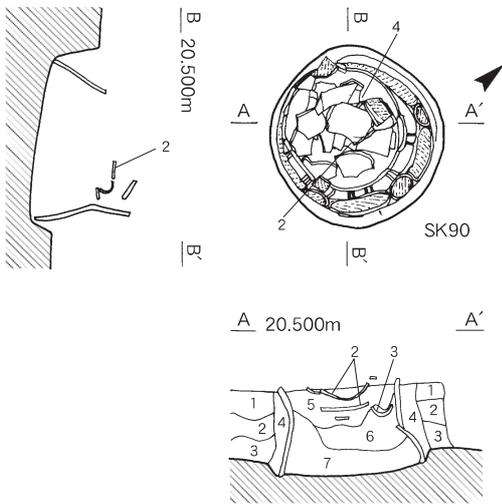


- SK64
 第1層 黒茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子若干含む
 第2層 茶褐色土 ローム粒子多く含む

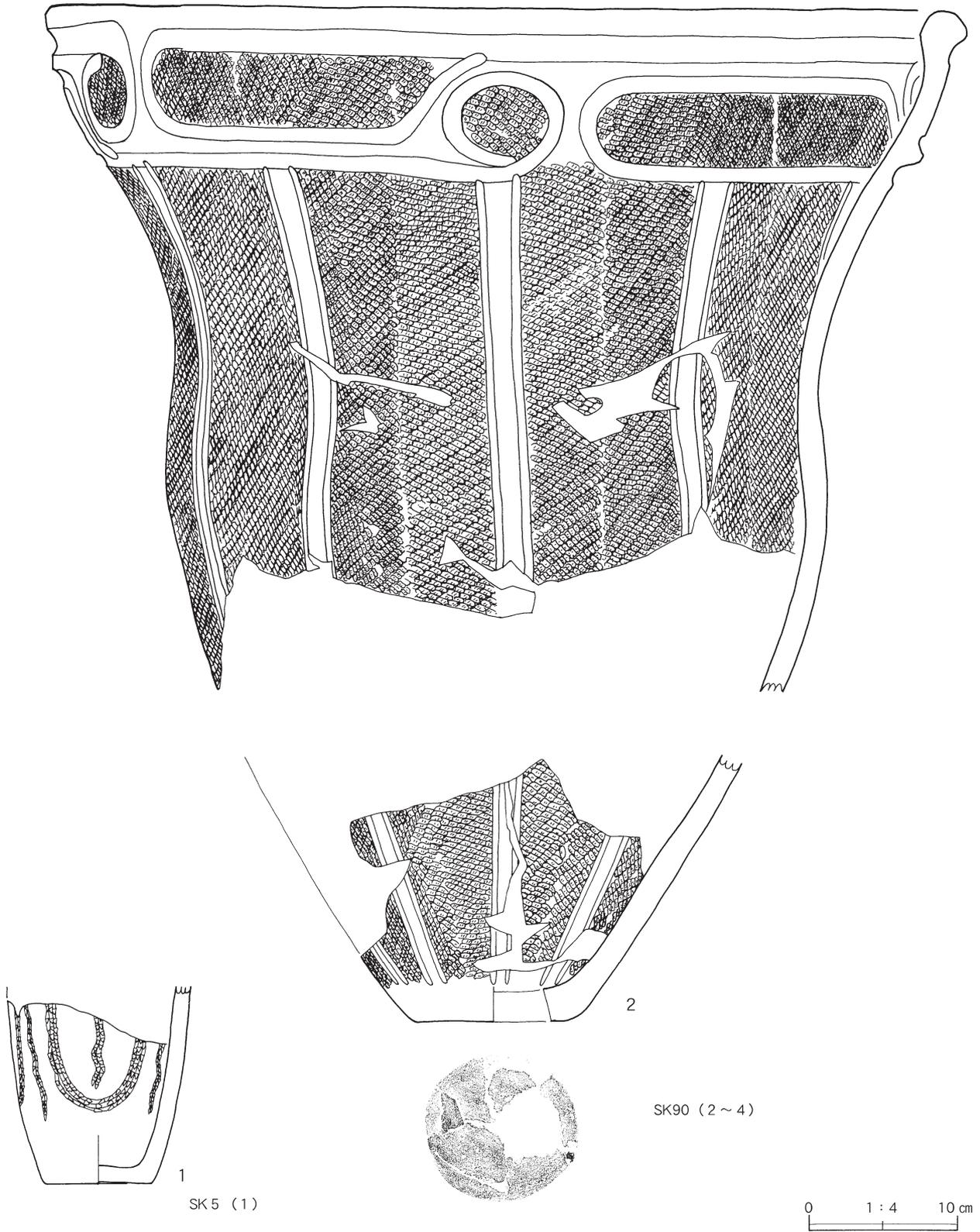
- SK65
 第1層 褐色土 ローム粒子多く、焼土粒子若干含む
 第2層 茶褐色土 ローム粒子多く含む
 第3層 黄茶褐色土 ロームブロック・粒子を若干含む
 第4層 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む
 第5層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする層

- SK68
 第1層 褐色土 ロームブロック・粒子若干含む
 第2層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする層

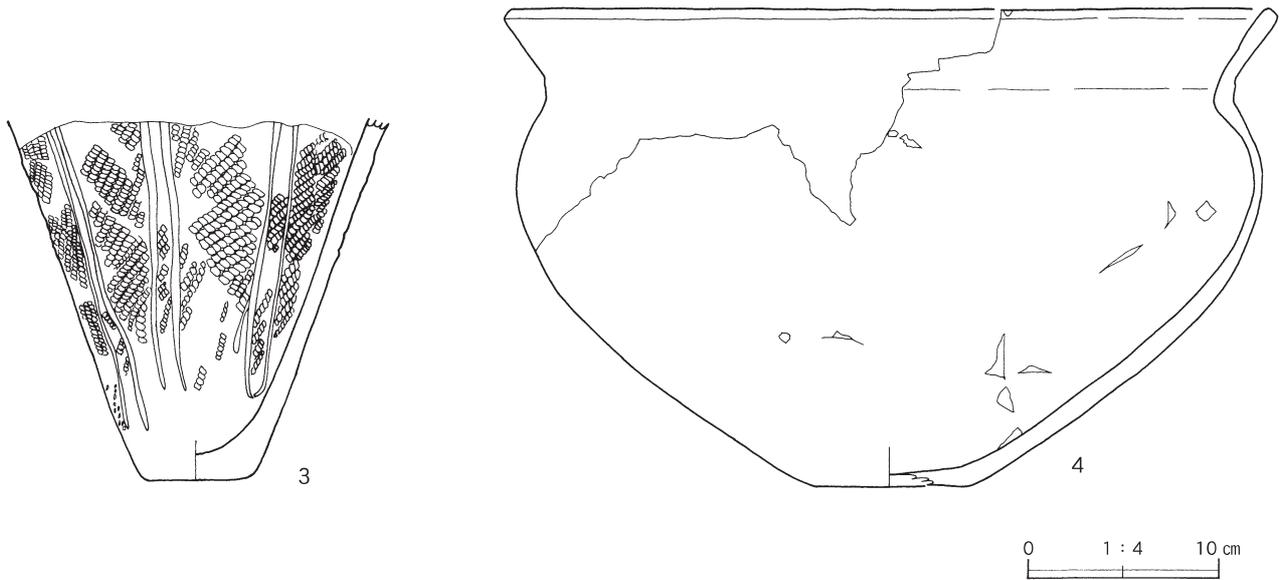
- SK90
 第1層 褐色土 ローム粒子・ブロック多く含む
 第2層 暗黄褐色土 ローム粒子多く、焼土粒子若干含む
 第3層 赤茶褐色土 ローム粒子若干含む
 第4層 黒茶褐色土 ローム粒子多く、炭化物粒子若干含む
 第5層 黄茶褐色土 ローム粒子多く含む
 第6層 赤茶褐色土 ロームブロック多く含む
 第7層 褐色土 炭化物粒子若干、ローム粒子多く含む



第183図 土坑（3）



第184図 土坑出土遺物 (1)



第185図 土坑出土遺物（2）

第35表 土坑計測表

遺構名	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主 軸	形 態
5号土坑	C9	284	(253)	48	N-20°-E	不整円形
8号土坑	D7	78	52	13	N-50°-W	不整楕円形
9号土坑	B7	83	72	13	N-89°-E	不整楕円形
10号土坑	B7	80	72	16	N-40°-E	円形
11号土坑	C7	(170)	130	38	N-22°-W	不整楕円形
12号土坑	D7	256	164	15	N-74°-W	不整楕円形
14号土坑	E6	138	(88)	67	N-23°-W	不整円形
15号土坑	E7	93	68	18	N-36°-W	不整楕円形
21号土坑	E7	167	133	37	N-25°-W	不整楕円形
22号土坑	E6	55	41	20	N-28°-W	楕円形
34号土坑	D8	60	43	16	N-18°-E	楕円形
35号土坑	D8	134	68	13	N-80°-W	楕円形
36号土坑	D8	87	75	14	N-44°-W	不整円形
37号土坑	D8	62	47	28	N-5°-E	楕円形
38号土坑	E8	52	49	13	N-56°-E	不整円形
39号土坑	E9	118	96	18	N-56°-E	不整長方形
40号土坑	E7	132	118	16	N-20°-W	不整円形
42号土坑	E8	87	57	17	N-2°-E	楕円形
43号土坑	E8	63	50	29	N-33°-W	楕円形
44号土坑	E8	122	88	8	N-36°-E	楕円形
46号土坑	C7	(210)	107	54	N-55°-E	不整楕円形
48号土坑	C7	(68)	76	45	N-15°-E	楕円形
54号土坑	C7	(92)	90	13	N-14°-W	不整円形
55号土坑	F7	131	100	34	N-78°-E	不整楕円形
57号土坑	H6	226	118	19	N-51°-E	楕円形
60号土坑	H8	122	106	23	N-80°-W	楕円形
61号土坑	E9	120	91	32	N-79°-E	楕円形
62号土坑	F9	69	(49)	34	N-30°-W	不整円形
63号土坑	F9	(114)	(55)	52	N-32°-W	不整円形
64号土坑	F9	(90)	63	12	N-60°-E	不整楕円形
65号土坑	E10	185	155	36	N-80°-E	楕円形
68号土坑	F10	112	108	12	N-23°-E	不整円形
90号土坑	F6	72	70	35	N-51°-E	円形

グリッド出土土器 (第186図)

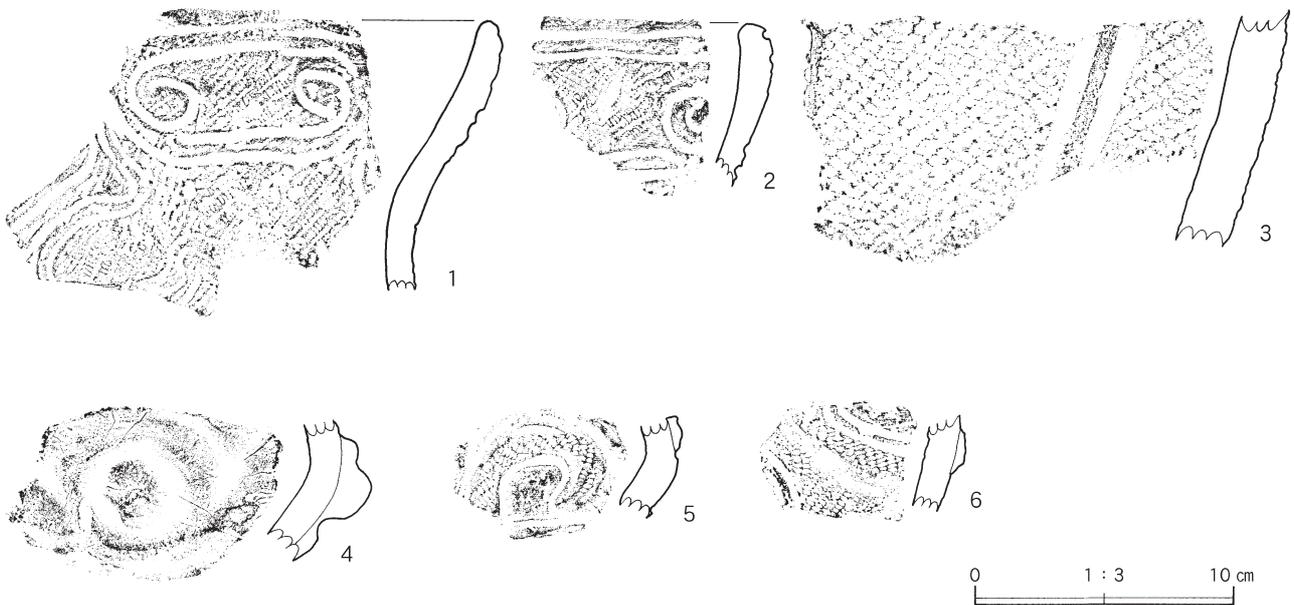
ここでは、グリッド及び縄文時代以外の遺構から出土した縄文土器を一括して掲載した。

1、2は同一個体で、キャリパー形の連弧文土器である。地文は附加条で軸繩の撚りと同方向に繩を巻き上げる。モチーフは沈線で施し、主文様は横位の蕨手文を組み込み状に描く。口縁部から縦位の蛇行沈線文が垂下する。

3は深鉢形土器の胴部片で、懸垂文を描く。90号土坑出土の伏甕の一部の可能性はある。

4は浅鉢形土器の胴部片である。隆帯により渦巻文を描き、端部が外側に肥厚して突起状である。

5、6は阿玉台Ⅳ式の土器で、口縁部付近の破片である。弧状の隆帯上に縄文が施される。



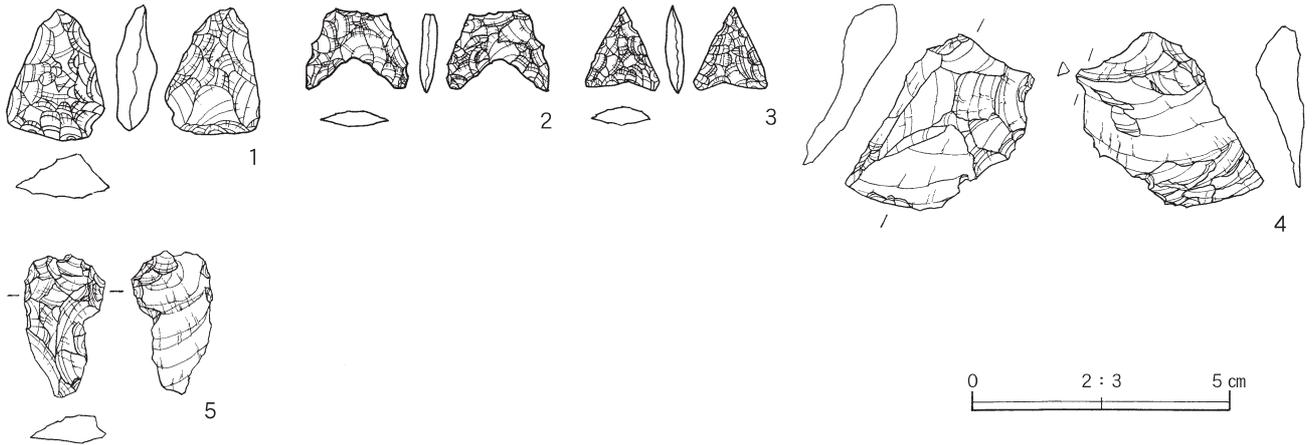
第186図 グリッド出土遺物

(3) 石器 (第187~190図、第36表)

第3次調査区は台地部の調査区で、出土した石の総量は約20kgである。環状集落の南縁に近く、遺構は住居跡2軒の検出である。1号住居跡の覆土からは1及び4~14の11点の石器が検出されている。土坑は34基を検出しているが、石器は9基の土坑の覆土中から出土している。また、2号溝跡の覆土からは第190図26、27、29~34が出土している。この溝は近世以降の所産であるので、これらの石器は2号住居跡覆土に包含されていたものが多いと考えられる。

1~3は石鏃としたが、1は未成品であろう。2は上半部欠損である。4、5は縁辺に微細な小剥離痕が認められることから、使用痕のある剥片で、スクレーパー的機能が類推される。6は表裏に凹みが認められ、多孔石を再利用した打製石斧である。7、8、10、12の4点は棒状の礫を用いた磨石、敲き石である。9は楕円形の扁平な礫を素材とした凹石で、表裏両面の中央部に浅い凹みが認められる。11は磨石の破片であるが、切断面にも磨滅痕が認められる。復元推定径が10cm程度になり、遺跡内に運び込まれた素材の大きさが類推される例である。13は2号住居跡より出土した磨石で、裏面に磨き痕が認められる。

14、15は2号住居跡覆土から検出された打製石斧で、14は基部、刃部とも欠損、15は下半部が欠損している。18~26は土坑覆土からの出土である。17、18、26は打製石斧である。18は分銅形で、26は下半部が欠損



第187図 石器（1）

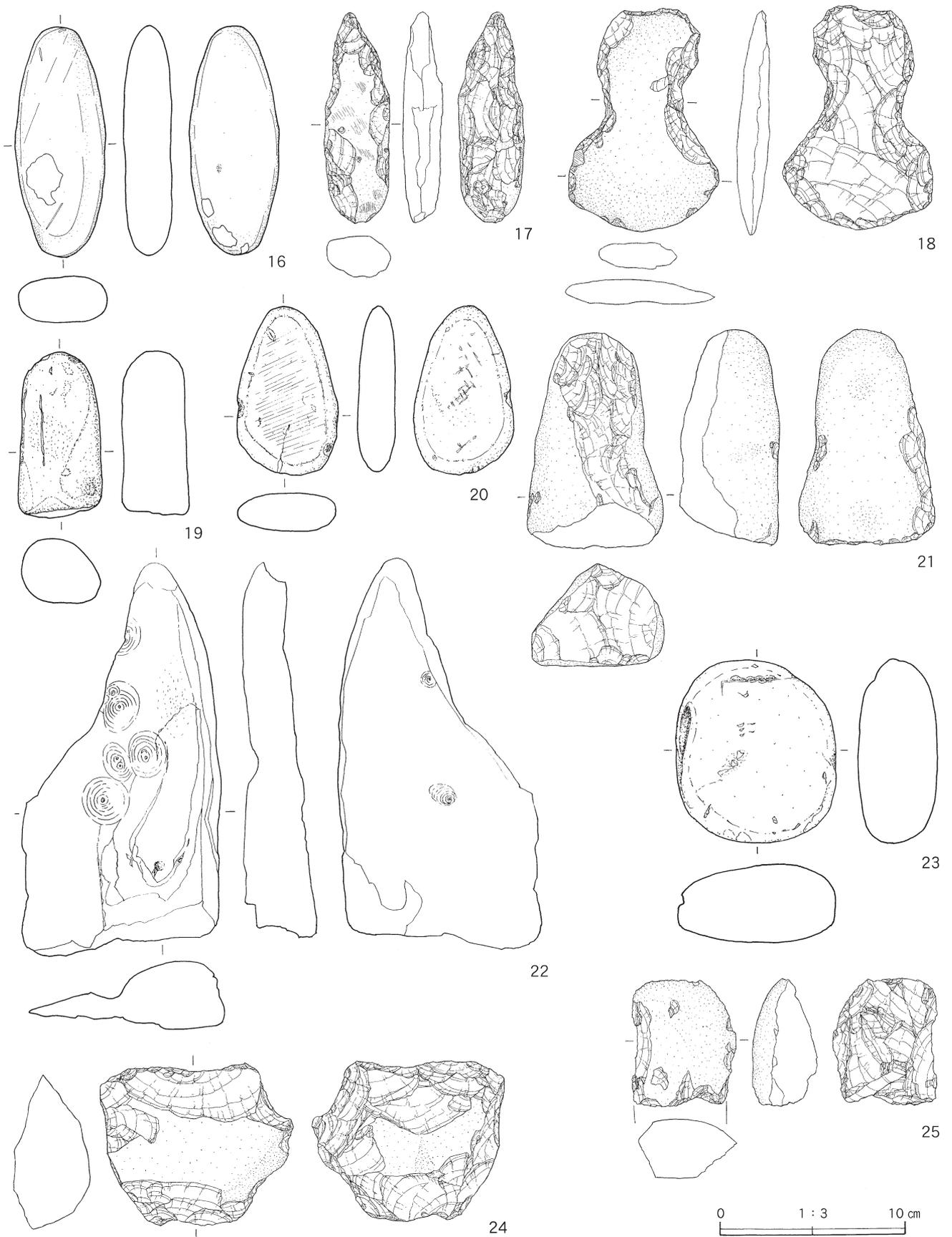
しているが、欠損後に使用した痕跡が認められる。21は一部に調整剥離が施されるスタンプ形石器であろう。19、20、23は磨石である。19、23は素材を大きく変える剥離痕はないが、一部に小さな剥離痕が認められる。22は多孔石としたが、裏面の凹みは小さい。また、石皿を転用した可能性がある。24は粗雑な剥離により成形しており、表裏に自然面を有する。スクレーパー的な機能も予想されるが、ここでは礫器とした。26は一部に自然面が残るが、その面には研磨痕が認められる。

26、27、29～34は2号溝跡覆土からの出土である。26、27はいずれも打製石斧の欠損品である。27は分銅形石斧の頭部と判断した。29～34は33を除き棒状のやや扁平な素材を用いている磨石ないし敲打器であろう。31、33は磨製石斧かその未成品の可能性も考えられる。32は小破片で明確ではないが、その石質等から石皿の破片と判断した。

28、35～39はグリッドより出土した資料である。28は打製石斧で側縁が内湾し、刃部付近が欠損後に刃部が再生されたか、そのまま使用した痕跡が認められる。35は磨石または敲打器で、端部に敲打痕が認められる。36、37はほぼ半裁された例で、棒状の素材を用いた磨石としたが、38は先端近くに浅い凹みが認められる。36は端部に敲打痕を有する。39は楕円形の磨石である。38は上下端部が欠損し、一部に沈線状の痕跡が認められる。38は断面形を含め、磨製石斧の未成品の可能性も考えられる。



第188図 石器(2)



第189図 石器（3）



第190図 石器(4)

第36表 第3次調査出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺構・グリッド	注記No.	備考
1	石鏃	2.5	1.9	0.8	3.6	チャート	SJ1	317	未成品
2	石鏃	1.5	2.0	0.3	0.8	黒曜石	SJ2	108	
3	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.7	チャート	SK62		使用痕あり
4	剥片	3.4	3.6	1.0	6.8	チャート	SJ4	173	使用痕あり
5	剥片	2.8	1.6	0.5	1.8	チャート	SJ1	103	
6	打製石斧	10.2	7.2	2.0	205.4	緑泥片岩	SJ1		多孔石の転用
7	磨石・敲打石	10.7	4.0	2.3	148.4	砂岩	SJ1	131	
8	磨石・敲打石	10.9	2.9	2.85	140.4	緑色岩	SJ1		
9	凹石	11.5	8.0	4.5	650.0	緑色岩	SJ1	314	
10	磨石・敲打石	11.7	3.5	3.18	177.8	緑色岩	SJ1	235	
11	磨石	9.7	13.7	6.2	945.0	緑色岩	SJ1	315	
12	磨石・敲打石	14.8	5.0	2.68	272.3	石墨片岩	SJ1	175	
13	磨石	7.0	7.2	5.4	411.2	砂岩	SJ1 炉		
14	打製石斧	4.5	3.3	1.3	30.8	フォルンフェルス	SJ2	3	
15	打製石斧	5.9	4.4	2.6	87.9	フォルンフェルス	SJ2	105	
16	磨石	12.6	4.8	2.1	281.6	緑色岩	SK25		
17	打製石斧	11.6	3.5	2.2	124.2	安山岩	SK30		
18	打製石斧	12.5	8.3	1.8	170.0	フォルンフェルス	SK84	2	分銅形
19	磨石	9.1	4.7	3.7	235.9	砂岩	SK84		
20	磨石	9.3	5.4	2.1	147.3	流紋岩	SJ2	124	
21	スタンプ形石器	11.9	7.4	5.4	590.0	砂岩	SK103		
22	多孔石	21.65	11.1	3.7	875.0	緑泥片岩	SK90	2	
23	磨石	10.5	8.8	4.3	640.0	黒色頁岩	SK124		
24	礫器	9.0	10.7	4.2	463.4	フォルンフェルス	SK55		
25	打製石斧	5.7	6.9	3.5	154.4	チャート	SK155		
26	打製石斧	8.2	3.9	2.1	94.6	緑色岩	SD2		
27	打製石斧	6.6	6.2	2.5	97.9	フォルンフェルス	SD2		
28	打製石斧	7.2	4.8	1.4	54.7	緑色岩	G8グリッド		
29	磨石・敲打石	9.8	3.75	3.6	187.4	緑色岩	SD2		分銅形
30	磨石・敲打石	6.1	2.1	2.2	47.9	流紋岩	SD2		
31	磨製石斧	7.8	4.4	2.4	162.4	緑色岩	SD2		未成品
32	石皿	6.6	6.4	3.9	147.0	安山岩	SD2		
33	磨製石斧	8.7	3.4	1.8	84.7	緑色岩	SD2		未成品
34	磨石・敲打石	9.8	4.0	3.3	234.5	緑色岩	SD2		
35	磨石・敲打石	9.3	3.9	2.2	111.7	緑色岩	D8グリッド		
36	磨石	7.5	3.5	2.1	112.6	緑色岩	J3グリッド		
37	磨石	9.5	3.8	2.3	143.1	砂岩	H8グリッド		
38	磨製石斧	8.7	6.2	4.4	371.0	緑色岩	H3グリッド		未成品
39	磨石	8.2	4.2	3.0	162.9	閃緑岩	C8グリッド		